隠密飛竜剣

高木彬光

隠密飛竜剣

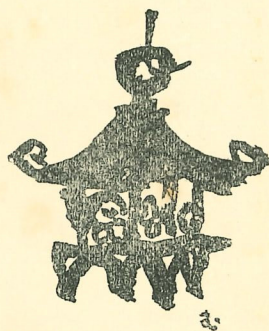
高木彬光

POPULAR BOOKS

隠密飛竜剣・高木彬光

時代長編

桃源社

三代将軍家光の極秘の指令を受けた、将軍家御指南役・柳生但馬守の長子、隻眼の剣士・十兵衛光厳が、泰平に酔う庶民の中に、今なお残る豊家の残党や、幕府に不穏の心を抱く不逞の浪士をさぐって北から南へ、遠く薩摩の地にまで、次々起こる事件を追って、波瀾の旅を続ける、隻眼剣法隠密旅。

隠密飛竜剣・高木彬光

桃源社　290円

●高木彬光・時代長編・　既刊発売中

隠密月影帖
由井正雪のかくし財宝をめぐって争う江戸の侠盗たちと隠密逆隠密、そして大奥女性の醜い争い。　月の巻・影の巻
各巻 二九〇円

雪姫絵図
将軍息女・雪姫の失踪に端を発して、ますます謎の深まるかくれ切支丹の陰謀に、時の奉行・遠山左衛門尉の登場。
三六〇円

御用盗変化
徳川幕府の崩壊を策する薩摩藩が江戸に送った御用盗と女辻斬り……幕末擾乱の江戸を背景に描く波乱の人間模様。
二九〇円

折鶴秘帖
海賊雲竜丸の遺宝を繞って江戸の顔役・河内山をはじめ天保六花撰を彩る悪党たちが江戸を舞台に展開する興味長編
二九〇円

蛇神魔殿
人間を悪鬼にかえる魔法の書・蛇神秘伝書と、謎の秘薬をめぐって天下を狙う悪魔の触手は将軍家慶の身辺に迫る。
二九〇円

隠密飛竜剣

高木彬光

ポピュラー・ブックス

目次

隠密飛竜剣

装幀　村上　豊
挿絵　東　啓三郎

第一話　隻眼剣法

悲願百人斬

鹿島、香取の両神宮といえば、武術の神として、知らないものもないくらいである。

だが、大阪冬の陣、夏の陣、この両役が徳川方の完勝に終って、天下が風枝も鳴らさぬ太平を誇るようになって来ては、神々もむかしほどの御利益を失って来たようだった。

もちろん、武芸は武士の表芸だし、尚武の精神が侍たちの心からすべて失われたわけではない。ただ、無位無官の天下の浪人が、槍一筋、刀一ふりの働きで、一国一城の主にまで出世出来るような機会は、戦国の乱世を終ったいまは、もう永久

に帰って来ないといってもいいのだ。
武術の修練——それが、立身出世のための手段として価値を失って来れば、道のため、道を求めるという人々は、いつの世にも少ないものだから、夜をこめてまで、この社に参篭して、神の守護を祈ろうとする人々が少なくなって来たことは無理もない。
だが、今月になってから、珍しく、三七二十一日の間、この社香取の宮にこもって、行を続けている浪人がいた。
浪人といってもまだ年は若い。ようやく、前髪をおとしたばかりの十七八と思われるが、六尺近いその体は、精悍（せいかん）そのものといえるし、容貌もいかにも戦国武士の血をそのままうけついだような異相だった。
神官が、その生国、名前をたずねても、
「名は村田小五郎と申します。生国は美濃、父の名はお許し下さい」
といったきり、その後は一言も語らない。
大阪方の残党に対する奉公禁令はいまでも厳存しているが、この年では、自らその戦に参加したということは考えられないのだ。
恐らくは、その父親が大阪方の恩顧をうけ、関ケ原なり大阪陣なりに参加したのだろう。その生死はべつとしても、浪々の身となったため、この若侍もつぐべき家を失って、単身世に出ようと覚悟をきめただろうと思った神官は、
「まあ、手前などの存じているところでは、浪人お召し抱えの禁令は、それほど長く続くものではない。数年もすれば、御法度もゆるむのが通例だが、お手前はまだ年も若いし、神様の御加護を願っ

て、武芸の修練にいそしめば、いずれは花咲く春もあるであろう。その日まで、楽しみにお待ちなされ」
となぐさめたが、彼はただ、
「ありがとうございます」
といって、かるく頭を下げたきり、それ以上は何ひとつ語ろうともしなかった。
そして、三七二十一日目の夜、あらむしろの上に端座して、神示を聞こうとしていた彼は、連日連夜の疲れが出たのか、ついうとうととまどろんでしまったが、突然、何かの声を聞いたか、愕然としたように眼を開いた。
「何、何とおおせられました？　百人を斬れ——そうすれば、剣の奥義にも達し得られ、家をおこす道も開けるであろうとおおせられたのでございますか？」
神示としては、たしかにこの上もなく物騒なお告げなのだ。恐らくは、彼の心に宿っていた何かの妄想が、心身の疲れとともに、ふわっと脳のどこかをかすめて、このような幻聴を聞かせたのだろう。
「まこと、まことでございましょうか？」
村田小五郎は、まだ疑念をすてきれないように、社殿の奥へむかって、鋭く問いかけた。もちろん、答えのあろうはずはない。ただ、その時奥殿の方から、ちゃりんと、鎧の金具がふれあうようなかすかな物音が聞えて来たために、彼は今までの確信をいっそう深めたらしい。
「ありがとう存じます。ありがとうございました。これにて、私の一念もとどきました」
憑（つ）かれたように、こんな言葉をくり返しながら、彼は何度か社殿に頭を下げ、むしろを小脇にかか

えてこの場を立ち去った。
だが、三の鳥居の前まで来たとき、
と声をかけて来た侍がある。
「待たれい」
「何か拙者に御用事か?」
「うむ」
横参道から本参道の石畳の上に姿をあらわしたのは、年のころ三十五六の武士だった。
「この天下太平の世の中に、三七二十一日の参篭までして、武運の長久を祈られるとは、世にも奇特な御人と思ってやって来たのだ。何か体得したことでもおありかな?」
という言葉には、もちろん何の悪意も感じられないが、小五郎は、何を思ったか、噛みつくように、
「まことに神の御力は広大無辺、拙者もそのあらたかなる御託宣で、一瞬に開眼したような思いだが、貴様のように不信心ないかさま武士には、その秘密を話して聞かせたところでしかたがあるまい」
「何、何と!」
これが、小五郎の巧みな挑発とも知らぬこの相手はとたんにいきりたった。
たしかに、武士たる者が、面とむかって、いかさまの何のとののしられては、怒らぬ方がふしぎなのだが、刀の柄に手をかけながら、いくらか気持をおししずめたか、
「なるほど、見たところ年もわかし、連日の疲れに心身も参っているのであろう。今の雑言は聞きすてにしてやろう」
と上ずった声でいった。
「雑言ではない。疲れのあまりの譫言でもない。正真正銘腹の底からそう思ったから申すのだ。貴公の顔を一目見ても、いかさま武士だということはすぐに分る」
「何と」
最初の一言は、かるく聞きのがすことが出来たとしても、二度までこういう悪罵をくり返されたのでは、武士として、だまっておられないのも当然だったろう。
総身をぶるぶる戦かせながら、
「抜け! 抜け!」
と呼びかけて来た。
「なるほど、はたし合いをいどまれるか。刀を抜けば、其方がいかさま武士だということは一瞬にわかるが、さりとて神聖な社前を血で汚すのもおそれあり、その辺の空地までまいるとしよう」
「うむ」
二人は冴え返る月光の下を、近くの空地へ急いだ。畑の近くの草原に、露をふみしめながら立ちどまると、
「美濃浪人……村田小五郎」
「相馬中村藩士、馬廻役、百石、関源右衛門」
鋭い声で名のりあうと、二人は同時に刀をぬき、やっと一声気合をかけたまま、動きもせずに相対した。

だが、源右衛門はその瞬間、眼のくらむような衝動を感じた。
藩中でも指折りの使い手として、彼はこのような若僧は、何ほどのことやあらんと、今までなめきっていたのだ。
精々、相手の刀をうちおとし、その無礼と高慢をたしなめた上で、つっぱなしてやるつもりだったのに、ふしぎなくらい、相手の身には毛一筋ほどの隙もない。
もちろん、この年輩では、多年の修練などは思いもよらないことだが、さてはよほど生れながらの才を持ち、天才名人とも呼ばれるに足る人物なのかと、源右衛門も身の凍りつくような恐怖を感じた。
「や！」
「おお！」
相手の気合は何とかはね返したが、源右衛門は、明らかに自分の気合負けをさとった。
そして次の瞬間、
「まいる！」
文字通り、魔剣といえる一閃が、眼にもとまらぬ円弧を描いて、源右衛門の右肩を襲って来た。辛うじて、その一撃ははらいのけたが、ほとんど理法を絶する反動で、はね返って来た剣をうけとめることは出来なかった。
「一人目」
源右衛門は、あっと叫んでよろめきながら、自分にはわけの分らぬこの一言をあの世への土産に聞いていた……。

血刀をぬぐった小五郎の顔には、何の悔恨も憐憫の情も見られなかった。
よほど刀に憑かれ、血に飢えた、異常な偏執的な性格なのだろうか、彼はそのまま社頭にひっ返し徹宵そのあたりを警護している番所の者に、
「拙者は濃州浪人、村田小五郎と申す者、ただいま武芸修業のため参篭中を、相馬藩士関源右衛門と申される御人から、いかさま武士と罵倒され、その上真剣勝負をいどまれましたので、やむなくこれに応じ、幸いに勝を得ました。ただ、社前近くを血で汚したことはまことに恐れあり、つつしんでおとどけ申しあげます」
と、淡々たる調子でいってのけた。

鬼の小五郎

闇討、だまし討の類ならいざ知らず、武士たる者が、その面目を保つため、真剣勝負をした——ということになれば、これは勝者が絶対有利の立場におかれる。
まして、この場には何の目撃者もなく、むこうも刀をぬきあわせ、正面から斬られていたことだから、とどけをうけとった当局としても、小五郎の言葉を全面的に信用する以外は方法もなかった。
小五郎には、何のとがめもなくすんだが、それに対して、あわれをとどめたのは、関源右衛門の一族だった。
たとえ、相手は誰にもせよ、理由はどのようなものにもせよ、武士たるものが凶刃に倒れては、その仇討がすまないかぎり、その家は断絶するということが、武人の家の常法なのだ。

源右衛門の弟で、二十一歳になる源次郎は葬儀を終えると同時に、藩へ仇討の願いを出して許しを得たが、自分でも腕が兄に格段の相違があることを認めている源次郎は、なかなかすぐに、相手を探し出して、勝負をいどもうともしなかった。
彼はそれから江戸に出て、木挽町の屋敷に柳生但馬守をたずね、赤誠をこめて入門をたのみこんだ。
当主の柳生但馬守は、禄高こそ一万石の小名だが、将軍家お手直役として、直接将軍への教導にあたり、日本の武芸者では最高の名人といわれている。
その子供たちも、独眼竜といわれる十兵衛光厳はじめ、惜しくもその後早世したが、名人大器といわれた刑部友矩、後に父の跡をついで柳生飛騨守となった又十郎宗冬など、名人達人だけがそろっている。
源次郎が、師とあおぐべきならこの人こそ——と思いつめたのも当然のことだったかも知れないが、何といっても、柳生流はそのように将軍家御教導を最高の役とする家柄だけに、その門弟も旗本だけにかぎられ、浪人中の陪臣などは、めったに入門を許されるはずはなかった。
源次郎は、それを承知で、何度も根気よく柳生家の門をくぐった。何度門前で追い帰されても屈せずに、熱誠こめて、自分の衷情を披瀝したのだ。
その真情が遂に人を動かしたのか、彼は異例のはからいで柳生但馬守に引見を許された。真心のこもった彼の物語を黙々と聞いていた但馬守はやがて口を開いて、
「其方の申すことはよくわかった。わし個人としては、其方の願いを容れてやりたいと思うがわが家の家憲はこれを許さぬ。ただ、武芸の道は天下に広大無辺、もし其方が柳生の家に学ばずとも、人に

すぐれた天分があり、人に倍する修業を積めば、あっぱれ達人の域に達することも不可能ではないはずだ」
ときびしい語調の中に一抹の温情をたたえていった。
「先生」
「幸い四谷左門町には、丸目玄蕃という人物が住んでいる。彼の父、丸目蔵人とわしとはもと上泉伊勢守先生の相弟子、わしが添書を使わすゆえ、彼のもとへ参って修業をつむがよい」
「先生、ありがとう存じます！」
畳の上にひれふして、感涙にむせんだ源次郎の頭上には、まだ但馬守の言葉がつづいていた。
「この際、其方の将来のために、はなむけの一言を使わそう。あらゆる術、あらゆる芸に通ずることだが、特に剣の道はきびしくけわしい。其方もこれから数年の修業を積めば、一応の使い手といわれる境地にはたどりつけるであろう。使い手、上手、達人、名人——そのおのおのは、紙一枚の違いにすぎぬ。だがこの一枚の差は、そのままに生死千里を開く道となるのだ。この一枚の差を縮め、使い手から上手、上手から達人に至るためには、それまでの努力精進にさらに数倍するものが要る。それをゆめゆめ忘れまいぞ」
もちろん、柳生家の奥義なりは、剣の道の秘伝なりは、こんな言葉で簡単に伝えられるものではないはずだ。ただ、但馬守としては、人を見て法を説け——という教えのように、彼を武芸の初心者と見て、噛んで含めるような教訓を与えたのだろうが、源次郎はその教えにただ感泣するばかりであった。
それから彼は、丸目玄蕃のもとを訪ね、入門のことをたのみこんだ。

丸目蔵人の三男であるこの人物は、やはり剣の道では鬼才と呼ばれている。もちろん、高禄をもって召しかかえようという諸侯の望みは、今でも跡を絶たないのだが、彼はどういう心境からか、そういう申し出には耳も借さず、この江戸の一隅に道場を持って、浪々の生活を続けていた。

幸いに、源次郎は内弟子として入門を許されたが、その前には、きびしい修業の道が待っていた。

「剣の道は道場ばかりできわめつくせるものではない。常住坐臥、たとえ床の中に横たわっていても、修業を忘れてはならぬのだ」

丸目玄蕃の言葉は、ただの表現のあやではなかった。寒暑を問わず、昼夜をわかたず、人間の体力の限界をはるかに超越する荒稽古がつづいた。そして、進歩は自分でも歯ぎしりするほど遅かった。

その間にも、村田小五郎の名声は次第に高くなっていた。

ある者は、佐々木小次郎の再来と称し、ある者は、鬼の小五郎と彼を呼んだ。

赤城山の奥にふみこんで、その山奥にたてこもる山賊十数人を斬りすてたとか、浅間山では妖怪変化を斬りすてたとか、あるいはその腕を見せろといわれて、相手の元結だけを斬って剣をとどめ、髪の毛には一本も傷をつけなかったとか、いろいろの噂は風にのって、いつの間にか、彼の耳にまで伝わって来た。

もちろん、そういう噂のすべては真実ではなかったろう。人の口から口へ伝わっているうちに、いろいろ尾鰭を生じ、枝葉がついて、到底信用も出来ないくらいの大きさになっていったのだろうと思いながら、源次郎は心の中に激しい焦慮を感じないではおられなかった。

「愚鈍者！」

「能なしめ！」

道場では、丸目玄蕃が、その心まで見やぶったように、きびしい太刀と言葉をあびせた。

「仇を討とうと思えばこそ、迷いも生じ、焦りも出るのだ。まず、おのれに勝ち、剣の道をきわめぬか、その上でなら、仇は討とうと思えばいつでも討てる！」

鞭うつような師の言葉は、自分のためを思ってくれればこそだ――と知りながら、源次郎は心がさくれだつような思いだった。

入門以来、一年が過ぎ、二年が過ぎ、三年目となっても、師は彼の進歩を認めてくれなかった。

しかも、村田小五郎の名声はこの間にも次第に上り、尾張大納言義直が、彼を召しかかえようとしているという噂さえたち始めた。

彼はもう仇討の気力さえ失いかけた。

ちょうどそのころ、源次郎は、四谷塩町に住む安原三右衛門という浪人の娘、おたかと割りない仲になった。

もちろん、二人とも浮いた好いたの仲ではない。めでたく修業のかいあって、仇討本懐をとげた上はと、二世を誓いあった神聖な恋のつもりだったが、いつこのことが耳に入ったのか、丸目玄蕃は彼を奥の一室へ呼んできびしくいいわたした。

「源次郎、今日かぎり其方を破門いたす。理由は其方の胸におぼえがあるであろう。わしの許しがないかぎり、女に近づいてはならぬとは、入門の際にきびしく言い聞かせたはずだ」

涙とともに、弁解をくりかえしたが、その効はなかった。

友人たちがどのようにとりなしても、丸目玄蕃の心を動かすことは出来なかった。入門後三年、地

獄を見るような絶望に追われて、関源次郎は丸目道場の門を去った。

復讐成らず

村田小五郎を尾張家で召しかかえようという動きがあったことは事実だった。

小五郎自身も、わざわざ尾張名古屋の地を訪ね、家老山中久右衛門の家に滞在して、吉報を待っていたくらいだが、衆議はこの二人の予想に反して思わしい方向へは運ばなかった。その反対理由も、

「大阪陣もめでたく徳川方の勝利に及んで、四海風枝をも動かさぬ太平の御世となりましては、もうしばらく、戦も起りますまい。それなのに、とかく噂のある人物を、新たに召しかかえられるとは、徳川宗家、大公儀への聞えもどうでございましょうか」

というような消極論をはじめ、

「彼の腕前は恐らく抜群のものではございましょうが、ただ彼は今まで多くの人を斬っております。中には、たとえば赤城の山賊のように、衆人への害を除いたと思われるものもございますが、一応の武士を斬った場合、先方より仇討の申出があったなら、武士としてこれを受けて立つよりほかにはございますまい。たとえ、理否は問題外としても、そのような人物を召しかかえられ、たびたび仇討さわぎを起すようでは、当家の不名誉というばかりではなく、とんだ不祥事も突発するおそれがあるのではございますまいか」

というような常識論だとか、

「あの人物は、類まれな凶相の持主でございます。たとえ、腕はどれほどたち、本人は誠心誠意、奉

公を励んだにしてもそのような凶相では、必ず家内に禍を起し、殿にも災厄を及ぼすのではございませんか。不測の災なら知らぬこと、そのような人災は未然に防止すべきでございましょう」

というような神秘論までが、重職一同の間にとりかわされなかなか決着を見ないというのだった。

村田小五郎の気をくさらせてはならぬと思ったのか、山中久右衛門は腫物にでもさわるように、

「村田氏、いましばらくの辛抱じゃ。殿も御自身、貴殿を御引見されたいとの言葉があったゆえ、こうして尾張の地にまで貴殿においでを願った次第だが、あいにく殿は数日来、風邪にて御発熱、御臥床中のため、お目見得も出来ず、無責任な噂も乱れとんでいるが、元来御壮健な殿ゆえ、数日中には、御本復なさるであろう。もしお目見得が無事にすみ、殿が貴殿を気にいられれば、あとは鶴の一声で、無責任な批判もたちまち跡をひそめるであろう」

と小五郎をなぐさめていたが、その翌日には尾張家重職の思いもよらなかった事件が持ち上った。

恐らくは、丸目玄蕃に見はなされ、今はこれまでと覚悟をきめて江戸を去った関源次郎が、村田小五郎尾張にありとの噂を聞いて、東海道を日を夜についでかけつけて来たのだろう。正式に、尾張藩へ仇討の許可を願い出て来たのだ。

これが、家臣に召しかかえられてからならともかく、尾張藩としては、中村藩から正式の仇討免許状をうけてやって来た、この侍の願い出はむげにつっぱなすわけにも行かなかった。早速、会議を開いて、仇討の日どりを定めたのだが、その日が五日後だということと、相手が丸目玄蕃の道場で、三年にわたって修業を積んだ男だということを聞かされても、小五郎はただ口もとに冷たい笑いをうかべてうなずくばかりであった。

五日後、仇討は馬場先の竹矢来を組んだ空地で行われた。折柄の快晴にめぐまれて、命がけのこの

仇討を見ようとする人々は、矢来の外に立錐の余地もないほどにつめかけていた。
定刻とともに、二人は左右の幕の中から、この決戦場に姿を見せた。
もちろん、鉢巻、襷がけ、袴の股だちをとった勝負の姿だが、木剣竹刀の勝負とは違って、その手にさげた真剣は、必ず一方の血を見ずにはおさまらないのだ。
「村田小五郎！」
敵の機先を制するように、まず関源次郎は呼びかけた。
「汝に討たれ、香取社頭に空しく散った兄の霊魂をなぐさめんと、弟源次郎、三年の修業の後に推参いたした。いざ、尋常に勝負！」
「汝の兄、関源右衛門には、なにも私怨があったわけではない。武士の意地から、真剣勝負をいどまれて、やむなくわが手にかけたまでだが」
火のように激している源次郎に対して、小五郎は氷のように冷静だった。こうして答える言葉も、日常の会話のように淡々として、何の抑揚も変化もない。
「逃げをうつのか？　この期に及んで！」
「勝負を逃れようというのではない。ただ、一旦刃をまじえてからでは、その事情を話して聞かせる暇もあるまいから、あの世の土産に……」
「問答無用！」
「そうか。そこまで汝がいいはるならば是非もない。ただ、助太刀はつれてまいらなかったのか。いま一人、相手がいれば、こっちも数がととのうのだが」
「兄の仇に助勢はいらぬ。いざ！」

源次郎はさっと白刃の鞘をはらい、一瞬後には、小五郎の手にも真剣が閃いた。
この後、わずか一瞬は、武芸者同志には、数年、十数年という時間を、微妙な一点に凝縮させたものなのだ。
白刃にふれる相手の剣尖の微妙な感触は、そのまま数倍、数十倍、数百倍に拡大されて、敵の強弱、流儀、そしてこれからの動きなど、種々様々のことを伝え語って来る。わずかの迷い、乱れがあっても、それは魂の鏡を曇らせ、絶対の死地へ追いやられる結果をまねくのだ。
――これは！
源次郎はこの一瞬に、自らの敗北をさとった。三年前の彼だったら、恐らく相手の腕前も悟らず無我夢中に、敵にむかって突進していたろう。
だが、三年間の修業は決してむだではなかった。少なくとも、彼は相手と刃あわせしたこの瞬間に、敵が自分とは格段の腕を持つ達人だということを悟れる境地にまでは成長していたのだ。
「やっ！」
鋭い気合に、敵の動きをさそって見たが、その刃はまるで磐石のようだった。
死んだ兄の顔、柳生但馬守と丸目玄蕃の顔、そして恐らく矢来の外の群集にまじって、瞬きもせず自分の動きを見つめているに違いないおたかの面影が、電光のように、その網膜をかすめて来た。
このままでは、必敗、必死というほかはない。ただ、唯一の活路は、敵との刺し違いを決意して、生死を、運命を天にまかせるばかりだった。
「やっ！」
全身を火の玉のような気力に燃えあがらせて、彼は刀もろともに、相手の内懐へ飛びこんで行っ

た。
　一挙に相手を倒すか倒されるか、すべてを賭けた勝負だったが、その切先には全然何の手ごたえもなく、一撃後には焼きつくような激痛とともに、彼はすべての意識を失いつくしていた。
「九十九人目……」
　血刀をゆっくりぬぐいながら、村田小五郎は青空に浮かぶ白雲に、憑かれたような眼をあげて、憑かれたような一言をつぶやいた。

百人目の男

　それから三日後、村田小五郎は尾張一の宮の竜田屋という宿に滞在していた。
　ほとんど一太刀に、関源次郎を斬り倒した小五郎の腕前は、たしかに尾張家の家中を驚倒させたが、それと同時に、彼の人物に対しては、またとかくの風評が強まって来たことも事実だった。
　まさか、武士として、相手の本懐を達せさせるために、斬られて死ぬのが当然だったというような声までは出なかったが、こういう場合、仇討にやって来た相手を返り討に討ちとったというのでは、どうしても憎しみが集りやすい。
　それに、義直の病気はまだ本復しなかったし、事態を苦慮した山中久右衛門は、しばらく彼を名古屋から遠ざけて、事態の収拾をはかろうとしたのだ。
　だが、そういう周囲の動きなどは、全然小五郎の念頭には思い浮かばなかったらしい。
「あと一人、あと一人斬りさえすれば満願だが……」

　寝床の中へ入ってからも、小五郎は憑かれたように、天井の節目を数えながらつぶやいていた。どのようにして、誰を斬ったかはべつとして、人間一人を斬るということは、体の傷はともかく心に見えない傷を残さずにはいないのだろう。
　三年前にくらべれば、その人相もいっそう凄気と鬼気を増したよう、昼にはさほど目立たないその凶相も、うす暗い行燈の光のもとでは、いよいよ厳しさを増し、暗さを加え、生きている悪鬼のように思われる。
　そのうちに、音もなく襖が開いた。
「御免下さい。もうおやすみでございますか」
と聞えて来た女の声に、女中かと思いながら、
「かまわぬ。入れ」
と答えると、静かに二十がらみの女が部屋へ入って来た。宿屋の浴衣を着ているし、髪かたちから見ても女中とは思われない。小五郎はぐっと体を床の上におこして、
「そなたはいったいどなたかな?」
　とたずねた。
「はい、わたくしはこの宿の客で、お千代と申します」
「それで、用事は」
「用事とは……女の口から、そこまでいわせるおつもりでございますか?」
　たとえ、宿の浴衣を着ているといっても、その体なり姿なりから判断したところでは、決して玄人女とは思えない、むしろ武士の血をひいた女ではないかと見えるのに、よほど思いつめているのか、

その全身からは、凄気とでも呼びたい雰囲気が発散していた。
「わしを口説くつもりか？　女の身で」
　唇の端を歪めて、小五郎は冷たく笑った。
「はい、三日前、名古屋での勝負を拝見いたしましてから、あなたさまの凛々しい面影が、瞼に焼きついてはなれません……女と生れた冥利には、たとえ一夜一度なりとも、あなたさまのお情がいただきたく――人に笑われることも承知で、こうしてしのんでまいったのでございます」
「うむ、そなたの氏素姓までは知らないが、そうまでいわれてこのままつっぱなしては、こちらも男の恥だろう。さあ、襖を閉めて、早くこちらへまいるがよい」
「はい……」
　女は後手に襖を閉めて、小五郎の方へにじりよって来た。
　だが、小五郎の手がその肩にかかろうとした瞬間、どこにかくし持っていたのか、女の手には、青白い懐剣の光がきらめいた。
「何をするのだ。――といいたいが、お前の殺意に気がつかぬほど、わしを未熟者と思っているのか？」
　女のきき腕を逆にねじあげて、小五郎は冷たく笑ったが、女は大きく身もだえしながら、
「無念、無念、殺すがよい！」
　と血を吐くような声で叫んだ。
「わしは今まで数かぎりなく人も斬った。その数はあわせて九十九人――たしかに人の恨みも買っているではあろうが、それはみな、武士として納得ずくの真剣勝負、このようにだまし討をされるおぼ

えはない。其方の名は何という」
「関源次郎の妻、たか」
「あの男か？」
　まだ瞼の上に生々しく焼きついている男の血みどろの骸を思い浮かべながら、彼は嘲笑うように言葉を続けた。
「そなたもどうせ、武士の娘に違いあるまいが、それならば拙者と彼の腕の違いは一目で見やぶれたであろう。兄の仇をねらうもよし、夫の仇を討とうとするもそれもよかろう。ただ、丸目道場で三年の修業を積んだ彼でさえ討ちとれなかった拙者をば、たとえ閨で不意をねらったとしても、止めを刺せると思っているのか。馬鹿、馬鹿な」
　夫の仇を討つためには、どんな辛い芝居でも打とうとしてあのようにはしたないまねまでしたのに違いないが、今となっては、自分のみじめさ、あわれさが、胸にひしひしとこみあげて来るのだろう。おたかは、大波のように体を身もだえさせて、しゃくりあげていた。
　その時、突然襖が開いて、一人の侍が部屋へふみこんで来た。宿の浴衣は着ているが、身長は五尺そこそこだし、眼も右が醜くつぶれて左の眼が爛々たる光をはなっている。
「不義者！　現場を見とどけたぞ！」
　これが思いがけない第一声だった。さすがの小五郎も、今度ばかりは呆気にとられ、
「不義者とは何だ。この女は其方の女房だと申すのか？」
　と問い返した。
「いかにも、拙者は八木原重蔵と申すもの、この女は拙者の女房でお徳という。不義の現場を捕えた

ら、重ねておいて、四つにしてもこちらにとがめはかからぬはずだ」
「斬るというのか？　拙者を、鬼の小五郎といわれる拙者を」
「斬る！」
あるいは新手の美人局かと、一瞬疑いかけた小五郎は、相手のこの挑戦に思わずにたりとした。
そのきっかけは何でもよい。要は、真剣勝負の型式に持ちこめるかどうかということなのだ。純粋の武芸の修道というよりも、彼はいま人を斬りたくて斬りたくてたまらない心境になっていたのだ。
それをこうして、百人目の男が、むこうからとびこんで来てくれたのだから、文句のつけ場所もないくらいだった。
「それではすぐ支度をしてまいれ、場所はこの宿の右の空地——女房の方は、貴様の後で成敗する」
この男は、盲蛇におじずなのか、それとも頭のどこかが狂っているのか、鬼の小五郎といわれる男に、これだけの大言を吐きすて、女の手をとって部屋を出た。
それから小半刻の後に、二人は月光をあびながら、横の空地で相対した。
「汝は拙者が倒す百人目」
「何をいう。汝こそ今夜が百年目」
短い言葉に、相手の気持を激発しながら、二人はほとんど同時に刀の鞘をはらった。
だが、その剣尖をふれあった瞬間、小五郎は何ともいえない衝撃を感じた。
この相手は決してただものではない。
その剣尖には、いままでに彼もおぼえのなかったほどの圧力がこもっている。
あるいは狂人か——と思った彼の予想もがらりとはずれたのだ。

いつの間にか、小兵の体がぐんぐん大きくなり、仁王のように思われて来た。
ただ、こうして剣をかまえて立っているだけで、彼は激しいめまいを感じた。
「やっ！」
意を決し、勇を鼓してふみこんだとたんに勝負はきまっていた。鬼と呼ばれた小五郎も、今度ばかりは二太刀とまじえるひまもなく、この相手に屈し去ったのだ。
「ありがとう、ありがとう存じます。おかげでわたくしも夫の仇が討てました」
横からとび出して来たおたかは、この侍にすがりつき、涙を流していい出したが、相手はかるく首をふって、
「何もわしはそなたの夫の仇を討ってやろうとして、この男を斬ったわけではない。ただ、そなたがそのきっかけを作ってくれたことには礼をいわねばなるまいが」
「それでは……」
「わしは尾張家の重職からひそかに依頼をうけたのだ。殿と家老の山中殿はえらく彼に執心だが、下手にこの人物をめしかかえては家の大事をまねく恐れもある。そのために——といわれて隙見をして見たのだ。だが、この隻眼に見たところでも、彼はまれに見る凶相悪相の持主、恐るべき殺人剣の使い手と感じた。それ故に、一殺多生の理によって、天下の難をのぞいたまで」
「あなたさまのお名前は？」
「わしか？」
この侍はかるい微笑をうかべながら、武芸に関心を持つ者なら知らぬ者もない名を名のった。
「わしの名前は柳生十兵衛光厳」

第二話　神変紅葉狩

柳生流かたり

つるべおとしの秋の夕日は、はやくも飛騨の山波にかたむきかけ、諏訪の湖のさざ波もきらきらと黄金の色に輝いている。

ここは下諏訪の町はずれ——中山道でも重要な宿場で、それも黄昏時に近いとあっては、人馬の往来も、追われるようにあわただしかった。

ただ、その一方では、どうせ今夜はこの近くで泊りと腹をきめて、街道筋の茶店にゆっくり腰を休め、菊の香りをのせて来る秋風と湖の上の残光をめでながら一服している旅人の姿も見うけられた。

そんな人々の中に交ってひときわ異彩をはなっていたのは一人の大男の武士だった。

眼は俗にいう三白眼、ふとく短い眉毛に髭もじゃの顔は何ともいえぬ凶相だし、あくまでたくましい筋骨と相まって、全身にはすさまじい凄気を感じさせる。

ほかの旅人たちも恐れをなしたのか、近くへよりつこうともせず、なるべくはなれた席に坐っていた。

「ちえっ、これは何という茶だ。まるで枯枝を煮つめたような味ではないか。こんな代物で茶代をとるとは、盗人も同然だぞ」

ひたすらおそれいっている亭主を相手に、侍はさかんに毒づいている。こんな所に文句をつけて、茶代をただにしようというさもしい了見なのか、まるでかみつかんばかりの勢いだった。

「へえ、申しわけございません。ただいま、すぐおとりかえいたしますから、それでお許し下さいまし」

「ふむ、文句をいわれればよいものを出す、いわれなければ、知らない顔をしていると申すのだな。そもそも、そのような考えが気にくわぬが、亭主、いったいその方は拙者を何者と心得おる？　旅の埃にまみれておるゆえ、どこかの田舎侍とでも思ったか知れぬが、われこそ、柳生道場の四天王の一人、丸目蔵人三郎なるぞ」
代々、将軍家お手直役をつとめる柳生家の名前を持ち出されその高弟と名のられては、この亭主が腰をぬかさんばかりにちぢみ上ってしまったのもむりのないことだった。
「柳生……柳生様の御門弟で」
やっとそれだけの言葉を口にすると、眼を大きく見開き、口をあんぐりとあけたまま、その後は言葉も出ないままだった。
柳生流は、一名お止流ともいわれ、将軍から特に許された旗本のほかには入門も認められないほどきびしい流派なのだ。その高弟が、こういう所にあらわれるのも珍しいが、その名を聞いてびっくりしたのか、この侍の一番近くに坐っていた老人が、急にぷっと茶を吐き出し、はげしくせきこみはじめた。
運わるく、その一しずくが、この侍の足のあたりにとんだからたまらない。
この侍はたちまち血相をかえてしまった。
「やい、そこなやつ、いったい何がおかしくて吹き出しおったのだ。何故に、拙者に唾をかけおったのだ。柳生流の高弟と名のったのがおかしいか？　百姓ふぜいが武士をなめてかかるとは許せぬ振舞いだが、それはどうしてわびるつもりだ」
と刀の柄に手をかけた。

真青になった相手は、地べたに頭をすりつけて、
「粗相……粗相でございます。唾をかけたなどは滅相もないことで、お許し……どうか、お許しを……お怒りはごもっともではございますが、なにとぞ、年に免じまして……」
と、必死に哀願した。
「ならぬ！　手討にいたすから覚悟しろ。丸目蔵人、いまだかつて、このような恥辱をうけたことはない。さあ、そこへ直って念仏などをとなえるがよい」
侍はさっと刀をぬきはなった。茶店の亭主も、ほかのお客も、みんな青ざめた顔をして、この成行きを見まもっているばかり――
「お助け……お慈悲を……おわびのしるしには何なりと……」
この老人は、最後のあがきのように叫びたてたが、この一言が、侍の心を急にやわらげたらしい。
「ふむ、何なりと――と申すのだな。そういえば、こちらも少し大人気なかったかも知れぬ。考えて見れば、その方ごときを刃にかけるのもあわれなこと、誠意を見せるのであれば思いなおさぬものでもない」
何か曰くありげにいったとき、この店の片隅で静かに事の成行を見まもっていた旅装束の小兵の侍が、つかつかとこの大男の前に進み出た。
「どなたか知れぬが、侍の身なりで強請(ゆすり)かたりを働くとはいかにも見苦しい。こちらの男の粗相をいい口実に、そのようなまねをなさるとは、武士の面汚しではござらぬか」
この小男は臆する色もなくいってのけたが、相手はたちまち顔を真赤にして、
「こやつ！　何ということを……その方は片目でこそあれ、つんぼではなさそうだが、いま拙者が名

のった名前が耳に入らなかったのか。柳生の四天王、丸目蔵人……」
「はて拙者の見知っている丸目蔵人とは、かなり顔かたちも違うようだが……いつの間に、そのようにおかわりなされたかな」
「お、おのれ！　よくもさような悪口雑言をのめのめと……拙者が丸目蔵人であるか否かは、刀にかけてあかしを立てようぞ！」
よほど癇癖の強い性分なのか、この大男は赤鬼のようになってどなりたてた。しかし、相手は平然として、
「少なくとも、柳生門下には強請など働くような男はないはずだ。その方が先刻刀をぬいたとき、形はえらく仰々しかったが、殺意はまるでなかった。最初から、金をいくらかせびりとるつもりだったのであろうが」
「ええ、こやつ、口にもとでがかからぬと思ってよくもつべこべと、抜け、抜けッ！」
大男はますますいきりたち、刀を青眼にかまえると、じりじり小男につめよったが、相手は刀の柄に手もかけない。
「抜かぬとあらば、こちらから参るぞ！　おのれ、成敗してくれん！」
大男はそう叫ぶが早いか、眼にもとまらぬ勢いで、紫電を宙に走らせた。
あわや一刀のもとに——と、人々が固唾をのんだ時、大男の刀は何かの壁にはね返されたように、手ごたえもなく横に流れた。
小男はいつの間にか、鉄扇を右手にかまえて立っている。
「その剣法は柳生流ではないようだな」

「うむ……」
大男は憤怒に燃えた表情で、一言ひくくうなったが、わずか一尺の鉄扇で、こちらの大刀をはね返したその腕前におそれをなしたか、今度は剣をかまえたまま、容易に斬って出なかった。
もしもこの場に、剣の道をきわめた者がいたとしたら、この二人とも一かど以上の剣客であることを一目で見やぶったに違いない。
大男の方も、刀にかけてあかしをたてよう——と豪語しただけに、なみなみならぬ技量の持主に違いない。その切先にこめた必殺の気魄も、普通の人間には、うけとめきれるとは思えなかった。
小男は鉄扇をかまえたまま、依然として刀は抜こうとしないが、決して相手をなめているのではない。一分のすきもない姿勢で、真剣以上の気力を集中し、息づまる対決を続けているのだ。
「やっ！」
時々もれる気合とともに、わずかに刀と鉄扇がかすかな上下をくり返すばかり、しかし大男の方はしだいに焦りを感じて来たようだった。
「えいっ！」
小男の構えに、何かのすきを見出したのか、疾風枯葉をまくような勢いで、その白刃がひらめいた。
ふつうの腕の男なら、この強襲はおそらく避けられなかったろう。
しかし、小兵の侍は、今度もあざやかに相手の刃をはらいのけ、その手もとにとびこんで、小手のあたりを一撃した。
あっと叫び、刀をおとして飛びのいた相手に、あえて追撃をかけようともせず、

「惜しい……それだけの力量を持ちながら、何故に、柳生流の名をかたり、庶民を苦しめようとするのだ」
小男は静かにつぶやいたが、その隻眼と二蓋笠の紋所を見て、大男も初めて相手の正体を悟ったらしい。
「汝は、汝は柳生十兵衛ではないか！」
「左様——拙者は柳生十兵衛光厳。斬ろうと思えば、汝ごときを斬れぬことはないが、その腕に免じて、今度ばかりは許してやろう。これに懲りたら、今後は心をあらためるがよい。二度とこのような場面を見たら、その時は何の容赦もせぬぞ」
「うむ……今度はたしかに拙者の負けだ。だが、だが、だが……柳生十兵衛、また、あおうぞ」
よほど負けずぎらいの性分なのか、この大男は刀を拾って十兵衛をにらみつけ、そのまま、しだいに濃くなって行く夕闇の中に姿を消して行った。

旅の目明し

「それでは、あなたさまが、音に聞えた柳生十兵衛様で……何んともありがとう存じます。この御恩は一生……」
大男におどかされて生きた心地もなかったらしいこの百姓が涙を流して礼をいうのを、十兵衛は笑ってかるくおしとどめた。
「いや、拙者はただ、相手の不心得をとがめたばかり。まさかこの場に柳生家の者がおろうとは、彼

にも予想は出来なかったであろう。はははは、だがそれにしても、彼はいったい何者かな？」
「はい、どうも食いつめた渡り鳥のような浪人ではございましょうが、このごろはまったく世も末でございます。街道筋にはあのようなあぶれ者がうろうろしておりますし、村には魔物などが出ますし……」
この男がぶつぶつと、奇妙なことをいいだしたのを、十兵衛はさすがに聞きのがさなかった。
「なに、魔物だと？　それは奇妙な話だが、いったい何事だな？」
「へえ、申しおくれましたが、手前は立科(たてしな)山のふもとの石切村の庄屋、喜作と申すものでございますが、このあたり一帯は、いつも山に住む魔物におそわれて、ひどい目にあっているのでございます」
「うむ……山賊のしわざではないのかな？」
十兵衛も、この話には激しい興味をおぼえたらしく、熱心にたずねた。
「へえ……それが、ただの山賊のしわざとは思われませんので、この前も、いついつまでに、近くの社へ貢物(みつぎもの)を出せ——と書いた紙片れが、いきなり障子の隙間から、ふわりと手前の家へ舞いこんで来る始末。ただ外には、誰の姿も見かけませんなんだが」
「なるほど、それは奇怪な話だが」
十兵衛も腕を組んでいた。
「とにかくさようなふしぎな事件が、このあたりでは始終起りますので。ほかの村では、誰かの悪戯と考えて、相手にしなかったところが、真夜中に突然、庄屋の家から怪しい火が出まして大火事になる、村の者は次から次へ、神かくしにあうというありさまで、いまでは、みなが苦しみながらも、山の魔物のいう通りにするほかはないのでございますが」

喜作は、首をひねりながら、ぽつりぽつりと、そんなことを話していた。
「それはいつごろからのことなのだ?」
十兵衛は、何かの義憤にかられたように、眉をあげてたずねた。
「へえ……もうかなり前からのことでございます。かれこれ、二年もこんなことが続いておりましょうか」
「二年前といえば、寛永十五年ごろからの話だな」
何を思ったか十兵衛は大きくうなずいた。
「へえ……何しろ、魔物が相手では、どうしようもございませんので」
「それでは拙者が魔物を退治してやろうか」
思いがけない十兵衛の言葉に、喜作は満面に喜色をうかべて地べたにひれふした。
「もしも、十兵衛様のようなお方がそうして下さいますものなら……村の者も、いや、このあたり一帯の者がどれほど喜ぶことでございますか……ただ、何とももったいないお話で……」
柳生一万石の御曹子、十兵衛光厳が、気軽にこんなことをいい出したので、喜作も嬉しさを通り越して、すっかり驚いてしまったらしい様子だった。
「いや、魔物であろうと人間であろうと、徳川家の御治世を乱すものは放置しておけぬ。それをとりおさえることは、将軍家につかえる我等としては当然のことなのだ」
十兵衛が気魄のこもった声でいったとき、
「殿様……」
と、江戸っ子らしい感じの若い男が、ていねいに頭を下げて声をかけて来た。顔だちも整ってきり

りとひきしまり、眼も強い光をおびている。気品と威厳をどこかに感じさせるその表情は、根っからの町人とは思えなかった。
「お話のお邪魔をいたしまして、申しわけございませんが、いまのお話を聞くともなく小耳にはさみまして、これはと思いましたので……いや、申しおくれて失礼でございますが、手前はお上から十手をお預りしております江戸神田松富町の仁吉と申す者で」
「目明しか。それで話と申すのは?」
十兵衛は、じっと相手の顔を見つめながらたずねた。
「へえ、手前は上方見物の途中、四日ほど前からこのあたりへ来ているのでございますが、いま、このお庄屋さんが話されたようなことを、何度か耳にいたしまして」
仁吉は江戸っ子らしいきびきびした口調で、
「手前も根っからの目明しでござんして、この魔物の話には、おやと小首をかしげました。それでこの宿に足をとめた上、いろいろ探りを入れて見ました。もし、殿様がほんとうに魔物退治にお出かけなさるなら、少しばかりは、お役に立つようなことも、申しあげられるかと思いますが」
「なるほど、それはかたじけない。一つ、話を聞かせてもらおうか」
「お殿様からそのように申されては痛みいりますが、何しろ立科山のあたりは、秘境、魔境とでも申しましょうか、たしかに妖怪変化でも住みつきそうな場所でございますが、手前のいろいろ探ったところでは、山奥にどうやら秘密の部落があるようでございます」
「というと、平家部落か何かであろうか?」
「へえ、そこまではわかりませんが、何しろあの山奥までは、猟師でもめったに入りませんので……

ただ、人も通わない山奥で、何本かの煙が上っているのを見たという猟師もいるくらいでござんすから、まず、何者かがひそかに住みついていることは間違いございますまい」
「なるほど、それで？」
「手前のあて推量では、豊臣の残党か何かが、ひそかに何事かをたくらんでいるのではないかと思いますが、その中には、もしや妖術忍術などを使う者が、ひそんでいるのではございますまいか。もしかしたら、妖術使いのまじっている山賊の一味かも知れませんが、山賊ならば、もっと直接、あらっぽいまねをしでかしそうなものだと思いますが」
「うむ、その方はさすがに目明しだけあって、眼のつけどころも鋭いのう。もしも、その方の推察があたっておるとしたら、これはたしかに一日たりとも捨ててはおけぬ問題だ」
十兵衛はその隻眼に激しい怒りをたたえてつぶやいた。
大阪夏の陣から数えて三十余年、三代将軍家光の世となっては、江戸幕府の治政も一応軌道に乗って来たとはいうものの、まだまだ、江戸から離れた地方には、豊臣の残党をはじめ、幕府に対して、不穏な態度を示すものが少なくない。
事実、いまこうして信濃路にさしかかっている十兵衛も、将軍家光から直々に、諸国の情勢を探るようにとの極秘の指令をうけ、表むきは諸国漫遊という名目で、旅をつづけている途中だったのである。
「それでは殿様御自身で、ほんとうに魔物の正体を探りにおいでなさいますか？」
「うむ、明日にも出かけようと思う」
十兵衛がきっぱりといいきると、仁吉はその言葉を待ちうけていたというような顔で、

「それでは殿様、出すぎたお願いかも知れませんが、その魔物退治に手前をおともさせていただけますまいか？」
といい出した。
「なに、その方が？」
「へえ、大したお役にはたちますまいが、足手まといになるようなまねはいたしません。なにか変った事件があると、すぐ首をつっこみたくなるのが手前の性分でございまして」
「たしかに、その方は物好きな男だな」
仁吉も、こういわれて苦笑いしていた。
「それに第一、ここまで事情を知っていながら、殿様を一人で山奥へふみこませたとあっちゃ江戸っ子の名にもかかわります。見ればいまは殿様も旅の途中で、御家来衆もおられない様子、せめて手前でもおともをすればお荷物かつぎぐらいは出来ますし……手前としても、十兵衛様とごいっしょに、化物退治が出来たとなれば、孫子の代までの語り草、これほどうれしいことはございませんが」
と、しきりにたのみこんだ。
その熱心さにほだされたのか、十兵衛もかすかに笑いをうかべて、
「うむ、それほどまでに申すなら、いかにも供をたのもうか。しかし、危険は承知であろうな？ 敵がまことの妖怪変化で、わが力の及ばぬ魔力を持っているなら、拙者もその方も、山中に空しく骸をさらすまでだぞ」
「へえ、それはもとより覚悟の上でございます。魔物が出たら、手前がそいつの口の中へとびこみ、腹の中であばれてやります」

仁吉はいかにも嬉しそうに、元気のいいせりふを吐いた。

美女か変化か

柳生十兵衛と仁吉のにわか仕立ての主従は、庄屋喜作の案内で、石切村まで夜道をかけた。

その夜は、喜作にすすめられるまま、その家に旅装を解いたが、翌朝は早くから、十兵衛は身支度をととのえてこの家を出た。

山道へ入るまでは、村の若者二三人が、道案内について来たが誰の顔を見ても、みんな魔物の影におびえて、生きた心地もない様子だった。

「もういい、あとは我等二人でまいるぞ」

この言葉を待っていたように、人々はわれ先に、村のほうへ逃げかえった。

主従二人は、あるかないかのけわしい山道をたどり、暗い森の中をつきぬけて、山奥へ山奥へと入っていった。

あたりはひっそり静まり返っていて、足もとで、かさかさと鳴りつづける落葉のほかには、梢をつたう風の音が耳をうつばかりだった。

どんどん歩いて行くうちに、かわりやすい秋の空はしだいに曇って来て、風も野分のように冷たくなり、ただならぬ雲行きとなって来た。

山々の木の葉は、赤、橙、黄色と、眼にしみるような美しい色にそまっているが、それもこのような深山では、何ともいえない妖気をただよわせ、この世のものならぬ景色のように感じられる。

このあたりまでは、これまで誰一人来た者もないのか、道もすっかりとだえてしまい、身のたけほどもある雑草や、薄(すすき)などが一面に生い茂り、山の斜面はますます険しくなった。

「仁吉、その方はずいぶん山道になれているようだな」

身軽に先を歩いて行く仁吉にむかって、十兵衛は不審そうに言葉をかけた。

「へえ、がきのころ、信州で一時育ったことがございますので……」

そういったとたんに、彼は一尺ばかりとび上って、きゃーっと悲鳴をあげた。

「どうした? どうしたのだな?」

「へえ……いま、何か黒いものが、すーっと手前の眼の前を横切ったような気がいたしましたので」

胆っ玉は太いと自称する仁吉も、この山奥の何ともいわれぬ妖気には、すっかり気味わるくなったのか、青ざめた顔で、声をふるわせた。

「拙者には、何も見えなかったが、その方の気の迷いではないのかな?」

十兵衛は全然落着きを失わなかったが、仁吉は大きく首をふった。

「いや、たしかに……奇妙な物の影が、風のようにすーっと通りすぎました」

「ふむ、こわくなったかな」

「いや、決してそんなことはございません」

仁吉は、虚勢を張ったような笑いを浮かべていった。

「まあ、ここから一人で引っかえさせるわけにも行くまい。元気を出してついてまいれ」

「へえ……」

あたりに注意をはらいながら、二人はまたそれから小半里ほど進んだ。空はますます曇って来て、

暗雲もひくくたれこめ、まるで夕方か夜のようになって来た。

「この天候では、これ以上、進むのは無理かも知れぬな。妖怪と違って、天気が相手では勝負にならぬ」

深入りをいましめるのは、あらゆる兵法の極意だが、時刻はまだ昼前のはずなのに、この思わぬ天候異変にあっては、十兵衛もいま一度、進退を再考せずにはおられなかった。

と、その時——

人里を遠くはなれたこの山中で、意外にも嫋々たる笛の調べが、かすかに耳に聞えて来たのだ。

「あの笛は……妖怪出現の合図かな?」

十兵衛の心眼は相手の姿を追うように、油断なくあたりを見まわした。このあやしい笛の音は、あるいは高く、あるいは低く、深山の静かな空気をふるわせて響いて来る。

「右らしいな」

「手前には左の方から聞えるように思われますが……」

たしかに森の中では、音が立木に乱反射するので、その源もどのあたりか、ちょっと判断のつかないことが多いのだ。だから、二人の意見がこのように食い違ったのも、それほど不思議なことではないが、時が時、場所が場所だけに、こういう判断の相違にも、何となく鬼気を感じさせるものがあった。

「とにかく、拙者についてまいれ」

「へえ……」

二人はそこから右の方へ、一歩一歩をふみしめて進んだ。わずかの殺気、妖気でも見のがすまいと

する緊張の連続だった。

しばらく歩いているうちに、笛の音はしだいに大きくなった。

「やはり、こちらであったな」

十兵衛は足をはやめた。

その時、森はいったん終りとなって、二人は薄の生いしげる小さな空地に出た。

「おう!」

さすがの十兵衛も思わず息をのんだ。

空地のむこうの大木の下には、どこか高貴の家の姫君かと見える美女が、一管の笛を唇にあて、奇怪な曲を吹いているのだ。

年のころは十八九、肌の色は雪のように白く、人形のように整った眼鼻だちにも、かすかな憂いの影がただよっている。その肩のあたりに、紅葉が二葉三葉と舞い落ちているさまは、まるでこの世のものならぬ美しい絵のようだった。

ただ、これが都の高尾や嵐山ならばともかく、この立科の山深く、人跡も稀なあたりでは、その姿が美しいほどそこには何ともいえない妖気がただよっていた。

「娘御、そなたは何者じゃ? どうして、このような山奥に?」

十兵衛はつかつかと歩みよって、鋭く声をかけた。

女は笛を吹くのをやめて、十兵衛の方を見つめた。顔には喜びと安堵にあかい血が走った。眼には歓喜をみなぎらせて、

「お武家さま……よくおいでになって下さいました。わたくしは京の梅小路家の息女、楓と申すもの

でございます」
「その高貴の姫御前が、どうしてこのような深山幽谷に?」
十兵衛は、きっとあたりを見まわしながらたずねた。口では大きなことをいっても、やはり恐ろしいのか、仁吉はこの広場の入口に立ちどまったまま、こちらへ近づこうともしないのだ。
「はい、くわしい事情をお話しすれば、長くなりますが、わたくしは仔細ありまして、家来の者と東下りの途中、山賊におそわれ、家来どもは殺され、わたくしは賊の砦につれて行かれました。昨夜の闇にまぎれて、辛うじてその砦からは逃げ出しましたが、知らぬ山道で、どちらへ行けば人里か、その見さだめもつきませぬ。それに疲れて、これ以上進みもなりませぬままに、せめて、今生の思い出にと、母の形見のこの笛をとりあげ、わかれの曲を吹きならしているところでございましたが……」
「うむ」
この女の言葉には、たしかに一応の理屈が通っている。十兵衛にしても、それを嘘だときめつけるだけの根拠はなかった。
といっても、まだまだ心はゆるせなかった。相手はたしかに人間である。しかも絶世の美女なのだ。けっして魔物や狐狸のたぐいが化けたものとは思えない。
だが、逆にこの気品から判断しては、決していやしい素姓の女とは思えなかった。もしや、豊臣の血を引く女ではないか——という疑惑も胸のあたりにわき上ったものの、いきなりとがめだてするわけにも行かなかった。
「ありがとうございます。これから人里までおつれ下さいまし。あなたさまのようなお方にお目にかかれたのも、死んだ母のおみちびきでございましょうか」

楓と名のるこの女は、たしなみも忘れたように、身をおこして十兵衛にとりすがった。
生あたたかい一陣の風が、さっとその頬をかすめてすぎた。
「ほんとうに、恐ろしゅうございました……」
女は涙ながらに、十兵衛を見あげた。
しかし、その眼の底を見つめて。十兵衛は何ともいえない思いにとらわれた。妖艶というには、あまりに澄んでいるが、女の両眼は実にふしぎな光を持っていた。それは千尋の深さを持つ碧水のように、人の心をひきずりこんではなさぬ魅力を持っている……
十兵衛とても木石ではない。
じっと魅いられたように、女の眼を見つめているうちに、彼は自分の胸があやしくときめきはじめ、全身がしびれて来るような感じに襲われて来るのを感じていた。
「やはり、ただもの、ただの女ではない……」
とは思ったものの、体の方はぜんぜんいうことを聞かなかった。まるで、自分の全身が見る見るうちに小さくなって、女の黒い瞳の中に吸いこまれて行くような感じがした。
「お武家さま……親切なお侍さま……」
あつい息吹きとともに、女の甘いささやきが耳をうった。女はそっと十兵衛に頬ずりするように、その顔に顔を近よせて来た。紅い唇が眼にしみるようにあざやかだった。
しかし剣士として、長年鍛えに鍛えた精神力は、ほとんど最後の一瞬に、十兵衛に危険をさとらせ、眠りかけた意識をよみがえらせたのだ。
「おのれ、妖怪!」

十兵衛は文字通り無我夢中で、愛刀三池典太の鞘をはらうと横に鋭く一閃した。凄気をはらむ風とともに、血のような紅葉がはらはらと舞いおちて来た。

女はぱっと一間も後に飛びずさって、冷たく十兵衛をにらみつけた。

「柳生十兵衛、死ね！」

笛をまっすぐに十兵衛のほうへつきつけて、女は甲高い声で叫んだ。どのような妖術の力なのか、十兵衛の体は、また金しばりにあったようにこわばりはじめた。

「弓矢八幡大菩薩！」

武道の神の名を念じながら、十兵衛はあらんかぎりの気力をしぼりつくして、女の方へ切りこんだ。しかし、その刃が女の身にふれたかと思った瞬間には、この妖女は、気違いじみた高笑いを残して、その場から消えさってしまったのである。

見渡しても、このさわぎに恐れをなして逃げ出したか、仁吉の姿も見えなくなっていた。

おりしも、低くたれこめた雨雲の一角から青白い稲妻が走り、それを合図にしたように、ぽつりぽつりと大粒の雨が降り出して来た。そしてまたたくうちに、滝のような雷雨となって、十兵衛の身のまわりに降りそそいできた。

山嶽切支丹

電光、雷鳴、そして地軸をゆるがすような豪雨の中に、十兵衛はふしぎな音を耳にした。鐘――それも、寺の梵鐘などとは違った、澄んだ異国風の鐘の音だった。

「はて、あれは？」

ひとり、つぶやいた十兵衛は、この豪雨の中を、その音の源を求めて歩き出していた。

雨はやまず、仁吉の姿も見あたらなかったが、十兵衛は間もなく崖ぶちの空地に、ふしぎな形の建物をみとめた。

「切支丹御堂！」

その正体を認めた時には、さすがに十兵衛もはっとした。切支丹御堂とか南蛮寺とか呼ばれるキリスト教の教会は、この教義がきびしい弾圧にあうまでは、宣教師の足跡にともなって、日本のいたるところに建設されていたのだ。

しかし、キリスト教徒にとっては、最後の抵抗ともいえる天草島原の乱以来、十字架も鐘楼もとりこわされて、六十余州のいずこにも、姿を見出せぬはずなのだが……

「山嶽切支丹の巣窟か？」

十兵衛は、静かにそちらへ足をはこびながらつぶやいた。

長年にわたる弾圧のために、キリスト教の信者たちは、あるいは殉教者としての悲壮な最期をとげ、あるいは迫害にたえかねて改宗し、またある者は島原の乱に加わって、教義のために立ち上ったが、その中には無人の山嶽の中に逃れ、あくまで教義を守り通そうとした人々がある。これがいわゆる山嶽切支丹だった。

もちろん、眼前の御堂にしても、むかし織田信長の治政下に、安土や京都にあった華麗な南蛮寺とはくらべようもないだろう。

だが、たとえ建築は粗末でも、建物は形ばかりでも、これはあくまで自分の信念と信仰を貫こうと

している人々の血と汗と涙の結晶なのだ。
その努力には、十兵衛も一種の尊敬をまじえた空おそろしさを感じないではおられなかったのである。
彼がこの御堂の四五間前までやって来たとき、正面の扉をおし開いて姿をあらわしたのは、昨日丸目蔵人と名のって彼と刃をまじえたあの浪人だった。
「柳生十兵衛！　これほど早く、汝と再会するとは思わなんだ。が、ここまで来られて、我等の秘密を悟られては、もはや生かして返すわけには行かぬ。参れ！」
「うむ、何か曰くありげな男と思っていたが、やはり山嶽切支丹の一味だったのか？　名のれ。今度こそ本名を名のれ！」
「なるほど、斬った相手の名を知らずには、この世に未練が残って地獄へもよう行ききれまい。われこそは、むかし関ケ原において小西行長殿の輩下にその人ありと知られた浦辺源之進の末孫、浦辺辰之進……」
「うむ」
前に刃をまじえた時の手ごたえから、腕にはまさるという自信はあったが、今度は十兵衛としても油断はならなかった。
兵法の極意に、逸をもって労を待つ——という言葉があるが、こちらは山登りに疲れ、しかも今の雷雨にたたかれて、凍えんばかりに濡れ切っている。
しかも、この敵は今まで体を休めて自分を迎え撃とうとするのだ。
その上に、味方は一人、敵方はどれだけの人数かもわからない。十兵衛にとっても、これは容易な

らない勝負に違いなかった。
十兵衛は静かに柳生流の極意、三光雷倒の構えをとった。
辰之進も、一歩一歩と慎重に足をふみしめながら、豪雨の中へ進み出て来た。
その剣には眼に見えぬ妖魔がのりうつったような凄気があふれ、両眼は、せめて相うちに——という一念に燃えている。さすがの十兵衛も、今度はかんたんに斬りこめなかった。
「おお！」
その時、ふたたび会堂の扉が開いて、中から姿をあらわしたのは、楓と名のった妖女だった。右手に短剣をかざしながら、血走った眼で十兵衛をにらみつけている。
さっとその手があがったと見る間もなく、白刃は矢のように宙を飛んで十兵衛の頬をかすめてすぎた。しかも、ふたたびその手には、新たな剣がひらめいた。
これほどの悪条件が重っては、十兵衛ほどの剣豪でも、日ごろの実力を発揮することは難しかった。
辰之進の切先にもてあそばれるように、彼はたちまち、断崖のとっぱなまで追いつめられてしまったのである。
「うむ……」
全精神をただ切先一点に集中して、十兵衛が逆襲に出ようとしたとき、彼にとっては最悪の事態が起った。彼はこの時、鐘楼の上から、自分の胸板をねらっている銃口を発見したのである……
しかし、その時、眼もくらむようなはげしい閃光と、天地をゆるがすような轟音が相ついだ、落雷だった。神の怒りをあらわすような大落雷が、この堂におち、たちまち建物を炎上させたのである……

…。
さすがにこの衝撃にはたまりかねたか、辰之進も、この女も地上に倒れ、しばらくは身動きも出来なかった。
だが、二人がぱっと身を起したときには、今まで巌頭にたっていた十兵衛の姿はどこにも見えなかった。

この会堂は完全に焼けおちてしまったが、これこそ魂のよりどころ、神聖な神の住居と信じていただけに、これがこの附近の小屋や岩窟の中に住む者たちに与えた衝動は、たいへんなものだった。
雨の上るのを待って、この焼跡にぬかずいた男女の数は、数十名に達したが、誰も神罰がいたったと思いつめているのか、号泣とともに真摯な祈りをささげながら、夕闇の迫ってくるまでは、この場を離れようともしなかった。
そしてその夜――
ほかの小屋よりはいくらかりっぱな家の中で、楓と浦辺辰之進は、ほの暗い燈火に照らされて坐っていた。
雨はすっかり上り、夜空には、星もいくつかきらめいている。
「あの落雷だけは、わたくしたちにも予想はできませんでしたね。でも、十兵衛がどれほど剛勇無双でも、あれには胆をつぶしたでしょう。きっと、あのはずみに足をすべらせて崖から転がり落ちたに違いありますまいね」
「うむ、おそらくそんなところであろう」

辰之進は大きくうなずいたが、もう心はそこにないようだった。
さっきの斬合の時とは人間が変ったように、どんより曇った眼を女の肌の上におとし、その一挙一動を執拗に見まもっている。
「浦辺様、なにをお考えでございます?」
「楓殿……そなたはどうして、わしをこれほど苦しめるのだ? そなたのために、すべてを捧げつくしている拙者の胸のうちが、まだ、そなたには通じないのか?」
「なにをおっしゃるのでございます。あなたさまをおしたい申しあげていることは、よく御存じのはずですのに」
「そなたはいつも言葉ばかり、それでは拙者も我慢が出来ぬ」
辰之進は女のそばへにじりよって、
「楓どの、そなたは魔女だ。妖女だ。拙者の身も心もここまでとろかすとは……それはそれでもよい……せめて一夜を」
「一夜といわず、毎晩こうしていっしょに住んでいるではございませんか。何も今さら」
「楓どの。そんなに人をなぶりなさるな。拙者はもう気が狂いそうだ」
辰之進は女をだきすくめようとしたが、楓はぱっと男の手をはらいのけ、射すくめるような視線を真向からあびせかけた。
辰之進はとたんに、蛇に睨まれた蛙のようにちぢみ上った。
「そなたはわたくしの思う通りに動く虜。それ以上のことは許しませぬ」
女は冷たい笑いを浮かべながら男を見つめた。

「楓どのは宗内めを愛しているのだな?」
絶望に顔をゆがめて辰之進はうめいた。
「ジェロニモ、宗内さまはりっぱなお方……わたくしたちの頭梁です。そなたのような堕落侍とはわけが違いましょう」
「その、拙者を堕落させたのはいったい誰だ? 楓どの!」
辰之進の言葉にはもうとりあわず天を見あげて、胸に十字を切った。
「今日の雷は、それから火事は、わたくしどもにとっても一つの天啓だったかも知れませぬ。最後の審判の日が、間もなくやってくることをあらわすおさとしかも知れませぬ」
狂信的なつぶやきをもらして、女は家の外に出た。とたんにその外に立っていた黒い影は、磁石にひかれるように近よって来た。
「ジェロニモさま、宗内さま」
「楓……」
二つの影はじっと抱きあったまま、しばらく離れようともしなかった。
「さあ、早くあちらへまいりましょう。ここにはうるさい男がおります」
二人は岩と岩との間をつたい、細い小道をたどって四方を岩にかこまれた小さな空地までやって来た。
「十兵衛の死体は見つかりましたか?」
「まだだ……どうもふしぎな予感がする。理屈や常識では説明できなくても、彼はまだ生きのびているという予感がしてならない」

「でも、あれほどの落雷では……」
「いや、武芸の達人というものは、どのような天変地異に対しても、身を処する道を知っているものだ」
「それでは……」
「とにかく、彼を生かして、この山から出しては我等の身の破滅、これから拙者は出かけて来る」
「この夜道を?」
「うむ、事は一刻をあらそうのだ」
女は大きく溜息をついた。しかし、事情が事情だけに、万やむを得ないと覚悟をきめたのだろう。しっかり、男の身に抱きつき、その唇を吸い、そして夢見るようにつぶやいた。
「サンタ・マリヤ……神の御加護を!」

落葉の変

楓は岩の間をぬけ、崖に沿った道を、もとの小屋の方へ急いでいた。
とたんに、岩かげから青白い月光の中に姿をあらわしたのは浦辺辰之進だった。
「楓殿! そなたはいま、宗内めと何をしておられたのだ? 拙者につれない振舞をしたすぐ後で、あまりに冷たい仕打ちでは……」
「おだまりなさい。そんなみだらな話は、聞きたくありませぬ」
「そのみだらなまねを楓どのは宗内と!」

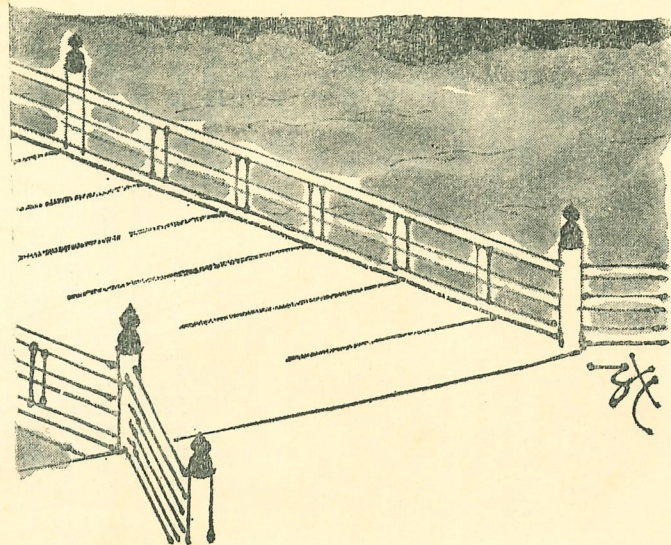
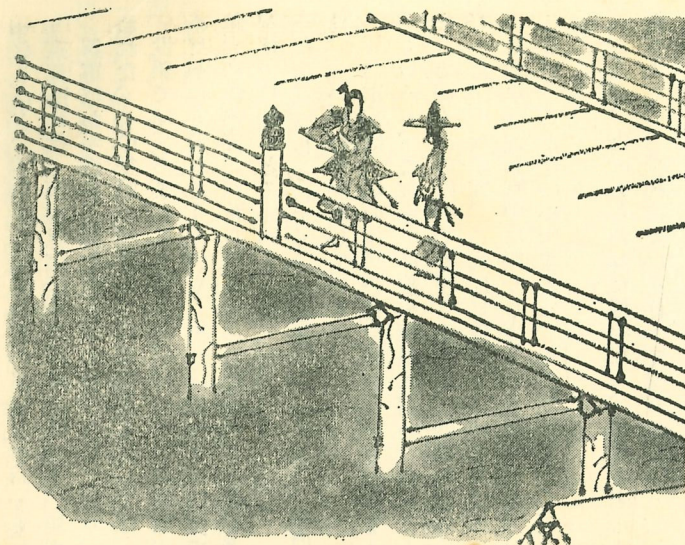
「何をいわれる。これ以上、無礼なことをいわれれば、そなたの命をいただきますぞ。わたくしにそれだけの力があることはおわかりのはず」
「そなたの手にかかってなら死んでもいい」
辰之進はもう完全に我を忘れて、半狂乱の状態になっていた。
「死ぬ……そなたといっしょに死ぬのだぞ」
楓は嘲けるように笑ってとりあわず、そのまま二三歩歩きかけたが、意外にも辰之進はほんとうに刀をぬいて、女めがけて斬りかけて来た。
「あっ、何を……何をする！」
まさかと油断しきっていて、術をかけるひまもなかったのだろう。肩先をおさえて女はよろめいた。月光に青白く光る着物が見る見るうちにどす黒い色にそまっていった。
「よ……よくも……」
最後の気力をふりしぼって、女はするどく辰之進をにらみつけた。辰之進は魂の抜けがらのように、呆然とつっ立ったまま、
「はは、おれといっしょに死ぬのだぞ……ははは、楓、人の心をあやつるにもかぎりがあるのだ」
と譫言のような言葉をもらすだけだった。
「お、おのれ！」
女の手から短剣が飛んだ。それは棒立ちになっている辰之進の胸にずぶりと突ったった。彼はかすかな笑いさえ浮かべ、うめきもせずに地上に倒れた。
その時、前の岩かげから、一人の男が立ち上った。右手からのびている白刃は、青白く濡れるよう

に、月の光をはねかえしていた。
「柳生……十兵衛……」
まるで、幽霊でも見たように、女は悲壮な声でつぶやいた。そしてよろよろとよろめくと、崖から足をふみはずした。後には、鋭い悲鳴が一声のこったが——すべては一瞬の出来事だった。
「天の裁き……すべては天の裁きだろう」
十兵衛はひくくつぶやいた。そして、岩の間に倒れている辰之進の胸から短剣をぬきとってやった。
「柳生……十兵衛どのか……」
辰之進はうっすらと眼を開いた。
「あの女が死んで……拙者もやっと眼がさめた。死ぬ間際になって、悟りを開いたとしても、時はすでに遅いだろうが……」
「うむ」
思いもよらなかった、素直な人間らしい告白に、十兵衛も今までの闘志をかなぐり捨てた。
「心静かに死ぬがよい……ただ、あの女は何者なのだ？」
「妖術使い……人の心をまどわせる力を持ったおそろしい女だ……拙者はあの女のためにすべてを忘れてしまった。武士としての道も、意地も……すべて、あの女のいいなりに、人形のように動いていたのだ……」
「うむ」
十兵衛は大きくうなずいた。自分でさえ、危くまどわされそうになったあの怪しい力のことを思う

と、この男の言葉も、なるほどとうなずけたのだった。
「それで、其方はこの部落との連絡をとりながら、警護の役にあたっていたのか。それではあの女の素姓は?」
「それは拙者にもわからぬのだ。あるいは天草四郎の妹ともいい……異人の血をひく女ともいう……だが、あの女は悪魔だった……美しい顔形のかげに、恐ろしい悪魔の心を持った女だった……楓、楓、楓殿!」
　それが最後の一言だった。このように、悪魔の魂を持った女だと信じていながら、いまわのきわに、またしても、その名を呼んで死んだところが、やっぱり彼の人間性のあらわれだったのだろう。
「それでは安らかに眠るがよい」
　相手が切支丹だということを知っているだけに、十兵衛も念仏さえとなえる気にはなれなかった。
静かに相手のまぶたを閉じてやって立ちあがったとき、
「殿様、こんなところでござんしたか?　ずいぶんお探ししやしたぜ」
と声をかけて、例の目明し仁吉が姿をあらわした。
「拙者もずいぶん其方を探したぞ」
十兵衛は笑いもせずに、仁吉を見つめ、
「いったい、あれからどうしたのだ?」
「へえ、あの女に毒気をふっかけられて逃げ出しまして……それから山の中をぐるぐる迷い歩いたあげく……」
「それでよくここまで来られたものだな」

「へえ、それもまあ、天のお助けでございましょう。おや、お殿様、これは昨日の無法侍ではございませんか?」
　仁吉は地上に倒れている辰之進の骸をちらりと冷たい視線で見つめていった。
「うむ、これが魔物の一味だったのだ」
「へえ、こいつが親玉だったので?」
「そうではない。妖術を使う女のほうは、いま谷底へ落ちて死んだ。首領はまだ生きのこっているはずだが……」
「へえ……」
　仁吉の顔には何ともいえぬ動揺の影が動いていた。
「仁吉、その方の江戸弁はなかなかたくみだが、ほんの少しばかり、西国なまりが入っているようだな」
　十兵衛はするどい調子でいった。
「へえ、さようでござんすかねえ……おふくろが、岡山から流れて来た旅商人の娘でございましたから、きっとそのせいでございましょうが」
「とぼけるな。この十兵衛の眼は節穴ではないのだぞ!」
　十兵衛は鋭く一喝して、いきなり左手をのばし、仁吉の着物のえりをこじあけた。その胸には黄金の色もまばゆい十字架が燦然と光り輝いている。
「十兵衛、よくも見やぶったな!」
　仁吉は顔色をかえて一二間飛びのいた。

「その方は茶店で、拙者が妖怪退治に出ようとしているのを立ち聞きし、目明しといつわって同行を申し出たのだろう。おそらく、何かの所用で山を下りた浦辺辰之進を、ひそかに監視するために其方もあの場に来あわせていたのであろうが」
「うぬ、うぬ！」
「拙者をうまく危地に追いこみ、なき者とする計画だったのだな。叫び声をあげたのは仲間に連絡するため、あの女の笛が聞えて来たのはあの直後。はははは、そのぐらいのことが読めないで、柳生家の役目はつとまらぬ」
「うむ、さすがは柳生隠密隊の指揮権を一手に握る柳生家の御曹子だけのことはある。ただ、勝利を誇るのはまだ早い。われこそは、天草四郎の軍旗の下で、その名を知られた山崎ジェロニモ宗内、拙者が神の名にかけて、汝を成敗してくれよう」
「その方どもの神の教えが、どのようなものかは知れぬが、罪もない住民を苦しめ、天下を乱す行為は天人ともに許せぬぞ」
「ええ、その文句はあの世で、地獄でいえ」
宗内の手からは黒いものが飛んだ。眼つぶしの粉の袋だった。十兵衛が体を開いてそれをかわしたとたんに、今度は息つぐひまもなく、手裏剣の雨が降りそそいだ。三池典太の刃を返して、十兵衛は右に左にその攻撃をはらいのけた。
その一瞬の隙に乗じて、手裏剣を使いつくした宗内は、今度は辰之進の刀をとって刃向って来た。二合三合、激しい斬り合いが続いたが、刀をとっては、宗内は到底十兵衛の敵ではなかった。
柳生の秘太刀、水月の一刀に、宗内は血しぶきをあげてよろめいた。

「主のお召しのままに……楓……すぐそなたのもとへ……」
宗内は、岩角をはいながら、半ば自分から身を投げるように崖の下へ落ちて行った。またしても激しい風が出た。月明の中にはらはらと紅葉が散った。
むこうの山肌には、無数の松明(たいまつ)が動きはじめた。ここもまた安住の地ではないと悟ったこの一味は、またこれ以上の山奥へ安らかな理想境をもとめて逃げ出したのだろうが、十兵衛は、もはやその跡を追おうとはしなかった。

第三話　百万両呪縛

柳生十兵衛

このごろの京都の春には、いうにいわれぬ淋しさがみなぎっているようだった。

もちろん、花に心があるわけでもない。自然の景観そのものが、むかしと変ってしまったわけではないが、大阪陣以来二十数年の年月を経て、天下の政治の中心が、都から武蔵野のはて、江戸千代田城に移ってしまった現在では、同じ花の香、同じ景観でも、やはり見る人の心の中に、一抹の哀愁を感じさせないではおかないのだ。

家康、秀忠の代を経て、徳川幕府も三代将軍家光の治世となって来てから、その基礎もいよいよ強固さを加えて来た。かつての聚楽第の饗宴も、豊太閤が一代の贅を尽した醍醐の花見も、いまとなってはむなしい語り草にすぎない。

御所はあり、幕府は京都所司代において、これを敬して遠ざける方針をとっているものの、この古い都が、またむかしのような政治の中心としての華かさを とりもどす ことは あるまいと 思われる。

もちろん、東海道五十三次の終点として、西国筋との交通には、必ず通らなければならない要衝だし、平和とともに、名所旧蹟を訪ねて杖をひく人々は跡をもたたないが、いまこの都の人々の心を暗くしているものは、疾風の勘兵衛と名のる怪盗の暗躍だった。

もちろん、彼の正体なり素姓なりは、誰にもわからない。人相書さえ、まだ配布されてはいないのだ。ただ、その手口は驚くばかりあざやかだし、人の血を見ることを何とも思わない惨忍さは、その逮捕をいっそう困難なものにしていた。

「なるほど、石川五右衛門以来の怪盗とおおせられますか?」
京都所司代、板倉重宗からこの噂を聞いて、柳生十兵衛は眉をひそめた。
将軍家お手直役、柳生但馬守の長子として生れ、剣をとっては柳生家はじまって以来の天才とうたわれた、この隻眼の剣客が、諸国漫遊と称して江戸を発ってから、もう半年あまりになる。
世間では、あまりにも精魂を傾けつくした修業のために、脳の病いを患い、その保養をかねてのためだと説く者もあり、いや、それは表むきの口実で、その実は、将軍家直々の大命をうけ、西国筋の諸大名の内実、向背を探るための隠密行だと説く者もあるが、その真相は、爛々と輝くその隻眼からだけでは読みとるすべもなかった。
「左様、わしとしても、京都所司代として、都の治安維持の任にあたる職責上、この怪盗の出没には、大いに心を悩ましているが」
板倉重宗は、炉の松風の音を聞きながら溜息をもらした。
「もちろん、これまでに彼を死地に追いつめたことも二度ばかりあるが、何といっても稀代の曲者、まるで切支丹の妖術でも使うように、鉄桶の囲みから逃れ去って、我等の狙いも空しく宙を打つだけだった。十兵衛殿、これには何か、よい思案はあるまいか?」
絶大な権力を掌中に握りしめている所司代が、いかに柳生家御曹子とはいえ、一介の旅の剣客に、こういうことをいい出すとは、その懊悩もよくよくのことに違いないが、十兵衛はかすかな苦笑を浮かべて、
「これが、表にあらわれた相手なら、たとえどのように武勇がすぐれておったとしても、一刀の下に斬りすてて、後顧の憂いを絶って進ぜましょうが、眼に見えず、所在もわからぬ相手では、手のほど

こしようもございませんな」
「十兵衛殿には、えらく御遠慮をなされるな。剣はもとより、頭の冴えにおいても、柳生の麒麟児といわれる貴殿のこと、恐らくは何か、我等のあっというような秘策も考え出されるのではないかと思う。わしとしても、こうなれば、まるで藁をもつかみたいような気さえするくらいでな」
老中松平信綱とならんで、現在江戸幕府の重役の中でも、智力にかけては双璧といわれる重宗が、これだけの心痛を表に出すことは、全くただごとも思えなかった。
十兵衛はしばらく腕を組み、眼をとじて、深い瞑想に耽っていたが、やがて何かに思いあたったようにふたたび眼を開いて、
「それには方法もないではございますまい。ただいまも申しあげましたように、彼が拙者の眼の前にあらわれてくれさえすれば、一刀の下に斬りすてるのは、何の困難もございませぬが……いや、彼をこの三池典太の刃の前におびき出すにも、自ら方法はございましょう。こちらに、多少の犠牲をはらう覚悟があれば、それも不可能とは思えませぬ」
「大難を小難で食い止めるには、あの程度、こちらが犠牲をはらうのもしかたはあるまい。百人の人の命を救うためには、捕手の二人三人が倒れても、それはやむを得ぬことだろうが、さて、十兵衛殿、その手だてといわれるのは?」
「お耳を拝借いたしとう存じます。警護十分なこのお屋敷、心配はあるまいと思いますが、ただ、念には念を入れまして」
重宗の耳に口をよせ、十兵衛はしばらく何かをささやいていた。
重宗の顔には次第に赤らみがさし、手にした白扇はいつかぽろりと膝の前におちた。

しかし、話が終るまで、重宗がそれに気がつかなかったところを見ても、それはよくよく彼の意表に出た神算鬼謀だったに違いない。
「なるほど、その方法を用いるならば、大魚も網にかかるだろう。さてさて、但馬守殿はよい御子息を持たれたものじゃ、だが、その最後の止めは……十兵衛殿、貴殿が刺して下さるか？」
「一殺すなわち多生の剣――とは、柳生家の奥義ばかりでなく、あらゆる流派の根底をなす教訓でございます。この十兵衛も身命を賭して、見事この怪盗を仕止め、天下の難をのぞきましょう」
きりりと唇を嚙みしめて、十兵衛はきっぱりといいきった。

疾風の勘兵衛

「親分、ちょっと耳よりな話を聞きこんで来たんでござんすがねえ」
ここは三条寺町裏の仏具商、京華堂という店の離れの間、床柱を背にして坐っているのは、この家の主人とは親類筋にあたっているという徳右衛門という商人、いや、疾風の勘兵衛の世をあざむく仮の姿だった。
年はまだ四十がらみ、見たところ多少の叛骨はあっても、ずぶの堅気の商人という身なりだが、手先に使っている女、麝香のおせんが訪ねて来てこういうことをいい出したものだから、一瞬ぎょろりと眼を光らせて、
「耳よりな話とは何だ？　お前がそういうくらいだから、十両二十両の半端仕事じゃなかろうな？」
おせんは年増独特の濃艶な色気を、体のちょっとしたこなし、動作の一つ一つにこぼしながら、

「その御念には及びません。そういうことなら、何も親分にお知らせしなくとも、わたくしだけでかたづけます」
「それでは百両を越える仕事だというのか」
「もちっと」
「千両仕事か？」
「まだまだ、そんなんじゃござんせん」
「万両仕事か？」
「もっと上の大仕事でござんすよ」
「馬鹿をいえ！」
からかわれていると思ったのか、勘兵衛は雷のような怒りを爆発させた。
「お前はそんなことをいうが、万両仕事となってくれば、このおれもまだ一度しかおぼえがねえ。この稼業に入って二十年、この商売の表も裏も、酸いも甘いも嚙みわけて来たこのおれに……」
「まあ、親分、そんなにがみがみいわないで、人の話はおしまいまでゆっくり聞いておくんなさいな。これは百万両の大仕事」
「百万両！」
たいていのことには驚かない勘兵衛も、この数字には眼を見はった。怒りも忘れて、逆におかしくなったのか、
「はははは、話もそこまで桁がはずれてくれば御愛嬌だな。一口に百万両――というものの、それだけの金は太閤様以来、誰も拝んだことはあるめえ」

「その太閤様にかかわりのあるお話でしたらどうします？」
「太閤様の百万両？」
　夢のような話には違いないが、この大英雄の名前から、何かの連想を働かせたか、勘兵衛も急に真顔になった。
「それで、その話というのは？」
「太閤様の晩年に、その後つぎの関白様が、御不興を買って詰腹切らされたことは、いまさら、親分に申しあげるにも及びますまい。表むき、太閤様は実の子の秀頼様に天下を渡したくって、邪魔者を殺した――ということになっておりますが、その実、秀次様の方にも御謀叛のお志はあったようで――その時の軍資金百万両が、そのまま手つかずに、この京都のどこかにかくしてあるというのでござんす」
「うむ……」
　勘兵衛は両腕を組んで溜息をついた。
　たしかに、殺生関白という異名をとった豊臣秀次が、秀吉のため高野山に追いやられて切腹を命じられ、その妻妾三十数名は加茂の河原で斬首され、骸を畜生塚に埋められたということは知らぬ者もない事実なのだ。一説によれば、秀次は秀吉をなき者にしようとして、怪盗石川五右衛門を秀吉の寝所にしのびこませ、失敗したともいわれているが、関白といえばたしかに表面は天下の実権者、それが本当に腹をきめたなら、百万両という黄金を隠匿することも決して不可能とはいいきれない。
「なるほど、話半分として五十万、十分の一として十万両――そのぐらいの金ならば、ひょっとしたら、どこかにかくされていねえとも限るめえ。ただ、その場所は？」

「まあ、親分としたことが、それさえわかれば、その黄金が今まで残っているわけもなかろうじゃありませんか」
「たしかにそれは理屈だが、そういう埋蔵金なんというものは、その場所がわからないことには、絵に描いた餅同然だぜ」
「それが何でも、関白様が最期まで身につけておられた法華経の軸にかくしてあるらしいんです」
「どうして、それが？」
「親分は、風魔小太郎という名前を御存じでござんすか？」
「うむ、家康のころから、関東に根をはっていた盗人の一味だな？」
「そうでござんす。権現様も江戸御開府のころには、毒で毒を制しようと思われたのか、この風魔一族に命じて、関八州の群盗どもを退治させ、その後で用事のなくなったこの一族をほろぼしたはずでござんすが、その中で一人生きのこったのがこの小太郎――それがどういうはずみでか、この法華経の巻物を手に入れて、宝のかくし場所をかぎつけたらしゅうござんす」
「うむ、それで？」
「何しろ、そういう悪党のことでござんすから、そういうものを見つけた日には、一人じめにしようとするのはあたりまえでござんしょうが、やつはいま、この都へやって来て、これから宝を手に入れようとしているらしいんです。その頭をはねて、こっちが百万両を手に入れるという趣向はどうでございましょうか？」
「なるほど、それで話はわかった」
　勘兵衛は、とたんに烈々たる闘志をあらわにして、

「どんなに風魔一族が、天下に名前を知られていようと、この都はおれの縄ばりだ。天子様の御膝下で、あずま男にふざけたまねをされた日には、疾風一家の名にかかわる。これはどうあっても、その巻物——いや、埋蔵金を手に入れて、風魔の鼻を明かしてやらなくっちゃおさまらねえ」
と、太い濁み声に固い決意をこめていった。

風魔小太郎

東海道五十三次の終るところ、三条大橋の上は、相かわらずの賑わいだった。
道中の旅人たちにまじって、東山辺に花をめでた人々が、ほろ酔い加減の顔を春風になぶらせながら帰途につくころ——
橋のほとりの土手の上に立って、淡紫の夕靄におおわれた加茂の河原を見おろしていた青年があった。
年のころは二十二三だろう。茶色の袴に同じ色のぶっさき羽織を着たその身なりは、若い武芸者のように見える。旅人ではなさそうだが、その眼もするどく、その身のこなしも武芸の修練に鍛えあげているのか、寸分の隙さえ見出せない。
「や、あれは?」
所司代屋敷から二人の案内役をつれて、祇園から円山のあたりへ、花見に出かけて帰って来た柳生十兵衛は、この青年の姿を認めてはっとしたように足をとめた。
「どうかなさったのでございますか?」

「妙だ。あの男は、どこかで見たような気がするが」
さすが剣豪といわれるだけに、隻眼ながら、ほかの人間よりは眼も鋭いのか、ともの侍たちをふり切るような大股で歩き出すと、この若侍の方へ近よって行った。
「む……」
相手も、もちろんこの動きには気がついたのだろう。吐息とも気合ともとれるようなつぶやきをもらして眼をあげたが、それと同時に、その全身には、一瞬さっと激しい殺気がみなぎったようだった。
「失礼ながらお名前をうかがいたい」
ひくいながらも力のこもった十兵衛の言葉をはね返すように、
「人の名前をたずねるには、まずそちらから名のって来るのが順序であろう」
「拙者は柳生十兵衛光厳」
いまの世に、武芸に志をいだく者なら、知らぬ者もないこの名前も、この青年の心には大して響きもしなかったらしい。
「なるほど、貴殿が柳生十兵衛殿か。拙者は天下の浪人並木小太郎と申すもの」
と静かな口調で答えた。
「嘘だ!」
「何と!」
「先年、お上に誅せられた風魔の一族、風魔小太郎——御配布の人相書に違いはあるまい。さあ、尋常に縄にかかって、所司代屋敷まで同行するか、さもなくば、この十兵衛が柳生流の極意を見せて、

この場で一刀に斬りすてようか、さあ、二つに一つの返答は?」
天下の達人、名人といわれる十兵衛自身から、これほど鋭くつめよられては、どういう人間でも、動揺するのは当然だろうに、この相手は顔色ひとつ変えなかった。
「なるほど、関東ならいざ知らず、この上方までやって来れば、見とがめる人間もあるまいと思っていたが、さすがは十兵衛、よく見やぶった。いかにも拙者は風魔小太郎、ただ捕われもせぬ。斬られもしまい」
「何と!」
めったになく十兵衛が激したのは、花見の酒の酔がまだ残っていたためかも知れないが、三池典太の一刀は、ほとんど瞬時に鞘をはなれた。
「おお!」
相手もぱっと飛びのいて、間合をとりつつ刀を抜いた。
「仇討だ!」
「斬合だ!　はたしあいだ!」
「やっ!」
もちろん、事情はわからないだろうが、武士が二人で命のやりとりをしようというのだから、まわりの人々も、すっかりあわてふためいて、蜘蛛の子を散らすように飛びたった。
十兵衛の刀は鋭く左上から右下へ、稲妻のように宙をさいた。ぱっとその一撃をうけとめて、刀を流した小太郎の腰へ、鋭い角度で屈曲した白刃が、生あるもののように襲いかかった。
柳生流電光三到の太刀――

柳生流秘伝のこの刀法は、右から左へ切り返すその一瞬の二の太刀に、相手の腰車を両断する狙いを眼目とするものだが、小太郎はあらかじめ、この必殺の狙いを見やぶっていたのか、すばやく宙に飛んで身をかわし、十兵衛の切先は、わずかに袴の裾を切りさいただけだった。
「やるな!　この二の太刀をまぬがれた者はこれまでおぼえがない。その腕だけは、ほめてとらそう」
十兵衛は悲痛な声で叫んだが、相手はまだ十分の余裕を持っているのか、逆に十兵衛を圧倒するようなじり押しの態勢に移って来た。そして一瞬後に、ふたたび二人の太刀は火花を散らして激突した。
二合、三合――二匹の銀蛇のように刃はうちあい、からみあったが、小太郎にとってはこの逆襲も、逃走のための陽動作戦にすぎなかったのかも知れない。若さの圧力におされたように、十兵衛が刃を返して飛びのいた刹那、小太郎も逆に走って河原へ飛びおりた。
まわりの人々が、思わずはっと掌に汗を握りしめた瞬間、その姿はたちまち濃くなっていた紫の夕闇の中に呑みこまれていた。
「追ってもむだだ……風魔一族はもともと山窩の出だ。其方どもがこれからどんな手配をしても間にあうものではない」
苦笑とともに、十兵衛は血相変えて走り出そうとしたともの侍たちを制し、刀を静かに鞘におさめた。
「左様でございましたか。まあ、十兵衛様にお怪我がないのは何よりのことでございましたが」
「それにしても、天下に名だたる十兵衛様のあの刃をあびせられながら、しかも無傷で逃げおわせる

とは、敵も相当の腕前でございましたな」
「いかにも」
十兵衛も沈痛な表情でうなずいた。
「最初は電光三到の太刀、つづいて霞切りの極意——この剣を二度までも受け流すとは、悪人ながら見事というほかはない。恐らく彼は、父祖の恨みをついで、徳川家に一矢をむくいんと、常人に及ばぬ修業を続けたものと思われる。ただ、彼がこの都にあらわれたのはどのような目的を持ってのことか。疾風勘兵衛一味の掃討も、まだ計画が緒につかぬいま、またこの怪盗があらわれたのでは、都にはどのような異変が起るかも知れぬが」
夕闇の中に、十兵衛の独白は、まだしばらく続いていた。

女賊のいざない

その夜、五条大橋の上を通りかかったのはあの小太郎だった。
夜ふけて人通りこそ少なくなったといっても、ああして夕刻、十兵衛に正体を見やぶられたばかりなのに、顔もかくさず、都大路を往来するというのは、怪盗といっても、あまりに大胆な振舞いと見えたが——
「もし、お武家さま」
橋の袂で声をかけて来たのは、市女笠に顔をかくした一人の女だった。
もちろん、辻君、売女のたぐいが、この辺にたたずんで、袖をひくのは、毎日のように見られる光

景だから、小太郎も、
「わしに泊れと申すのか？　女を相手にしている暇はない」
とつぶやいて行きすぎようとしたが、女はとたんに笠に手をかけて、
「風魔さま、まずお待ち下さいまし」
とその名を呼びかけて来た。
さすが、大胆不敵な小太郎も、これにはいくらかぎくりとしたらしい。
「どうして、それを？」
と鋭く問い返した。
「そりゃあ、あなたさまのお言葉とも思えません。さっき、三条大橋のあたりで、柳生十兵衛とのはたしあいは、もう都では、知らない者もないくらいでございます」
「なるほど。だが、わしを風魔小太郎と知って声をかけて来る其方はいったい何者だ！　わしをどこかへさそい出し、所司代輩下の役人どもの手にわたして、いくらかのほうびにありつくつもりなのか？」
現在の立場が立場だけに、風の動き、草のそよぎにも気をくばらなければいけないのだろうが、その声にも、針のように鋭い警戒心がこもっているようだった。
「まあ、あなた様としたことが……わたくしも、麝香のおせんといえば、少しは人様にも知られた女泥棒のつもりでございます。わずかのほうびに眼がくらんで、おかみに訴え出でもしたら、それこそ毛を吹いて傷を求めるというたとえのように、自分の身が危くなるじゃございませんか？」
「麝香のおせん……」

この異名が、小太郎の心に何かの興味を呼び起したのか、声の調子もいくらかやわらかくなった。
「その女賊が、いったい何の用事だな？」
「それは……こういう所で立話も……とにかく、わたくしの仮の宿は、このすぐ近くでございますから、そこまでお越し下さいませんか。わたくしはともかく、あなたさまは、今日の勝負でお顔を知られておりますし、万一、役人でも通りかかっては、まずいことになりましょう」
「はははは、木っ葉役人の一人や二人、斬り捨てるには雑作もないが、お前のいうところにも一理はある。それでは参るとしようか」
よそ眼には、出おくれてお茶をひいていた辻君が、ようやくいいお客をつかまえて、宿へ急ぐところと見えるだろうが、この物騒な二人連れは、五条寺町から少し下った一軒の家までやって来た。
「女賊にしてはいい好みだな」
奥の一間へ通ったとき、初めて女の身にただよう麝香の香りに気がついたのか、小太郎はぽつりと一言つぶやいた。
「郷に入っては郷に従えということもございます。長年都に住みなれている間には、わたくしもみやび心がつきました」
おせんは笑って、部屋を出ると、すぐに酒器一そろいを持って入って来た。
「突然のことで、何も用意は出来ませんが、お近附きのしるしにおひとつ」
「毒見をしてくれれば受けよう」
「まあ、御用心がよろしいこと」
おせんは艶然と笑って、毒見を終ると、杯を小太郎に返し、なみなみと黄金色の酒を注いだ。

それから二度三度、杯をやりとりしている間に、この場の空気も次第にやわらいで来た。
「小太郎さまは、どういう御用で、この都へおいでになったのでございます？」
しどけなく膝を崩し、こぼれんばかりの色気を見せておせんはたずねた。
「うむ、何といっても、このごろ関東は将軍家の威令が厳しくて、仕事も難しくなって来たので、少し河岸を変えようと思ってな」
「どうでしょうか？」
「わしの言葉を疑うつもりか？」
「そういうわけではございませんが、そこは蛇の道は何とやら、あなたさまが京へ来られたわけぐらい、何とか察しもつきますのさ。関白様がどこかへ埋めたという百万両――それがお目あてでございましょう」
「どうして、それを？」
まだその秘密は誰にも知られていないと思っていたのか、小太郎は脇差をぐっとひきつけ、今にも抜かん構えを見せた。
「まあ、危いじゃございませんか。わざわざお刀を抜いてお見せにならなくても、あなたさまのお腕のたつことは、今日の勝負でもわかっております。そう申したとて、べつにわたくしが、べらべらと、明日からこの都中をふれまわるわけでもございますまいに」
小太郎は、ゆっくりと刀の下緒から手をはなした。まるで突き刺すような声で、
「わかった。それで、お前はわしにどうしろというのだ？」
「そのお仕事のお手伝いをさせていただけないかと思いまして」

「手伝いとは？」
「その黄金がどこにかくされてあるか、わたくしは存じません。ただ、これが百両二百両の金ならいざ知らず、百万両という黄金を掘り出し、それを運び出すのは、一人や二人では出来ますまい。こう申しては何でございますが、あなたさまはこの都には土地不案内でございましょうから、そのお手伝いを」
　小太郎は、かすかに左の唇を歪めて、
「わかった。それで、分前はどれだけ欲しいというのだな？」
「五分五分とまでは申しません。三分もいただけば結構でございます」
「それにしても、三十万両ということになれば、そっちの方も、力の貸しがいはあるわけだな」
「そこはおたがいに商売ではございませんか。堅気の衆が、汗水流してかせぎためたお金を、濡手で粟のつかみどりをするのには違いありますまいが、それだけにまた、おたがいに人一倍慾の皮がつっぱっていなければ」
「お前がそこまでいうのなら、こっちも歯に衣着せずに申そうか。大慾は無慾に似たりということもあるが、なぜもう一段、大きな慾を持たないかと思うが」
「もう一段、大きな慾とは？」
「七分三分と遠慮せず、五分五分、いや百万両をびた一文かかすことなく望めというのだ」
　おせんにも、小太郎の言葉の意味はよくつかめなかったらしい。ぎくりとしたように眼を上げて、瞬きもせず、男の顔をじっと見つめていた。
「百万両を一文のこらず……」

「そうだ。女が男にすべてを吐き出させるには一つしか道がない。こうするのだ」
　小太郎は、ぐっとおせんの体を抱きしめ、その身をおし倒そうとした。
「いけません……いけません、それだけは」
　この一瞬間だけは、わずかに人間らしさをとりもどしたのかおせんはまるで生娘のような恥らいを見せたが、小太郎は冷たく、
「わしと夫婦になりさえすれば、百万両はお前のもの。鬼の女房に鬼神というが、たしかにわしは都には土地不案内、お前のような手びきがあれば、仕事もやりよくなって来る。お前も肩書持った女なら、何も今さら、男に抱かれただけで気を失うこともあるまい」
　といいながら、女の唇に自分の唇をよせて行った。

麝香の移り香

　この家の床下からは間もなく、一人の黒い影がしのび出た。
見たところ、浮浪者らしい恰好の男だが、この男が宙を飛ぶような足どりで、三条寺町の疾風の勘兵衛のかくれ家へかけつけたところを見ると、おせんがこうして小太郎をひきずりこんだのも予定の行動に違いない。
「どうだ。六造、魚は網にかかったか？」
　恐らく、弓弦のように心をはりつめて吉報を待っていたのだろう。相手の顔を見るなり、勘兵衛は息せきこんでたずねた。

「それが……どうも、薬がききすぎたようでございます」
「薬がききすぎたとは？」
「初めは、姐御が色仕掛けで、相手をたらしこみ、秘密を打ちあけさせる手はずでございましたねえ。ところが、姐御がその奥の手を出さないうちに、むこうの方がとたんに色気づいたらしく、強引に姐御をおしつけて、お床入りということになりましたんで」
「ほう、そんなら話は上々ではないか。何もお前がおかしな顔をするにも及ぶまい」
とはいったものの、勘兵衛の顔にはちらと奇妙な影がかすめたようだった。
「ところが、ところがでございますよ。寝物語がちっとばっかし、おかしな方角へ動きましたんで。親分の名前がその中に飛び出して来ましてねえ」
「おれの名前が？　おせんがもらしたとでもいうのか？」
「いいえ、そういうわけじゃございません。関東の田舎者のくせに、やつはいろいろ、都の事情を知っていやがるようでございます。いま都では、疾風の勘兵衛とかいうこそ泥が、わがもの顔でのさばっているようだが、お前はそれを知っているかといいやがるんで」
「ほう、おれをこそ泥とぬかしたのか」
もちろん、これほどの怪盗ともなれば、ちょっとぐらいの悪口に、むきになって怒りもしないのだろう。顔を歪めてどす黒いぶきみな笑いを浮かべると、
「それで、おせんは何と答えた？」
「姐御もさすがに弱ったようでございました。何とか彼とか、あたりさわりのないような返事をしてごまかしていたようでございましたが、そのうちに、野郎も大分図にのりゃがって、たとえ井の中の蛙に

しろ、おれとお前がこれから上方で天下をとるには邪魔者だ、何とかばらす手はないか——と、こう持ちかけたんでございます」
「井の中の蛙——とぬかしたのか？」
勘兵衛は、今度は笑いもしなかった。冷たく燃えるような視線を上げて、天井の一角を見つめていたが、
「それで返事は？　おせんは何と答えた？」
と、突き刺すような調子で聞いた。
「あいにくそこは、あらい呼吸が合の手に入って、何とも聞えませんでしたが、親分が定めし知らせを待ちかねておいでだろうと思いまして、一応かけつけて来たんでございます」
「うむ」
勘兵衛はすっくと立ち上って、
「六造、とにかく、おせんの所へ行って見よう」
「親分、大丈夫でございますか？　何しろ相手は柳生十兵衛とも五分五分の勝負をしたほどの使い手でございますぜ」
「はははは、それは、そういう人間と、正面切っての斬合をはじめた日には、勝てっこあるめえが、それにはそれで方法もある」
勘兵衛は、何かいわくありげにいった。
おせんはまるで夢見るような気持でいた。

色仕掛で小太郎をたらしこむことは、ちゃんと最初からの計算に入っていたのだが、自分が奥の手を出す前に、男の方から行動に出て来るとは思わなかったのだ。
それもまた、嵐のような激しさだった。それだけならばまだしものこと、後朝の別れを惜しむどころか、
――わしには今夜のうちに用事がある。
と平気な顔でそのまま去ってしまったのだ。
「女の心も知らないで」
一応、心を許させて、法華経の巻物を手に入れたら、後は毒殺しろ――と勘兵衛にいわれていたことも忘れて、おせんはちえっと舌打ちをした。
胸の中が、鋭い爪でかきむしられるような思いだった。自分の気持に、大きな矛盾があることも忘れ、おせんは心も狂わんばかりだった。
「おせん、いまはずいぶんお楽しみだったようだな」
がらりと襖を開けて入って来た勘兵衛を見て、おせんは顔色を変え、寝間着の襟をかきあわせて、
「親分……」
「何も心配することはねえ。むこうが帰ったことを知って、それでこうしてやって来た」
とはいうものの勘兵衛の顔には、包み切れない嫉妬の色があらわれている。
「どうだ。あいつは年もわかく、柳生十兵衛とも五分の勝負が出来るほどの豪の者だ。お前もずいぶん楽しませてもらったろうな」
「いやらしい！」

「何のいやなことがあるものか。お前の色好みは、悪党仲間じゃ知らねえ者もねえくらいなのに……ところで、やつの住居はわかったのか？」
おせんは、苦いものを吐き出すように、
「あの男を色仕掛でたらしこめというのは、親分の最初のおいいつけだったでしょう。わたしは、それを馬鹿正直にまもっただけ、何もお叱りをうけるおぼえはありゃあしません。住居はたしか、北野の天満宮のそばに、いおりを結んでいるといいましたが、それだって、こっちが訪ねて行ったわけじゃなし、本当か嘘か分りもしませんでした。何しろ、あいつとは、今夜初めて顔をあわせたばかしですし……そう一晩で、何も彼もかたづけるわけにも行きませんのさ」
「天満宮のそばのいおりに？」
その一言が、勘兵衛の神経をことのほか刺戟したらしい。
「なるほどな。盲滅法に襲いかかってもしかたがねえ。明日、昼のうちに物見をさせて」
というひくいつぶやきが口からもれたところを見ると、その胸中には、小太郎に止めを刺すための計画が、しきりに去来したのだろう。
一瞬後に、眼を開いて、勘兵衛は鋭くいい出した。
「分った。それでお前の役目はすんだ。これからおれといっしょに来い」
「わたくしが、どうしてこの家から逃げ出さなくっちゃいけないんです？」
「何もやきもちからいうんじゃねえ。ただ、お前がこのまま、この家に残っていた日には、何か面白くねえ事になりそうな、そんな気がしてしかたがねえんだ。まあ、いいからおれといっしょに来るがいい」

おせんは不承不承、着物を着かえると勘兵衛とともに家を出た。
だが、たしかに怪盗の予感というものは、普通の人間とは比較にもならないほどの鋭さを持っているのだろう。それから小半刻もたたないうちに、この家は所司代輩下の役人たちによって完全に包囲されてしまった。
「風魔小太郎は、この家へ入ったと申すか」
その中から歩み出て、近くの役人に聞いたのは、夜でも一目でそれとわかる隻眼異相の柳生十兵衛だった。
「はい、訴人によりますと、いかにも彼と思われます。相手の女は、市女笠に顔をかくして、顔もわからなかった由にございますが」
「うむ、かかれ!」
強敵に対する闘志がふたたび心に満ちあふれて来たのか、十兵衛は声に力をこめて命令した。それと同時に、捕手たちは、勢いこんでこの家へ殺到して行った。
たちまち雨戸は蹴倒され、それと同時に十兵衛たちも、家の中へおどりこんで行ったが、もちろん家の中には人影もない。
「敵もさすがに稀代の曲者――手入れがあることを事前にかぎつけて、いちはやく、姿を消したのでございましょうか」
役人の言葉に、十兵衛は暗い表情でうなずいたが、その直後、この家の中にただようかすかな移り香に気がついたか、
「この香りは、たしかに麝香と思うが」

「はい……疾風勘兵衛の一味には、たしか麝香のおせんという女賊がまじっているはずでございます。この家は、恐らくその住家ではございませんか」
「疾風の勘兵衛……麝香のおせん……」
板倉重宗との密談の内容が、ふたたび心によみがえって来たのか、十兵衛は二度三度、この名をつぶやき返していた。

暗夜の強襲

その翌日の夜のこと――
北野天神の近くにあるささやかないおりでは、小太郎が何かの図面を前にして、灯の前に端座を続けていた。
これが黄金百万両を埋めた地点をあらわしている秘図なのか、その眼は深く澄みきって、まるで無限の彼方を見つめているようだった。
その時、扉をたたく音に、小太郎も瞑想を破られたように眉をひそめて、
「誰だ?」
「わたくし――おせんでございます」
小太郎はそのまま立ち上って、戸じまりをはずしたが、飛びこんで来たおせんは息をはずませて、
「小太郎さま。早く、早くここからお逃げ下さいまし」
「逃げろとは? 所司代屋敷から捕手が来るとでも申すのか?」

「いいえ、そうではございません。この、あなたのかくれ家を、疾風勘兵衛がかぎつけて、一味の者を選りすぐり、夜討をかけようとしているのでございます」
「疾風一味が？」
小太郎は形のよい眉をぴくりとひそめ、
「それではやはり、お前は、わしが最初思ったように、彼の息がかかった女だったのか。それなのに、そのたくらみを事前にこちらへ知らせるというのは、彼に対する裏切りになるのではないか？」
「はい、自分で何をしているかぐらいは、わたくしにもわかっています」
自嘲のように、おせんは答えた。
「このことがむこうにもれたなら、わたくしは仲間に見せしめのため、半殺しどころか、本当に殺されてしまうでしょう。ただ、わたくしのような、こんなあばずれ女でも、一生に一度、ほんの一度ぐらいは、自分の命など、どうなってもよいというほど、思いつめることもありますのさ。ほほほほ、これであなたが殺されたら、わたくしもこの世に生きているかいもありますまい」
わずか一度のちぎりが、この女を生れかわったようにさせてしまったのか、それともまた、勘兵衛に含められての芝居なのかはわからないが、小太郎は静かに答えた。
「わかった。夜討大いに結構——わしはここから逃げはしまい」
「どうして？」
「わしがこの都で勢力を張るためには、疾風勘兵衛という男は、ほかのどういう相手にもまさる邪魔者ではないか。わざわざ、探して斬るのは大変だと思っていたが、むこうから出むいてくれれば、こちらの思うつぼだ」

「でも……あなたさまのお強いことは、今更誰にいわれるまでもなく承知しておりますが、何しろ鉄砲も十梃ほど用意しているくらい、下手におけがをなさっても詰らないではございませんか」
「ははははは、女賊のお前にしてはずいぶんおかしなことをいうものだな。闇夜に鉄砲という通り、そんなものが……」
といいかけて、小太郎はこのいおりの周囲に迫って来た何かただならぬ殺気に気がついたらしい。
「おせん、お前の仲間がやって来たようだ。もう逃げるひまもあるまいから、そっちにかくれているがよい」
と、夜具の後を指さし、ぷっと灯を吹き消した。
次の瞬間、雨戸を蹴倒して飛びこんで来た一人を抜く手も見せず斬りすてると、小太郎は反動のようにいおりの外へとび出した。
おりからの闇が幸いしたか、待ちかまえていた鉄砲はいっせいに火を吐いたが、小太郎の身には一弾もあたらなかった。
そして、その次の瞬間に、大刀をふりかざした小太郎は、敵の重囲の中へおどりこんでいた。
もう、こうなっては、鉄砲も物の役には立たなかった。柳生十兵衛とさえ、互角の勝負をしたほどの剣客に内懐へおどりこまれては、精悍を誇る勘兵衛の手下にしても、受けこたえることは出来なかった。
刀は動けば必ず人を斬り、一人の血はまた新しい血を呼んだ。まるで、鬼神のような小太郎の奮闘に、敵はたちまち総崩れとなった。
「汚し！　返せ！　疾風勘兵衛はいずれにある？　この小太郎が一騎討の勝負をいどもうぞ」

潰走する相手を追いかけながら、小太郎は大声で叫びかけたが、もちろん答える者もなく引返して来る者もなかった。

小太郎はそれ以上の追跡をあきらめたように、刀の血をぬぐうと、もとのいおりへ帰って来た。

「おせん、おせんはどうした?」

灯をつけて、いま一度部屋の中を見まわしたが、そこにはもうおせんの姿は見あたらなかった。

小太郎は静かに、机の上に眼を落した。

今までそこにあったはずの秘図は、いつの間にか姿を消していた。

「やったな……」

これが普通の人間だったら、黄金百万両の秘密をかくした絵図面を盗み去られては、飛び上って驚くのも当然だろうが、この男はどこまで大胆不敵なのか、わずかに溜息をもらしただけだった。

「さっきの言葉だと、まるでこっちへ惚れこんだようだったが、女というものには、どんなことがあっても心を許せぬものだ」

女賊往生

おせんはその時、この庵から二三丁むこうを走りつづけていた。

「待て！　おせん！」

後から聞えて来たふとい男の濁み声におせんはいよいよ足を速めたが、どんなに夜目のきく女賊だといっても、後に気をとられては足もとがお留守になってしまったのだろう。石にでもつまずいた

か、よろめいて前のめりに倒れたところへ、後からとびついて来てその襟がみをおさえつけたのは、疾風の勘兵衛だった。

「ば、馬鹿な、疾風と異名をとったこのおれが、追いかけているのに、逃げきれるとでも思っているのか!」

「………」

「何のため、お前はあの場を訪ねて行った?　男恋しさの一念で、おれたちのたくらみを打ち明けたのだろう。そうでもなければ、これだけ練りに練った計画の裏をかかれることはないはずだ」

「待って、待って、この手をゆるめて、少しはこっちの話も聞いて下さい」

ようやく落着きをとりもどしたのか、それとも捨鉢になって、どうにでもなれと覚悟をきめたのか、おせんは顔をあげて、勘兵衛の方を見あげた。

いま倒れたはずみに唇でも嚙みきったのか、その端からは、たらりと一本、赤い血が緒をひいている。

「いうことがあるなら早くいえ。あの庵の中へふみこんで、麝香の香りをかいだとき、おれははっきりお前がいるな――と見さだめたのだ」

こういう話から判断すると、勘兵衛は恐らく小太郎が外へとび出したのと入れ違いに庵室の中へふみこみ、逃げ出すおせんを追ってここまでやって来たのに違いない。

「でも――今夜ああして、あそこを狙った目的は、あの絵図面を手に入れればよかったのでしょう。それならば、なにもむこうを殺さなくても、こっちも味方を殺さずに、すんだはずじゃありませんか」

「その絵図面が、いったいどこにあるというのだ？」
「ここ、わたくしの帯の間に」
「何だと！」
勘兵衛の声の調子はとたんに変った。もちろん、いまだに疑惑は捨て切っていない様子だったが、いくらか声をやわらげて、
「どれ、それをこっちへもらおうか」
と左手をのばした。
「そりゃあ、渡すことは渡すがねえ。ただ、これが手に入れれば、もう風魔を仕止める必要もないわけだね、今夜の勝負でもわかるように、あの男は普通のことでは、とても歯が立つ相手じゃないよ。むこうにしたって、この絵図面がなくなれば、もうどうにも出来ないわけだし、味方をいためるだけ損じゃないか」
「うむ」
勘兵衛は女の手から絵図面をうけとった瞬間に、ふたたびがらりと声音をかえた。
「おせん、お前はやつに惚れこんだな？」
「え？」
「お前がこうして図面を盗み出したのも、惚れた男を出来るだけ危え目にあわせまいとする女心のあらわれだろうが、はははは、麝香のおせんとまでいわれた女にしては、柄にもない殊勝な心を出したものだ。だが、お前も知っている通り、この勘兵衛はうけた恨みを生涯忘れねえ男だ。それにこの絵図面を手に入れても、役にたつのはこっちだけ、むこうにすれば、長い間睨んでいたことだから、

いい加減そらでおぼえていよう。ひょっとしたら、写しもとってあるか知れねえし、やつにとっては、これがあろうがなかろうが同じことだ」
この言葉に激しい恐怖を感じたのか、おせんは必死に身をずらして、一尺でも、一寸でも勘兵衛のそばから離れようとしていた。
だが、勘兵衛は足に力を入れて、ほどけた帯の片端をぐっとふんまえながら、
「最後にもう一度いっておく――たとえ、どういう理屈をつけようと、裏切りの罪は」
「わたしを殺す――というんだね？」
「念仏となえて往生しろ！」
さっと勘兵衛の刃が下に落ちた。もちろん、おせんにその狙いをかわす力があろうはずはない。ぎゃーっと鋭い悲鳴をあげて、地上につっ伏したが、勘兵衛はなおも冷たい調子で、
「誓いを忘れ、おれを裏切ろうとするからこういう目にあうのだ。恨むなら、自分自身を恨むがいいわ」
と言い残すと、血刀をぬぐい、悠々とその場を立ち去った。
それから間もなく――
この場へ姿をあらわしたのは小太郎だった。たとえ、相手が疾風勘兵衛一味の悪党だとしても、人を斬ったと役所へはとどけて出られぬ身の上なのだし、いさぎよく、今日かぎりあの庵を捨てるつもりだったかも知れないが、聞えるか聞えないかのおせんの呻き声にはっとしたらしく、足を速めてこちらへ近づいて来た。
「おお、お前はおせんではないか？」

その顔をのぞきこんで、いよいよぎくりとしたらしく、血まみれの体を両手でかかえあげると、
「おせん、おせん、しっかりしろ。小太郎だ。わかるか?」
と耳に口をよせてささやいた。
「小太郎さま……たしかにそのお声は。でも、眼が見えません……」
「誰だ! 下手人は?」
「疾風の勘兵衛……あなたへあのことを知らせたばかりに……」
「うむ」
あわれみと同情と怒りとが、溜息にこもって小太郎の唇からもれた。
「でも、わたくしは満足なんです……殺されても、あなたの腕に抱かれて死ねれば……」
「それで、あの絵図面を盗んだのは?」
「わたくし……それも、勘兵衛に、あなたを狙うことを思い止まらせるために……」
「うむ」
小太郎にもようやく事の仔細はのみこめたらしかった。
「そうか。そうだったのか。手当てをしてやろう——といいたいが、この傷ではそれもとどくまい、迷わず成仏するがよいぞ」
「わたくしのような女が、成仏など大それた望みは今さら持ちません」
「何をいう。善人なお成仏す、いわんや悪人においておやという言葉さえあるではないか。どのような悪人であっても、自分の命をすてて、人の命を救おうとする以上の善事はない。その途中に死んだというのなら、これはりっぱに極楽往生をしとげるだけのことはあるのだ……」

おせんの顔には、かすかな笑いが浮かび上ったようだった。だが、もう口をきく力もないのか、そのまま二三度身をふるわせ、小太郎の腕の中で最期の息をひきとってしまった。
「南無……」
とつぶやいて、小太郎は死体をその場に横たえた。そして生ある者にいうように、
「この恨みは必ずはらしてやろう。疾風勘兵衛は必ず仕止めて、そなたの仇をとってやろう」
とつぶやいた。

落日の決闘

その翌日の夕方——
舟岡山の頂上へ上って来たのは、疾風勘兵衛たちだった。
手下はあわせて十四五人、勘兵衛も今日は野武士のようないでたちで、刀を腰にたばさんでいる。
「なるほど、方円堂というのはこれか、春分の日の五つの刻に、この屋根が影を落すところという、大ざっぱにいってこのあたりか——違っても、大したことはないだろう」
と、ぶつぶつ、口の中でつぶやいていたところを見ると、あの絵図面には、宝のかくし場所を示すそんな文句が書きこんであったに違いない。
勘兵衛から少し離れたところでは二人の子分が心配そうに、
「こういっちゃ何だが、親分は少し焼きがまわったんじゃなかろうか?」
「どうして?」

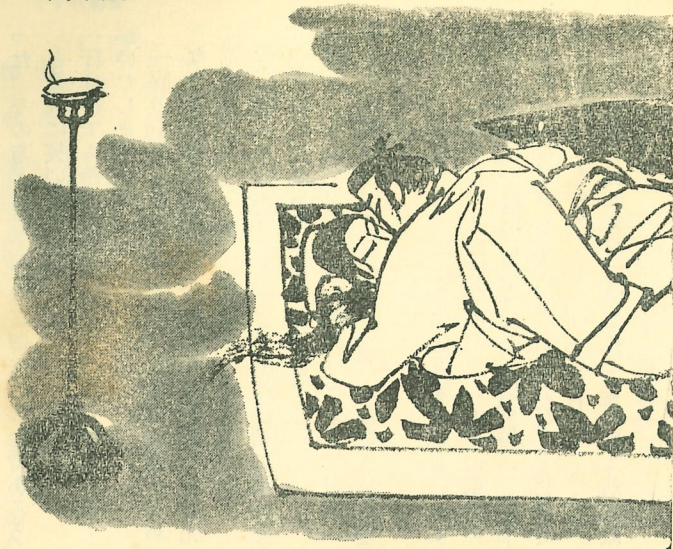
「そりゃあ、百万両といえば大仕事には違いねえが、それをまさか、日のあるうちに掘り出すわけにも行かねえだろう。そんなら、まず一人で物見にやって来て、かくし場所をたしかめ、その上で、おれたちが夜やって来るというのが定法だろうに、こうして多勢やって来ては人目にもかかるじゃねえか」
「それはたしかに理屈だが、親分も昨夜のことがあったんで少しはおびえていなさるんだろう。あの風魔とかいう男は、若いに似あわず滅法腕がたつ。こっちが宝のかくし場所をつきとめたとしても、むこうも先にその図面を見ていることだから、五分と五分――ここへまた、やつが出て来た日にゃ大変だと思ったので、それでおれたちをつれて来たのだろうが、まあ、そんなに心配することはあるめえよ」
　昨日の襲撃の失敗によって、風魔小太郎の手練の恐ろしさは、勘兵衛はじめこの人々には骨身にしみているはずだった。それなのに、しょうこりもなく、またこのような危険をおかすのも、百万両という黄金の魔力がまるで呪縛のように、ほかのすべてを忘れさせるためかも知れなかった。
「親分！　親分！」
　そばの藪かげから飛び出して来た一人は、いきなり胴間声をあげた。
「何だ。まだお天道様があるのに、そんな大声を出す馬鹿があるか」
　と勘兵衛はたしなめたが、その顔色にもおかまいなく、
「親分、そこに大きな深い穴が掘ってありやすぜ。それもつい近ごろのものらしく、まだ土の色も新しいんで……その中に、こういうものが見つかりました」
　と掌をつきつけた。その上には、山吹色の大判が一枚、眼もまばゆいばかりの光をはなっている。

「なるほどな、この書印はたしかに太閤様時代のものだが」
　勘兵衛の眼の光は、とたんに変ってしまったようだった。
「どこにある。その穴は？」
「へえ、むこうで」
「案内しろ」
　人々は勘兵衛を先だてて、藪かげに入った。なるほど、直径六尺、深さ六尺ぐらいの穴が、内部に赤い土肌を見せて下へのびている。その底にはまだ、土に埋れているらしい黄金が、ちらりと顔をのぞかせていた。
「おかしいな。絵図面の文句とはまるで方角が違うようだが、この穴は？」
　勘兵衛もふしぎでたまらなかったのか、ひとりごとともに首をかしげたが、その時、背後の方から、
「これは汝等の墓穴だ」
　と嘲笑うような声が聞えて来た。
「あッ！」
　勘兵衛たちは、とたんに色をなしてふり返った。恐らく、風魔小太郎が、この場にあらわれたと思ったのだろう。
　だが、そこにたたずんでいた者は、小太郎ではなく、隻眼異相の剣客だった。
「手前は誰だ！」
「この二蓋笠の紋所が眼に入らぬか。わが名は柳生十兵衛光厳」

「柳生十兵衛！」
いま天下に知らぬ者もないこの人物は、ある意味では、小太郎よりもはるかに恐ろしい敵といえよう。
穴を楯にとりながら、勘兵衛はじりじりその位置を変えた。もちろん、一瞬の隙に乗じ、その異名の由来となった足の速さに物をいわせて逃げ出すつもりに違いなかったが、十兵衛は、その心底まで見やぶったように、
「この舟岡山の麓は、いま所司代輩下の捕手たちが、十重二十重にとりまいて、蟻のはい出す隙さえないぞ。汝がいかに逃げようと企てても、天を飛び、地を潜る術を心得ていないかぎり逃れようはないのだ」
と、止めを刺すようにいいはなった。
「う、うぬ、は、はかったな！」
「人をはかる者は逆にはかられるのだ。汝もこれまで、人をあざむきさいなんだむくいがいま帰って来たのだ。疾風の勘兵衛とまでいわれた男なら、散りぎわぐらいはいさぎよく……さあ、おとなしく縛につくか。それともこの三池典太の銹となるか？」
勘兵衛も今はようやく、覚悟をきめたらしかった。
「なるほど、十兵衛よくいった。おれもたしかに、泥棒太閤とまでいわれた男一匹、今更下手に逃げもしめえ。真剣白刃の勝負じゃあ、必ず強い者が勝つとはきまっていねえ。どうれ、あの世への道づれに、十兵衛、手前をつれて行こうか？」
空虚と思える放言だが、その心は動揺しきった手下たちをはげまし、自分自身に覚悟を固めさせる

ところにあったのだろう。
十兵衛はかすかな笑いさえ浮かべて三池典太の鞘をはらった。
「盗賊にしては近ごろあっぱれな……参れ」
まるで、追いつめられた獣のように、うなりをあげて、十兵衛の左右から、二人の手下が飛びかかった。
だが、その刃が十兵衛の身にもふれないうちに、三池典太は血しぶきあげて、一人を穴の中へたたきこみ、一人をそばにのけぞらしていた。
「うぬ！」
「さあ、お次は誰だ！」
穴を廻って十兵衛が、残りの敵に迫ろうとしたとき、
「先生！」
と声をかけて、この場へとび出して来たのは小太郎だった。
「先生、勘兵衛だけは手前にお預けを？」
「うむ、斬れ。斬るがよい」
この問答を聞いたとき、勘兵衛は文字通り怒髪天をついて、
「手前は！　風魔の一族ではないのか！」
「左様、柳生家の門弟、並木小太郎——但馬守様の御用をうけたまわって、京までまいったのだが、顔を見知られていないを幸い、十兵衛様の御依頼をうけ、風魔小太郎といつわったのだ。汝の輩下こそ斬ったが、ほかには人をあやめたこともなく、一紙半銭たりとも人の物に手をかけたおぼえはな

い」
「それでは、三条大橋の斬合は？」
「汝等をおびき出すために、あらかじめ先生と打ちあわせ、柳生流極意の型を真剣白刃で使って見せた。都第一の人通り――間もなく汝等の耳にも、風魔小太郎都にあり、という噂はとどくと思っていたが、それも案外早かったな」
「そ、それでは、関白秀次、百万両の埋蔵金は！」
「疾風勘兵衛ほどの大盗ともなれば、ちっとやそっとの餌ではひっかかるまいと思ったので、話に大きく尾鰭をつけて、百万両までせりあげたのだ。はははは、あまり小さな話では、かえって乗って来なかったろうが、やはり人間慾の皮にはかぎりがないな」
「はははは、はははは、わははは」
勘兵衛は突然、腹の割れるような笑いを爆発させた。
「なるほどそうか。そうだったのか。いや、甘すぎる話ほど用心しろ。うまい餌には必ず鈎がついていると、手下にたえずいいきかせていたこのおれが、こんな甘え手にひっかかるとは、いやわれながら情ねえが、これも年貢のおさめ時か。百万両の夢がさめては、もうこの世に何の未練もねえ。さあ、来い！」
「参る！」
勘兵衛もいまは覚悟をきめたのか、もう一歩も後退しようとしなかった。夕日を浴びたその顔はまるで赤鬼のようだった。
「や！」

「おお！」
すり足に歩を進めた小太郎と二合三合、物すごい激突は展開されたが、さすがに野性我流の剣法は、柳生の高弟の敵ではなかった。
「無念！」
見事に肩口を斬り下げられ、穴の底へ転落して行った勘兵衛の姿を見たとき、手下たちも、もうこれまで――と観念したのだろう、いっせいに刀を投げ出して、この場から逃げ去っていった。
「小太郎、たしかに腕をあげたな」
「はい、三条河原において、先生に真剣で御教示をうけてから、一段と剣の道に開眼したような思いもいたします。しかし、一口に悪人といっても、人の心はさまざまでございますな」
「うむ」
十兵衛はかるい溜息とともにうなずき、沈み行く夕日を見つめながら、しばらくその場に立ちつづけていた。

第四話　くずれ隠密

みだれ雲

かつ、かつ、かつ、

俗に逢魔ケ刻といわれる黄昏の薄闇を鋭い馬蹄の音で破って、池田三十五万石の城下、岡山の町を疾風のようにかけぬけて行った一騎の侍がある。

「殿様だ！」

その顔に気がついた人が、あわてて土下座するひまもなく、すぐその後を追うように十騎ばかりの侍が一団となって、もうもうたる土煙をあげながら、馬を走らせて行った。

「殿！　殿！」

「お待ち下さいませ！」

口々に叫びかける声も耳には入らぬように、走り続けることおよそ四半刻あまり、野分の風の吹きすさぶすすきの野に出ると、初めて、先頭の池田新太郎光政は白馬の手綱をひきしぼった。

池田三十五万石の当主としては、少しはしたない振舞いだが堂々とした風格と威厳の中にも、若さの無分別と悪戯気を持つこの大名には、日ごろからこんな癖がある。

時は三代将軍家光の治世、九州全土を震駭させた島原の乱もようやく無事におさまって、天下は長い太平を約束されているというのに、父祖以来の戦国武士らしい性格をそのまま持ちこしている彼の気性と行動は、その臣下たちにとっては、たえず頭痛のたねとなっていた。

「殿！」

ようやく追いついた家来たちの顔を、光政は愉快そうに見まわして、

「はははは、久しぶりに一汗かいて気持がよか

った。その方どもも、いい鍛錬になったであろう」
と豪放に笑い出した。
「汗は汗でも冷汗でございます。殿がこういうことをなされるたびに、我等一同、寿命のちぢむ思いがいたします」
一同の中から進み出た侍が、まるで主君を責めるようなきびしい調子でいい出した。色白の女のようなやさ男だが、両眼はいかにも思慮深そうな光を蔵し、その眉も、学識の深さを暗示しているように見える。
近江聖人といわれた大学者、中江藤樹の高弟で蕃山と号している熊沢了介——池田藩では随一の忠臣、そして文武両道の達人だった。
「何をいうのだ。其方のお説教には余も一目おいてはいるが、たかがこれしきのことに、そのように騒ぐのは解せぬではないか。其方も書物ばかり睨んでおっては体に毒、少しは余を見習った方がよかろうぞ」
「はっ……しかし、夜の遠出は危険でございますゆえ、至急御帰城を」
「危険じゃと？　はははは、この太平の御時世に、しかも城とは目と鼻のわが領下で、何が危険と申すのじゃ？　豊臣の残党なり、切支丹の一味なりが、ひそんでいるとでも申すのか？」
「左様ではございませんが、お一人だけで行動されましては、夜陰に乗じて、どのような不心得者が殿を狙わぬともかぎりませぬ」
「よけいな心配は無用にいたせ。この新太郎光政が、そうやすやすと他人の手にかかるものではないぞ」

光政の言葉に、了介も不安に顔を曇らせながら黙りこんでしまった。
武勇濶達、豪放磊落な光政の性格は、もしも戦国時代なら、あるいは天下をその掌中におさめるかも知れない英雄として家臣一同の尊敬の的ともなるだろうが、世がおさまった今となっては、徳川幕府は虎視眈々と、外様大名の取りつぶしを狙っていることだし、もし、ここに彼自身の乱業なり、家中の不取締りなりが加われば、光政が英明であればあるだけ、池田三十五万石には、かえって危険が加わるのだ。そのことを知りぬいている了介は、一瞬も、光政から眼がはなせなかったのだ。
「このまま帰るのも面白うない。そうじゃ、これからは夜釣りに参って一盞くみかわすことにいたそう。者ども、ともを！」
いい出せば後にはひかぬ光政だった。いうが早いか、家来たちが止めるひまもなく、愛馬に激しく鞭をくれていた。
「殿！」
すっかり暗くなった空をさっと横切って、大きな流れ星が一つ走った。それもいま、光政が走って行った西の方へ、長い尾をひいて落ちたのだ。
「凶兆——何か変事が起らねばよいが」
必死に馬のあぶみを蹴って、光政の跡を追いながら、熊沢了介はぽつりと口の中でつぶやいていた。
同じころ——
国家老、景浦藤右衛門の別宅では、主人の藤右衛門が奥の一間で、新規お召かかえの長沢隼人とい

う侍と密談を続けていた。
「長沢、あせってはなるまいぞ。我等としても、事を早急に運びたいのは山々じゃ。大公儀の眼も最近は、ことのほか当藩にきびしい様子。殿はあのような御性格ゆえ、このまま殿とおたてしておっては、どのような事態になるやも知れぬ。そうなっては、我等の苦心も水の泡、その以前に計画はおし進めねばならぬのだが、ただ、急いで事を仕損じては、かえって虻蜂とらずになる」
「ごもっともでございます。万に一つの狂いもない方策が立ちますまでは、下手には動けますまいて。三十五万石の実権を握るのと、お手討になって首が飛ぶのとでは、えらい違いでございますからな」
「これ、そのようなことは、あまりはっきり申すではない。すべてはお家のためなのだ。ただ、その結果、こちらが得をするかどうかは全然べつの問題だからな」
二人は眼を見あわせてにたりと笑った。
景浦藤右衛門は、頭に白髪をまじえてはいるが、眼光は鷲のように鋭く、がっしりとした体つきで、しかもどこかに陰険な策士らしい暗さを持っている。
長沢隼人も、浅黒く凄気にあふれた顔つきで、額の上の赤あざが、何となくぶきみな印象を与えている。眼のくばり方や身のこなしには、ひとかどの剣客らしい感じもにじみ出ているが全体の印象の暗さが、その風格を失わせていた。
だが、この二人を結びつけたものは、恐らく二人に共通する暗さだったに違いない。
「まあ、時期はしだいに熟して来た。同志もひそかに集っており、奥女中の中にも味方はいる。この分ではまず遠からず」

「毒をおすすめまいらせて?」
「うむ、そして勝三郎様をかねての手筈通りにお立て申せばいいのだが、ただ、その前に邪魔者を一人かたづけなければ、それもうまくは行くまいぞ!」
「邪魔者と申しますと?」
隼人の問いに、藤右衛門は噛んで吐き出すような調子で、
「知れたこと――熊沢蕃山めじゃ。彼のためには、これまでにも何度苦汁を呑まされたか知れぬ。貴公は二年前に仕官したばかりだから、くわしい事情は知らぬであろうが、いま我等が敵にまわして、あれほど恐ろしい相手は藩中に二人とおるまい」
「ははははは、御家老様のお言葉ではございますが、それはいささか、彼を買いかぶっているのではございますまいか。あのように生白い、味噌すり学者に何ほどのことが出来ましょう。それはたしかに、日頃から拙者などには分りもせぬ七むずかしい聖賢の書物などを読んではおりますが、剣をとれば、この隼人の一太刀さえもうけとめられますまい。邪魔とあるなら、一刀の下に、すぐにでも斬って捨てましょうが」
「うむ、貴公の剣の腕を買って、当藩に推挙したのは拙者だから、その腕前はよく承知いたしておる。たしかに池田藩中で、貴公の右に出るものはおらぬだろう。ただ、熊沢を斬るとしても、表だっては出来ぬこと、これはやはり一工夫も二工夫もせねばなるまい」
「その工夫とは、どのようなことでございましょうか?」
「それは……」
といいかけて藤右衛門はぎくりとしたように天井を見あげた。

それと同時に、長沢隼人は席を蹴立てて飛び上った。長押(なげし)にかけた槍をつかむと、ぴゅーんと素振りをくれて鞘をはらい、いきなり天井板をつきあげた。
さっとひきもどされた槍の穂先に、べっとりと血がついているのを見て、藤右衛門も自分の疑惑が、妄想ならぬ事実だということを悟ったらしい。
「曲者！　曲者がしのびこんだぞ！　出あえ！　出あえ！」
と大声に叫びたてた。
「殿がわれらのたくらみに気づかれて、しのびの者を？」
部屋から外へ走り出ながら、隼人も血の気を失っていた。
「わからぬ。ただ何者にせよ、我等の秘密を知られた上は、絶対に生かしてはおけぬのだ」
藤右衛門の声は乱れていた。

黒装束の男

「それ！　あそこだ！」
長沢隼人の指さした方角にむかって、おっとり刀の人々は、ばらばらとかけ出して行った。母屋の屋根のあたりから飛び出した一つの黒い影が、まるで猿のような身がるさで、屋根から庭の木、そこから塀へ、そしてまたもんどり打って外へと逃げ出して行く。
さっきの槍の一撃で、よほどの手傷をうけているには違いないが、何と気丈な男なのか、右往左往する人々を尻目に、人間業とも思えない速さで逃げて行くのだ。

「こやつ、逃さぬ！」
隼人は刀をぬいて、人々の群を追いぬき、自分自身が先頭にたった。
「しめた！」
逃げ道に窮した相手が、血迷ったように、すぐ眼の前の坂道を、必死にかけ上って行くのを見て、隼人は凄い笑いを浮かべた。
この道はもう行きどまりになっていて、その先は小さな祠になるが、そのむこうは垂直に切りたった崖――その下は、岡山の町を流れる旭川の上流が、満々たる水をたたえている。
「曲者、覚悟！」
崖のふちに立って観念したようなこの黒装束に、隼人は猛然と飛びかかった。
相手は辛うじて刀をぬくと、何とか最初の一撃だけはうけ流した。
さっきの槍の傷は、天井裏ですぐ応急手当を終ったのだろう。全身黒のしのび装束の左腕に白い布がまかれ、その上に真赤な血がにじんでいるのも、凄惨きわまる感じだった。
「貴様はどこの何者だ？　誰に命じられて、御家老様のところへしのびこんだのだ？」
むだな質問と知りながら、隼人はするどく問いかけた。もちろん、答えのあるはずはない。ただその切先だけが、断末魔の痙攣を暗示するように、ぴくぴくと上下に蠢動(しゅんどう)しているばかりだった。
「ええ、面倒な！」
強引きわまる剣法で、相手の太刀を横にはらうと、隼人は真向上段から、必殺の一撃をあびせて行った。
「ああっ！」

辛うじて、この切先だけはかわしたものの、その瞬間に体勢の崩れた黒装束は、絶壁の上によろめき、悲痛な叫びを後に残して、崖の下へ転落して行った。隼人の刃は、その影を斬るように鋭くのびた。

いま一声の鋭い悲鳴と、あたりの静けさを破る水音とを耳にしながら、隼人は刀を返して刃を見つめた。切先にべっとりついた血糊が、すべてを物語っているようだった。

「どうした？　相手は仕止めたか？」

ようやくここまで、息せききってかけつけて来た藤右衛門は上ずった声でたずねた。

「たしかに手ごたえはありました。たとえ、致命傷ではなくても、あれだけの手傷を負った上、ここから転り落ちたのでは、よもや助かる見込みはございますまい」

「うむ、して、曲者の正体は見当がついたかな？」

「いいえ、最後の土壇場へ追いつめられても一言も物を申しませぬ。ただ、あれだけきびしく忍びの術の訓練をうけているところから察しまして、当藩中の者ではなく、恐らく柳営隠密陣に所属する甲賀組または伊賀組の者ではないかと思われますが」

「うむ……そうだとすれば、事はいよいよ火急に運ばねばなるまいぞ」

景浦藤右衛門は眼を閉じて、深い思案に耽り出した。

藤右衛門と光政は、最初から全然気性があわなかった。国家老という重職にあれば、その行動も、安全第一を願うあまりに、どうしても退嬰的になって来るのは、人間として避けがたいことなのだが、若く気性の激しい光政には、藤右衛門の事なかれ第一主義は全然意にそまなかったらしい。

その献策、治政方針には、たえず一々反駁して、しまいには衆人環視の前で、馬鹿者呼ばわりさえ

するようになって来たのだ。

いかに、主君の意志には無条件で従うのが臣たるものの道だといっても、自分の子供のような光政に、こう手ばなしでどなりつけられては、藤右衛門も人間として快よかろうはずはなかった。こうして、藤右衛門は病気といいたてて、この別宅にひきこもるようになったのだが、いつの間にか、その心の中には織田信長に対する明智光秀のような叛意が生れて来たのだった。

といっても、戦国時代からはるかに下った当世では、主君を殺してその位にとってかわることなど到底思いもよらない。藤右衛門としても、そこまでは思ってもいなかった。

彼の狙いは、光政をなきものにし、その異腹の弟である勝三郎を当主に樹立しようということだった。この異母弟は愚鈍で無気力、光政とは正反対の性格だったから、人形としてあやつるためには、絶好の相手だった。

藤右衛門としては、この一撃によって家の安全をはかり、失われた自分の勢力をとりもどし、自分のかわりにあるいは国家老の地位につくかも知れない熊沢了介まであわせて葬り去ることが出来れば、一石数鳥をうつような名案だと思ったのだが、それも人知れずに実行出来ればこそ、幕府当局にこの秘密がもれて、池田家のおとりつぶしというような事件が万一発生した日にはそれこそ元も子もないことになる……。

「御家老、事ここに至っては、もはや、一か八かの鬼手を打たねばなりますまい。我等の策略もあるいは外に洩れたかも知れませぬぞ」

隼人の言葉に、藤右衛門も眼を開いて大きくうなずいた。

「どうやら気がついたようではないか」
旭川の岸辺に赤々と燃える焚火の光をうけて、光政はそばの熊沢了介をふり返った。
その前に寝かされて、手当てをうけているのはたしかに先ほどの黒装束だった。最初は大きくあえぎながら、体を少しずつ動かしていたが、やがてうっすらと眼を開き、あたりの様子を見まわすと、右手に体の重みをささえて半身をおこした。
「どなたか存じませんが、かたじけない……」
左腕の槍傷に左肩の刀傷、二カ所に傷をうけながら断崖から転落し、しかも冷たい水の中に落ちこんで、こうして半里ほどおし流されて来たのだから、生きているだけでも奇跡に近いのに礼儀を正した挨拶をしようとしていることだけを見ても、この男はよくよく人なみはずれた体力と気力の持主に違いない。
「備前少将、池田新太郎光政公の御前なるぞ。厚くお礼を申しあげるがよい」
家来の言葉に、この男はうたれたように身をふるわせ、片手をついて頭を下げた。
「楽にいたせ」
光政はやさしくしかも鋭い声で、
「その方にたずねたいことがある。苦しゅうないゆえ、横になって返事をいたすがよい」
「はっ……」
「大分傷をうけているようじゃが、其方はいったい何者じゃ？　なぜかような目にあった？」
「はっ、手前は尾張の藩士、瀬川東馬と申します。道中山賊にあいまして、戦いましたが、何せ相手は多勢、不覚にも……」

「控えい！」
光政は雷のような大声でどなった。
「命を助けられた恩義を感ずるならば、真実を申すがよい。この光政の眼は節穴ではないぞ。その方の装束は何事じゃ。普通の武士が旅をするのに黒装束に黒頭巾の姿ということはあるまいが。見えすいた偽りを申すなよ」
「………」
「どうじゃ。その方は江戸大公儀からの隠密に違いあるまい。素直に白状いたすなら、命は助けてやらぬでもないが、わが領下へ何を調べに参ったのだ？」
「………」
「いえ！　いわぬか！　この新太郎光政の統治のどこに隠密の探るべき欠点があるのだ」
「お間違いでございます。けっして、決して、そのような者では……」
「ええ、おのれ、まだ偽りを申すつもりか。それでは是非に及ばぬ。一旦救った命ながら、余が直々に成敗いたす！」
満面に朱をそそいだ光政は、太刀持の持った刀に手をかけたが、男は無言で首をたれているばかりだった。
「隠密ならばもとから覚悟は出来ているであろうな。いかなる場合でも口を割らぬのが心得らしいが、大名にも大名の心得がある。領内へ入りこんだ隠密は一刀の下に斬りすてても、公儀からのおとがめはかからないのだ」
光政がさっと刀をふりあげたとき、

「お待ち……お待ち下さいまし！」
物かげから転るようにとび出して来たわかい女が、美しい顔を緊張にこわばらせ、光政の前に両手をついた。
「何者じゃ、其方は？」
血気にはやる光政も、意外な女の出現に驚いたように刀をとめた。
「わたくしはこの者の妻でございます。もしも夫をお手討遊ばすならば、わたくしをもいっしょに殺して下さいまし。お願い、お願いでございます」
「この男の妻——と申すのか？」
光政も、呆気にとられたように、二人の姿を見くらべていた。
「は、はい……夫は恥を思えばこそ、あのようにいつわりを申しあげたのでございましょうが、隠密などとはあまりのこと、わたくしから恥をしのんで申しあげます。わたくしどもは雲州松江のもの、夫は古田弥七郎、わたくしは八重と申しますが、夫は事情あって浪人となり、いま江戸表への道中の途中でございます。ところが途中、盗賊のため紙入胴巻を盗まれ、知らぬ他国で思案にくれ、ここ二日、飲まず食わずの旅が続きましたため、夫にもふわりと魔がさしたのでございましょう。武士として、何ともお恥しい次第でございますが、この黒装束は思いあまって、夜盗のまねなどいたしたため、傷もそのとき受けたものでございましょう。武士の名をはずかしめ、御領内をさわがせた罪過は重うございましょうが、せめて情の切腹を……わたくしも夫の葬いをすませたならば、すぐ自害して跡を追うつもりでございます！」
あまりにも意外な女の物語に、光政もちょっと毒気をぬかれた恰好だったが、曲りなりにも話の筋

道は通っているし、女の言葉にも誠意はあふれているし、まして女づれの隠密などというものは聞いたこともないので、すっかり信用してしまったらしい。
「うむ、それで、その方どもの身元のあかしとなるものはあるか？」
「はい、松江におりましたころ、御用人様からいただきました御書状がございますが」
熊沢了介は女の手から手紙をうけとり、一応眼を通した上で、光政にわたした。光政も大きくうなずいた。もともと豪胆でさばけた気性のことだから、それ以上は、深くこだわりもせず、
「熊沢、この二人をどういたす？」
「いま一応問いただしまして、もし何もとっておりませんでしたならば、武士の情に、このまま解き放ってやります方がよろしいかとも存じます」
光政はわが意を得たとばかりうなずいた。
「浪人とはいえ、武士たるものが何たる不心得。実に恥ずべき振舞だが、聞けば同情の余地もある。今後心を入れかえると誓うならば、妻に免じて許してくれよう。今度のことを肝に銘じ二度と心得違いをいたすでないぞ」
その言葉をひきとって、了介も静かにいった。
「とにかく、どこかの宿屋へ泊り、休息をとり、一応傷の手あてをした上で、わしのところへ訪ねてまいれ。御城下大手前で熊沢と聞けば誰でも存じている。その方たちの今後の路用、身のふり方、何なりと相談にのってやろう。それまではこの土地をたつではない。かまえて、無分別なまねなど致すでないぞ」
了介のその言葉にも、何かしら、かくれた含みがありそうだった。

二つの動き

「見も知らぬ他人の拙者を、どうしてあのような大芝居まで打って助けてくれたのだ?」
町はずれの小さな宿屋の一室で、傷の手あてをうけながら、瀬川東馬と名のったあの男は、うす気味悪そうに、何度目かの同じ質問をくりかえしていた。
「さあ、それはわたくしにもよくわかりません。あなたがわたくしの死んだ夫によく似ていらっしゃるので、急に妙な気持がおこったのでござりましょう」
物腰態度から判断すれば、この女はたしかに武家育ちらしいのだが、こうして二人きりになると、言葉の調子もいくらか崩れ、その肢態からも妙な色気が発散しているようだった。
「それにしても、まかり間違えばあなたの命も危かったろうに」
「いざとなって思いつめましたなら、女は強いものでございます。それに、あなたの素姓ぐらいは、十分心得ておりますから」
「何と!」
「あの場合は、ああでも嘘をつく以外、逃げ道もございませんでしたが、あなたはまさしく柳営の隠密……それに違いはございますまい」
「何だと!」
「あんまりきおいたたれては、お体にもさわります。まあ、よろしいではございませんか。しばらくは、わたくしといっしょにいらしって傷のお手あてをなさいまし。そのお体では、ここしばらくはど

こへも行けますまい」
女の謎のような笑いを見つめて、男は、狂ったように叫んだ。
「そなたは、そなたは何者だ!」
「さっき、お殿様の前で申しあげました通り――出雲国松江の住人で古田八重、弥七郎と申しますのはわたくしの父でございます」
なぜか、この時、女の眼にはうっすらと光るものがあったが、男はそれに気がついた様子もなかった。
「ところで、本当の目的まではわかりませんが諸国漫遊というようなふれこみで、あなた方の御大将が、間もなくこの岡山へもおいでになるそうでございますね」
女は突然話題を転じて妙なことをいい出した。
「御大将とは誰のことだ?」
「柳生一万石の御曹子、柳生の独眼竜とか麒麟児とかいわれる十兵衛光厳様でございます」

それから十日ほど後のこと、広い日あたりのいい書院で、了介から易経の講義を聞いていた光政は、何度目かのあくびを嚙み殺して、
「蕃山先生、余は少し疲れたが、一服させてくれぬか?」
「恐れ入ります。つい夢中になりまして、時間を失念いたしまして」
了介が頭を下げると光政も大声で笑った。
「何の、其方の学問に対する熱心さには、余もほとほと感服いたすばかりじゃ。誰か、茶を持て」

光政の言葉を待っていたように、女中の一人が襖を開き、茶碗を眼八分にささげて、その前まで運んで来ると、また静々とひき下った。光政は何気なく茶碗をとりあげたが、そのとき、了介は眼を光らせて、あたりを見まわしながら、光政の動きを制した。

「殿、しばらくお待ち下さいませ。そのお茶には、不審な点がございます」

「何と！」

「あのお女中はなぜか激しく動揺しておりました。手もかすかにふるえておりましたが」

了介は緊張した面持ちで立ち上ると、茶碗を部屋の端にある文鳥の篭のところへ持って行き、篭の中に手をさしいれ、一羽を鷲づかみにして、その嘴を茶碗の中へいれた。

「あっ！」

豪胆な光政もその時は顔色をかえた。

畳の上に放たれた文鳥はもう羽ばたきもせず、激しく痙攣をはじめ、たちまち冷たい骸となってしまったのだ。

「毒！　余を、この城内で、毒殺しようという者がいたのか！」

怒りにふるえながら叫びたてた光政を、了介は必死におしとどめていた。

「殿、しばらく、実は私も以前から、このような事態が発生しはしないかと恐れていたのでございますが、確証もつかめませぬままについ申しあげそびれておりました……その過ちは重々おわびいたしますが、いまここで事を荒だて、公儀のお耳に入りましては、家事取締不行届のとがによって、どのような事態になるかも知れませぬ。この際は、十分御警戒なされた上、あくまで内輪に陰謀の源を絶つ策に出られるのが賢明かと存じます」

「うむ……」

自分の命までねらう裏切者が家中にいたということは、池田光政にとっても、悲しくしかも、意外なことだったに違いない。が、筋の通ったこの言葉には、光政も、自我を捨ててうなずいた。

「よし、早急に取調べをいたせ。謀叛人を見つけ次第、容赦なく手討にいたすぞ」

「はい。草の根を分けても、数日内には、必ず陰謀の根源をつきとめます……」

だがその時、毒入りの茶をはこんで来た女中は、自分の使命の失敗を自責したためか、自分から毒をあおいで相果てていた。

八重という女の手当てをうけて、男の傷は急速に回復していった。もともと、体力にも恵まれており、手当てもよかったのだろうが、それにしても驚くべき速さだった。

最初は不安そうだった男も、なるようになれと覚悟をきめたためか、女の情にほだされたためか、今ではむしろ、この女との夫婦気どりの生活を楽しんでいるようだった。

そして、男の傷が癒えて来るに従って、八重は男にあらわな媚態を示しはじめた。男の視線もはばからず、眼の前で着がえをして見せたり、傷の手当てにことよせて、そのやわらかな肌を男の体におしつけたりすることも、日を経るにつれて度を増して来た。

表面いかにもおとなしそうなこの女のどこに、これほどの情炎がひそんでいたかと思われるばかり、木石でない人間だったら、それに心を動かして、ある一線をふみ越えたとしても、それは当然のことだったろう。

「八重……お前が何者だろうとかまわぬ。お前は魔女だ。拙者にすべてを忘れさせ、拙者の心をとろ

かしてしもうた……だが、それでいい、それでよいのだ。これも前世の縁であろう。八重！」
「たしかに、わたくしには……何か魔性が巣くっておりましょう。でも、これも……出雲の神のおひきあわせ……もうわたくしは盲でございます……」
宿屋の一室では、日を追うにしたがって、いよいよ濃艶な愛慾図絵がくりひろげられていった。わずかのうちに、男は完全に女のとりことなってしまった。
そして、完全に男の心をつかんでしまったという自信を得たらしい女は、ある時、こういうことをいい出した。
「ねえ、わたくしの身上話を聞いて下さいますか?」
「聞こう。何でも」
「わたくしは父の仇をねらっているのです。眼の前で殺された父の仇を……あなたをあの場でお助けしたのも、一目惚れもありましょうが、一つには、この仇討の助太刀をお願いしようと思ってのことでした」
「はははは、そこまで算盤をはじいていたのか? そのぐらいのことは造作もない。この体さえよくなれば、めったな相手にひけはとらぬが、ただお前が仇とねらう相手は?」
女は安心したように、男の頬に頬をすりよせ、やわらかな息吹きとともにささやいた。
「三年ほど前、父は江戸詰めでございましたが、何の罪もないのに、酔った侍からいいがかりをつけられまして……わたくしはそばにおりましたが、相手は名だたる使い手で、女の身ではどうにもなりませなんだ。それからは、親類につれられ国元へ帰りましたが、その恨みはどうしても消えません。もとより面とむかっては討てる相手ではございませんが、そこは女だけにかえって、油断をねらい、

不意を討つという手もありましょう。そう思い立って、国から出て来たのです……」
「仇の名前は? たしかにお前のいう通り、正面からでは歯のたたない相手でも、裏からの奇襲によるならば、命をとれないことはない。そして、そのような奇攻奇襲は、隠密としては、いわばお家の芸なのだ」
「信じております。ただ、仇の名前を申しあげる前に、あなたの名前をお聞かせ下さい」
「柳営、伊賀組の隠密、川島平馬……」
「それでは、わたくしも仇の名前を申しあげましょう。その名前は柳生十兵衛光厳……」

柳生十兵衛来る

「何、何だと！」
さすがに川島平馬もこの時は顔色をかえ、女の体をつきとばして身をおこした。
「信じられぬ！　十兵衛様がそのようなまねをなさるわけは……それは何かの間違いだ」
「いいえ、間違いではございませぬ。仇はちゃんと、柳生十兵衛と名のりました。あいにく夜のことで、顔は見えませんでしたが、わたくしの見たところでは小兵の男、背恰好も話に聞く彼とそっくりなのでございます」
「でも、まさか……」
「相手が当代一といわれた剣の達人だから恐ろしいというのですか? たった今、したばかりの約束を破るおつもりなのですか? 柳生家は、伊賀組甲賀組をすべる隠密の統領——その主筋に刃をむけ

るのが、道にそむくというのですか？　隠密というものは木石のように女に心を動かしてはならないはずなのにその道をふみはずしたあなたが、いまさら何を……それとも、もうわたくしはいやだとおっしゃるのですか？」

八重は、骨をなくしたような姿態で、男の体をだきしめながら、

「十兵衛とても鬼神ではありますまい。あなたが手びきさえしてくれれば、わたくしは必ず仕止めて見せましょう。それであなたも恐ろしい隠密の仕事から逃れられれば、それでいいではございませんか？　殺されても、犬猫のようにだまって死んで行かねばならないあの仕事は、武士であっても武士ではない。人間であっても人間とは呼べないのです。そういう汚らわしい仕事から足を洗って、出雲の国の山奥で、わたくしと末長く暮して下されば、二人とも幸せになれますのに……」

八重は平馬の頰に、火のような唇をよせ、甘く恐ろしい言葉を語りつづけた。

「隠密の道をふみはずしたというのか？」

平馬も悲痛きわまる調子で、

「拙者が隠密——十兵衛様の輩下と知って、色香に迷わせ、仇討の道具として、利用しようとしたのだな？　それとも知らず拙者としたことが何とおろかな？」

「いいえ、最初はたしかにそのつもりでございましたが、いまは……女は一度肌身を許した男には……平馬さま、本心でございます……あなた、どうか、わたくしを末長く……」

それぞれに乱れた二つの心は、激情の嵐にかられ、闇の中にまた狂わしく妖しい二つの花を咲かせた……

熊沢了介もあれ以来、この陰謀の根源を探ろうという計画に余念もなかった。

もちろん、常識的に考えれば、光政とそりがあわず、病気といいたてて、山荘にひっこもっている景浦藤右衛門が一番疑わしい。

といって、いやしくも一藩の国家老を、不確かな証拠で謀叛の罪におとすわけには行かないのだ。彼ほどの智者のことだから、あの黒装束、川島平馬を公儀からの隠密だと見やぶっていたことはいうまでもない。しかし、光政の気持に従い、八重の言葉にだまされたようなふりをして、あのまま放してやったのは、彼なりの作戦もあったのだ。

ここで一人を斬ったとしても、幕府からはまたいずれ、第二第三の隠密を送りこんで来るだろう。そういう眼に見えぬ敵にそなえていたずらに心身を消耗させるより、ここで一人に命の恩を売って生還させる方が、幕府の重職へとどく報告はお手やわらかなものになるだろう——というのが、彼の八方やぶれの作戦だった。

だから、二人の泊っている宿も、その毎日の行動も、ほとんどあますところもなく、彼の耳には入っていた。もし、彼にだまって出立するようなことがあれば、その時は宿から彼のところへ急報があることになっていた。その時こそ、相手の膝をだいて、人間と人間としての話をつづけ、何としても池田家の不利をまねくまいというのが、彼の決意だった。それにしても、あの傷は誰におわされたのか。あの男は、いったいどこへしのびこんだのか——という疑いは、了介の心からはなれなかった。

ひそかに旭川の上流を調べて見たのだが、あの夜、賊にしのびこまれたというような報告はどこからも来なかった。それでは考えられる場所はただ一つ、景浦藤右衛門の山荘しかない。

陰謀の根源地はここだと睨んだ了介は、腹心の井上典膳という侍に命じて、極秘のうちにその様子

を探らせていた。だから、典膳が逆上したように、彼のところへやって来て、
「今夜、あの山荘では、内輪で御家老お床ばらいの祝宴があると聞き及びました。病人の本復祝いなら、日中に行われるのが当然でございましょうに、夜宴とはおかしゅうございますな。表むき、公の御用を欠いてはと申しておりますが」
といった時には、これあるかなとうなずいていた。客の名前を調べてもわからなかったので、彼は自身でその顔ぶれを確認しようと考えて、夜、山荘の上り口までしのんで行ったのだが、その時、彼の身をかこんで来たものは、白刃をならべた十人あまりの黒衣の刺客たちだった。
「しまった！　はかられたか！」
と歯ぎしりしたが時はおそい。
「ふふふ、蒼山大先生ともあろう者が、このように見えすいた罠にかかったのか？」
嘲笑った声の主はたしかに長沢隼人と思ったが、了介はもうどうすることも出来なかった。一応文武両道の達人ということになってはいるが、十人もの敵を相手にして、勝利を得られるほどのすぐれた腕ではない。
最初から受太刀一方で――死も眼前に迫っていた。
――もう、これまでか。
と了介が覚悟をきめたとき、まっ先に彼に迫っていた右側の侍が、あっと悲鳴をあげて倒れた。
了介も眼を疑った。いつの間にここにあらわれたのか、隻眼、小兵、旅支度の白面の侍が、彼のそばに刀をならべて立っている。
「理由は知らぬ。事情は存ぜぬ。ただ一人に十人、しかも黒装束での要撃とは卑怯千万。義によって

拙者が助太刀いたす！」
大声で叫んだと見る間もなく、刀は飛竜のように動いて次の二人を斬り倒していた。
「ひけ！　ひけッ！」
どこからともなく起った叫び声に、たちまち敵はあわてふためいて逃げ出していた。
「危急のところをお助け下さいまして、何ともありがとう存じます。ぜひ御尊名を」
といいかけて、了介は思わず刀を返して一間ほど飛びじさった。
「失礼ながら、柳生十兵衛光厳様と拝察つかまつります。御無礼の段は平に平に……」
「ははは、池田の御藩中には、目のきいた御人がおられる。こうなってはかくしてもむだであろう。いかにも柳生十兵衛じゃが、其方は？」
「はっ、申しおくれましたが、拙者は池田家に禄を食む蒼山熊沢了介と申します」
「其方が熊沢蒼山か？　して、今の仔細は？」
「はっ」
了介も冷汗を流していた。もちろん、命を救われたことは感謝にたえなかったが、その助太刀が隠密陣を一手に握る柳生十兵衛だとあっては、一難去ってまた一難……この内紛が明るみに出ては、どのような事態が発生するかも知れないのだ。
「はっ……不肖、不徳のいたすあまり、家中に恨みを買いましての決闘沙汰……」
「決闘？　武士と武士との果し合いに、一方が黒頭巾に顔を包んでやって来るのが当家の家風か？」
もちろん理屈には違いないが、この言葉は鋭く了介の肺腑をえぐった。次の言葉に当惑して、彼が何とも答えられないでいるうちに、十兵衛はすべてを察したように、月をあおいで、男らしい笑いを

もらすと、
「もし、其方とここで別れて、その後で彼等がいま一度出てまいっては、それこそ、仏作って、魂入れずということになるな。其方の家まで送ってつかわそう。わしの方でも、いろいろ聞きたいこともあるのだ」
と、声に力をこめていいきった。

破邪飛竜の剣

「平馬さま、いよいよ仇が、十兵衛が御城下にあらわれました」
ふだんはやさしい八重の顔も、いまは能楽にあらわれる鬼女のようにすさまじかった。
平馬はその鋭い視線に射すくめられたように、たちまち顔を伏せてしまった。
「たしかにいまは脇本陣、村田屋に滞在中のはず――さあ、平馬様、あなたはお仕事の報告でもするようなふりをして、十兵衛をたずねて下さいまし。そしてかねての手はず通り、わたくしを遊び女として呼んで……」
女の声はふるえていたが、平馬の方は力なく首をたれたまま、
「だめだ。拙者には……とても出来ぬ。十兵衛様に刃をむけるということは、到底出来ることではない」
「いまさら何を……あなた、これほどわたくしがお願いしておりますのに」
八重は平馬にとりすがって、激しくしゃくりあげた。

「八重！」
「どうしても出来ぬとおっしゃるならば、せめてお手紙なりと下さいまし。それならば、後で偽書だとおっしゃっても通りましょう。わたくしは一人でまいります。せめて、父の恨みを一太刀なりと……これでおわかれいたします」
「八重、それは……」
「もし、そえ手紙も下されないとおっしゃるならば、わたくし一人でまいります」
ここまでかたい女の意志を見せつけられて、平馬も遂に最後の覚悟をきめたようだった。
「八重、お前一人をやるわけにはまいらぬ。やむを得まい。拙者はすでに隠密の掟を忘れたのだ。今度は武士の道さえ忘れよう。これも悲しい前世の業かも知れぬ。拙者もこれから十兵衛様のところへ参って」
と平馬が悲痛な声でつぶやいたとき、
「参るに及ばぬ。十兵衛光厳はここにおる」
部屋の襖がさっと開き、そこには柳生十兵衛が仁王のように立ちはだかった。
「十兵衛様！」
平馬はかすれたような声でつぶやき、そのまま化石となったように動かなかった。
「平馬、久しぶりだったな、其方と思われる男がここにいることは熊沢殿から耳にして、傷の見舞にやって来たのだが、まさか、このような相談をしているとは思わなかったぞ」
十兵衛の声は低くおちついていたが、二人の耳には百雷の轟くようにひびき渡った。
「仇、父の仇！」

八重は一瞬に逆上したのか、いきなり懐剣をぬいて十兵衛に飛びかかった。
「血迷うな！」
もちろん、当代屈指の剣豪といわれる柳生十兵衛に対して、この無暴きわまる攻撃が功を奏するはずはない。手刀で一閃しただけで、懐剣は八重の手をはなれて落ちた。
「殺せ！　殺すがよい！　父と同様、なぶり殺しに！」
「馬鹿者！　そなたは父の仇といったが、その父の名は何という！」
「出雲松平の藩士、古田弥七郎」
「彼のことか？」
十兵衛はこの時はじめて口もとにかすかな笑いをうかべた。
「その名前ならばおぼえがある。まあ、おとなしく、拙者の話を聞くがよい。聞いて納得が行かないなら、その時また、あらためて斬りかかるがよかろう」
こうなって来ると、人間の大きさの違いはどうしようもないものだ。八重も、崩折れたように、畳の上に坐り、おとなしく十兵衛の言葉を待った。
「あれは三年ほど前のことであったか、江戸表にはしきりにわが名をかたる偽者が横行したことがある。事もあろうに、わしの名前を借りるとは言語道断の曲者と思って、部下に調査を命じたのだが、結局顔に赤あざのある長田隼人という男だとわかったのだ。古田弥七郎を斬ったのも、恐らく彼に違いあるまいが、雲州家においては柳生家との抗争を恐れ、表沙汰にはしなかったということも、その時聞いたおぼえがある。早速、捕えようと思ったのだが、その時にはすでに、彼は江戸表から姿を消し、行方をくらましておったのだ。だが、最近になってようやく、彼が長沢隼人と名前をかえて、当

池田藩に仕官したことがわかったのだ。わしがこうして岡山へ立ちよった目的の一つは、彼の旧罪を糾明し、場合によっては一刀両断に成敗しようということにあったのだが、その寸前に、こうしてそなたから彼とあやまられ斬りつけられるとは思わなんだぞ」
「…………」
「それに平馬、そなたも隠密としては衆にすぐれた鉄心石腸の持主と思っていたが……」
この一言が、まるで止めの一撃のように、平馬の心をえぐったか、
「十兵衛様、お許し下さいませ。隠密として、武士として、いや人間としての道さえ、ふみはずしました私——死んでおわびを申しまする」
と叫びながら、脇差をひきぬき、横腹へつきたてようとした。しかし、一瞬早く十兵衛の手刀はその刃をたたきおとしていた。
「待て！　命令だ！　この事件の落着まではみだりに自害は許さぬ」
「御家老、殿が直々この山へ……お駕籠をつらねて」
その翌朝、腹心の者だけを山荘に集めて、これからの善後策を相談していた景浦藤右衛門のところへ、かけつけて来た物見の者は血相変えて叫んだ。
「うむ、遂に事やぶれたか。やんぬるかな」
たとえ一時は道をあやまり、大逆の罪さえ企てたとはいえ、やはり大藩の国家老ともなればこのくらいの見通しはついたのだろう。
「わしはこのまま自害しよう。其方どもは金を分けて」

「御家老、何をおっしゃいます。いまさら、あなたがそのような弱気を起されては、我等一同、すべて破滅ではございませぬか」
長沢隼人は、憤然としたように膝を進め、
「未だに事が破れたときめるのは早計でございましょう。あるいは御見舞かも知れませぬ。あるいはまた、何かの罪をただされようと、御家老の舌先三寸でいいくるめるのは造作もないはず、幸いに確たる証拠もございませぬ。また、もしそれでもかなわぬ時は、毒をくらわば皿まで――池田三十五万石と心中したということになれば、死花も咲こうというものではございませんか」
「うむ」
長沢隼人の言葉におされて、藤右衛門もようやく、動揺しかけた心をたてなおしたらしい。
「皆の者も、それぞれ隠れて、様子をうかがっておれ、いざという場合には直ちに斬って出られるようにするのだぞ」
といい残すと、つとめて平静をよそおって玄関の式台から外に出た。
池田家の定紋を打った駕篭を先頭に、四つの駕篭が門を入って来た。
「殿には、突然のお越し……」
といいながら、藤右衛門が駕篭に近づいたとき、扉を開けて中からおどり出たのは、光政ならぬ柳生十兵衛光厳だった。
「景浦藤右衛門、其方の罪状はことごとく明らかなるぞ。天にかわり、光政公のお許しをうけ、この十兵衛光厳が成敗にまいった。覚悟いたせ！」
「何をおっしゃる？　これはまた身におぼえなき濡衣を、いったい何の証拠があって」

「いうな。証拠はここにある！」
第二の駕篭の扉が開いた、姿をあらわしたのは、黒装束の川島平馬だった。
「これが逃れぬ生き証人――彼を旭川へ斬りおとしたおぼえはあろうな」
十兵衛の声はするどく、あたりの静寂を破った。
「うむ、うぬ、もはやこれまでか！」
景浦藤右衛門の声に、物かげからは一味の侍が、ばらばらとおどり出て来た。
三番目の駕篭からは、珍しくもたすきがけの熊沢了介が扉をはねのけてとび出して来た。
「お家乗っ取りを策する悪家老、覚悟！」
「蕃山、せめて汝を冥土の道づれに！」
破れかぶれになって襲って来る邪剣の嵐の中を、十兵衛の刃は、鋭くすばやく、雲を呼んで昇天する飛竜のようにおどった。
雲竜がくれ、霧がくれ――味方の一人一人をかばいながら、十兵衛の愛刀三池典太は、次から次へ、着実に相手をのけぞらせていった。
「長沢隼人、いざ参れ！　拙者の名をかたった不所存者、よもやこの娘を忘れはしまい」
狂ったようにとび出して来た長沢隼人の姿を見かけて十兵衛は叫んだ。それと同時に、最後の駕篭からは、鉢巻たすきがけの八重が頬を紅潮させて飛び出して来た。
「古田弥七郎の息女（むすめ）八重――父の仇、覚悟！」
「小娘だてらに生意気な！」
赤鬼のような形相になった隼人は、死出の道づれとばかりに、八重めがけて突進した。

しかし、八重の手の懐剣は、いやそれよりも一瞬早く十兵衛の刀が、隼人の脾腹（ひばら）に食い入った。
「仇！」
止めを刺して、へなへなとその場に崩れるように坐りこんだ八重の体を、平馬があわてて助けおこしたとき、十兵衛と了介は、景浦藤右衛門を最後の土壇場に追いつめていた。

十兵衛を正客として、岡山城で盛大な宴が開かれたその翌日、早くも十兵衛はふたたび山陽道を西へ旅だつこととなった。
「柳生十兵衛様、このたびのことは何とお礼の申しあげようもございませぬ」
光政の名代として、岡山の町はずれまで十兵衛を送って来た了介は、無限の感慨をこめて頭をたれた。
「いや、拙者は天下を正しく保つために、天命を遂行したにすぎぬ。それこそ柳生大乗剣の教えだが、天に至誠を通じさせたのは、了介、其方の力なのだ」
「もったいないお言葉にございます」
「其方がこの藩中にいるかぎり、池田三十五万石もゆるぎはしまい。光政公はよい御家来を持たれたものだ」
家の安全を保証するこの言葉に、了介はただ感涙にむせぶだけだった。
「平馬、其方にあずけた命をうけとろうか」
「はい……」
いさぎよく、平馬はその場に坐って首をさしのべた。三池典太は鋭く宙に一閃し、その首すじをう

ったが、それはみねうち――刀を鞘におさめると、十兵衛は豪放に笑い出した。
「川島平馬は十兵衛の手討によって死んだのだ。其方はもう隠密でもない。武士でもない。いずこでなりと、この女といっしょにそいとげるがよかろう。では、さらばじゃ」
了介、平馬、そして八重、三人はそれぞれの感慨をこめて、静かに西へ下って行く十兵衛の後姿をいつまでも見送っていた。

第五話　仇討女夫旅

片眼の狂人

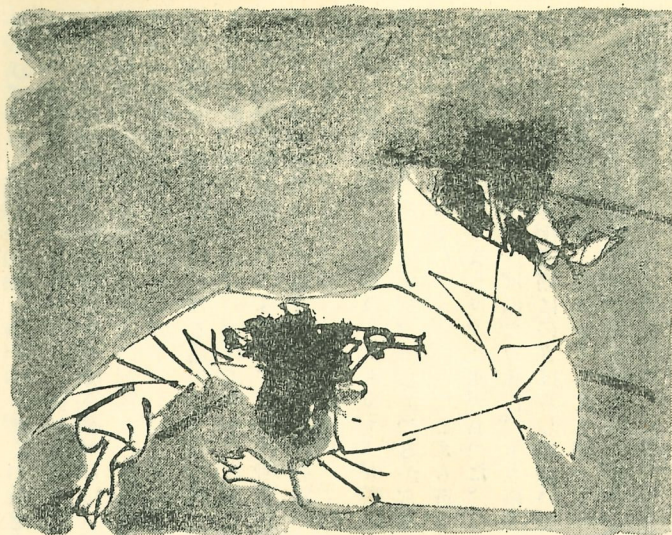
　ひどい暑さだ。この二十日、雨といっては一滴も降らなかったのに、おまけに激しい風なので、道行く人々は一人のこらず、馬糞まじりの砂ほこりを全身に浴びて、顔から首すじ、手足にかけて、まるで鶯餅のよう、泣いても泣き切れない形相をしている。

「おう、ありゃ何でえ」

「この陽気だ。侍だって大方頭へ来やがったんだろう」

　自分の体一つだけでも持てあぐむような陽気なのに、こんなことをささやきあいながら、人々は

大きな環を作って、どうと四人の侍たちをとりまいた。

　大兵肥満の浪人者三人に、小兵の武者修行と見える侍一人。右の眼が、ぽかりとくぼんで赤茶けた傷痕が瞼のあたりをはっている。残された片眼がぎょろりと気違いじみたぶきみな燐光さえ放っている。

　三人の侍は抜力、そしてこの片眼の侍は鉄扇を片手にかまえたままだった。

「はははは、其方どものような木っ葉侍を相手にするのに刀はいらぬ。わしを誰だと思っておる。鎮西八郎為朝に、朝比奈三郎義秀はわが門下の竜虎、蜀の玄徳はわが相弟子、関羽、孔明、張飛の三人はわが門弟中の三羽烏じゃ」

　委細は誰にも一と目で分った。この三人の侍は、街道筋に巣くって弱そうな旅人と見ると何や彼やと難題をふっかけて因縁をつけ、飲代をかせごうとする浪人たち。腰に大小をたばさんでいるだけ、雲助ごまの蝿よりもはるかに始末の悪い存

在なのだ。きっとこの小男の侍をつかまえていたぶろうとしたところをかえってこうして逆手をとられて、処置に困っているのだろう。勢いこんで、そろって抜いた大刀のそのやり場にも困った様子。
「のう、おのおの、見ればこやつは気違いらしい。気違い相手に刀を抜いたとあってはこちらも恥さらしだが、まあこのような狂人の無礼をとがめだてしても仕方があるまい。ここはこちらも男を見せて、一つ料簡してつかわそうか」
「いかにも、萩原氏のいわれる通りじゃ。これ、気違いめ、本来ならば一刀の下に斬って捨てるべきところだが、そうしては刀の汚れになる。許してやるから、とっととこの場を立ち去るがよい」
　こうして虚勢を張っているのも、気違い相手の喧嘩は、百に一つの利もないと見て、切り上げ時をねらっている逃げ口上に過ぎないが、これを聞いて片眼の侍は、口もとににたりとかすかな笑いを浮かべた。
「許してやるとは、こっちのせりふじゃ。本来ならば一撃の下に撃ち殺して捨てるべきところだが、そうしては鉄扇の汚れになる。許してやるからそのかわり、三べん廻ってワンと吠えるがよい」
　気違いに恐いものなし――というたとえもあるが、よくもぬけぬけここまで言いきったもの。三人の侍たちの顔にはたちまちカッと血が上った。
「おのれ、いわしておけば何たる雑言。もう堪忍袋の緒は切れた」
「このような狂人を街道筋にのさばらしておいては庶民のためにもならぬ。それ、方々」
　三人は顔を見あわせ、切先をそろえて切ってかかったが、この狂人はどれほど武芸にすぐれているのか、パッパッと鉄扇でその刀をはらいのけ一人の頬桁をたたきのめすと、後の二人の刀を瞬時にたたき落して、

「刀がなくては勝負になるまい。待ってやるから拾うがよい」
　二人は蛇に見こまれた蛙のように、地上に呻いている仲間の一人と、小男の顔を見くらべながら、身動きも出来ずにいる。
「いったいどうしたというのだな。わしのような気違いを街道筋にのさばらせておいては庶民のためにはなるまい。堪忍袋の緒はどうした?」
　腕の相違というものは、全く仕方がないものだ。それに加えて、相手の正体が見当もつかないだけに、この二人がとたんに臆病風に吹きまくられたのもむりはない。
「いや、これは知らぬこととは申しながら、とんだ御無礼を致しました。何卒あしからずお許しを」
「我等も武芸の道にかけては、一応の自信もございましたが、いやもう天下は広大無辺、あなた様のような達人名人にお目にかかれたのは望外の幸いとでも申しましょうか。もしお差支えなくば、御尊名なりともお聞かせ下さいませぬか」
　と、まるで掌を返すような挨拶ぶりだった。片眼の小男はまた口もとにかすかな笑いを浮かべ、
「そうか。わが名が知りたいと申すのか。いや、さもあろう。武道修行のためにはその心掛けが何より肝要じゃ、耳の穴をよくかっぽじって聞くがよい。鞍馬貴船の山中で天狗どもを相手に兵法の極意をきわめ、一の谷ひよどり越えの戦いや、壇の浦八艘飛びの奮戦に、その勇名を天下にとどろかせた源九郎義経とはわしのことだ」
　時は徳川時代の初め、源平時代とは数百年もへだたっていることだから、聞いている方がすっかり呆気にとられて、
「失礼ながら、義経公には、衣川の一戦でお命を落された由に承わっておりますが」

「はははは、そのような話を信ずる者は眼あって見えぬ明き盲も同然、衣川より蝦夷地に逃れ、それより異国にわたり、蒙古に百万の大軍をもよおし、はるか西方異国人を打ち平げ、兄頼朝への恨みを晴らさんと海を渡ってこの国へもどって参ったは、ありゃいつごろであったろうか」
　聞けば聞くほど話の調子は外れ、雲をつかむようになって来る。二人は、さわらぬ神にたたりなしという恰好で逃げ腰になった。
「なるほど、うかがえばうかがうほど興味のあるお話で、なおゆるりとお聞きいたしとうございますが、いささか先を急ぎますゆえ」
「こうして倒れております友人の手あても致さねばなりませぬゆえ」
「そうか。これからいよいよ話が佳境に入ろうとするのにそれは残念な……まあよい、この暑さでは傷口もなおりにくいことだから、仲間の手当てを急ぐ方がよかろうぞ」
　案外たやすく相手が折れてくれたので、むこうの二人もほっとしたように、
「それは何ともかたじけないことで、いずれあらためて御挨拶に」
と、いいながら、倒れている男を両方からかかえ起した。
「あ、待て。忘れ物があるぞ」
「何でございましょう?」
「先刻よりの約束じゃ。三べん廻ってワンと吠えろ」

柳生の独眼竜

　こうして悪浪人どもがほうほうの態で逃げ出しても、観衆の中から歓声も起らなかったのは、この主人公の不具と、それを超越した腕の冴えと、そしてその狂態が、人々の心に何かいたましい印象を深く刻みこんだせいであろう。
　だが、小兵の侍はべつにそういうことにこだわっている様子もなかった。深編笠をとりあげるとそのまま四五丁、物もいわずに歩いて行ったが、その時並木のかげからあらわれて、その前に平伏した二人の男女がある。
　年のころ、男は二十二三、女は十八九と見えるが、旅にやつれた浪人夫婦と思われる姿だった。まるで血を吐くような声で、
「恐れながら、あなた様には、将軍家御指南役柳生但馬守宗矩様御長男、十兵衛光厳様ではございませんか。お願いの者で御座います。先をお急ぎのこととは存じますが、何とぞこのお願いをお聞きとどけ下さいませ」
　柳生十兵衛光厳——といえば、武道に志すほどの者でその名を知らぬものはないはずである。幼少にして柳生流始まって以来の麒麟児といわれ、誤ってその一眼を失ってからは柳生の独眼竜と呼ばれて、その武名四海に鳴った英傑なのだ。ただ惜しむらくは、脳の病におかされて生来奇矯の振舞が多く、江戸木挽町の屋敷にもおちつかず、数年前から諸国放浪の旅に出ているという噂だが、さては漂然この九州路にあらわれて、今その腕の片鱗を示したのか……
「よく、わが名前を存じておるのう。いかにもわしは柳生十兵衛光厳じゃ」
　そこまでは常人と何のかわりもなかったが、それからまたしても調子がはずれた。
「ところで其方どもは誰であったか。静御前と佐藤忠信か。初音の鼓はいかがいたした」

「御前さま！」
二人はいたましそうに眼と眼を見かわし、
「親の仇を 討とうとして、 日夜苦心をいたしておるものでございます。 一手、 一手なりとも御教導を」
「なに、親の仇を討とうというのか。はははは、その志はあっぱれながら、その恰好ではまだ剣の道にも修行は未熟と見える。どのような相手か知らぬが、返り討は必定じゃ」
「それゆえに、一手たりとも御教示を。先生のお名前はかねがねうかがって、ぜひ御拝顔の機を得たいものと待ち望んでおりました。もとよりいたって未熟者のことゆえ、一度に剣の秘訣を極めようなどという大それたことは望みも致しませぬが、限りもない修行の道の高嶺に一歩たりとも近づけば――と、それだけの気持からお願い申し上げるのでございます」
いかにも真摯な態度だった。熱誠こめてかきくどくその姿を見ては、何人でも心を動かされそうなものだったが、十兵衛はからからと高笑いして、
「馬鹿者！　剣の修行は刀を以て斬りあうことにあるのではない。木剣竹刀を以てうちあうことなどは、同じ修練のうちでも末の末なのだ。要は心を磨きおのれに勝つにある。その志がなければ、十年二十年の修行も空しく、それを極めれば一瞬にして奥義にも悟入出来よう。心さえ磨けば剣の師匠はいらぬ。森羅万象、天上天下のあらゆるものが道を教えてくれるものだ」
ある意味では深い哲理を秘めた達人達意の言葉ともとれ、またある意味では気違いらしい調子外れの大言壮語ともとれる言葉だった。
「先生！」

「いうな、いわなくても其方のいわんとする所ぐらいは分っている。わしの姿を一目見た時、これは斬れると思ったか」
「滅相もないお言葉でございます」
「それがいけない。まだ及ばない証拠なのだ。十兵衛とて人、そなたも人、そなたの仇も人であろうぞ」
隻眼から突き刺すように鋭い視線を二人に投げたと思うと十兵衛は悠々踵を返して歩み去った。
その後ろ姿をじっと見送っていた侍は、愕然としたように飛び上り、
「八重、先生のあとを追うのだ。どうしても一手の御指南をあおがねば、われらの志も達せられぬ」

黒衣の刺客

十兵衛はその夜、八代の温泉宿の、鳴海屋に宿をとった。
彼を追う二人の男女も、見えがくれにそのあとをつけ、同じ宿屋の客となったのだが、十兵衛はそれに気がついたかどうか。
夕食をすましても風はそよともない。さすがの十兵衛もこの暑さにはたまりかねたか、
「涼んで参る。遠くへは参らぬが」
と、女中に言葉を残して着流しのまま、鉄扇一本をたずさえて外へ出た。
河原をそぞろ歩きして四五丁、突然十兵衛は立ち止って爛々たる隻眼を闇に輝かせた。
「何奴じゃ！」

さすがに鋭い感覚なのだ。この大喝に、もうこれまでと思ったのか、四方の木かげ林の中から、ばらばらと姿をあらわしたのは、その数十名あまり、全身黒装束の怪人たち。
「ええ、その方どもは何者じゃ。この夜陰、このような黒装束で横行するとは物取夜盗の類か、それとも……」
答えはない。ただ凄烈な殺気剣気が四方から、じりじりとその身に迫って来る。
十兵衛も相手の動きに呼応しながら、じりじりと鉄扇をななめにかまえた。これこそ柳生独眼流片目はずしの正眼――一眼を失ったこの天才が多年にわたる苦心の結果編み出した独自のわざ、これだけの達人の手にかかれば、一尺二寸の鉄扇も三池典太の愛刀も、ほとんど選ぶところがない。
「十兵衛、覚悟！」
さっと斬りこんできた初太刀をかわし、肩骨も砕けんばかりの一撃をあびせて、
「うむ、さては、余を柳生十兵衛光厳と知ってのこの要撃か。これはいよいよ面白い。命知らずにもほどがあろうぞ」
ふたたび大声の一喝をあびせかけたが、相手はまるでつんぼのように何の反応も見せないのだ。
「すわ！」
十兵衛もようやく事態の急を覚った。彼がこうして九州にまでその足をのばして来たのは、実は三代将軍家光と智恵伊豆といわれる松平伊豆守との秘命をうけて、西国諸藩の内情を探索するための隠密行――ああして狂態を装っているのも親兄弟にさえその秘密を明すまいとする苦肉の策にほかならないが、上手の手から水がもれるという諺の通り、いつかその真意がどこかの大名の知るところとなって、彼を陰微の間に除こうとする企てが生れたとしてもふしぎはないのだった。

鉄扇を握りしめる右手にもぐっと力が入った。十数人の刃を一度に身にうけてはいかに達人名人でも容易にうけ切れるものではない。すばやくその身に動きを見せて、一時に一人ずつ相手にする――それが武術の極意なのだ。
「参る！」
ふたたびおどりかかって来た大刀をすばやく鉄扇で払いのけ、ぐっと手もとへおどりこんで、その刀をうばいとったのは、これこそ柳生流極意の破術。
「さあ、行くぞ」
十兵衛が柴がくれの体制に移ったとき、敵の一角にはどっと乱れが起った。
「おのれ、曲者！　肥後国熊本元家臣、小山甚十郎、同名八重、義によって柳生十兵衛先生に助太刀いたす！」
と、いう声とともに、二人の男女が黒装束の一群の中へ斬りこんで来たのだ。
「ひけ！　ひけッ！」
新手のこうした助太刀に、十兵衛暗殺の潮時は逃したと思ったのだろう。一人の叫びとともに黒装束の一隊はばらばらと闇へ姿を没して行く。
「追うな。深追いするではないぞ」
十兵衛が声をかけると、二人はすぐその前へ飛んで来て、
「先生、おけがはございませんか」
と、手をつかえた。
「ない。だがその方どもは？」

「はい。どうあっても先生に一手お教えをいただかねば——と思いつめ、あそこからあとを慕って参りました。先生と同じ鳴海屋に宿をとり、御散策の御様子を拝見してここまで」
「うむ」
その熱情には十兵衛も漸く動かされたようだった。再度の襲撃も考えられぬ、残された怪我人もないのを見とどけて、
「このような所で立話もなるまい、話は宿でゆるりと聞こう」
と、先に立った。

仇討女夫旅

「小山甚十郎とか申したのう。親の仇を討とうとか申したがその仔細は？」
二人を自分の部屋へ伴って帰ると、十兵衛は脇息にもたれながらたずねた。
「は、御耳を汚して恐れ入りますが、拙者の父甚右衛門は当熊本城、細川越中守御家中において、三百石を頂き馬廻役をつとめておりました者でございます。それが、南円坊宗竜なる山伏にいささかのいさかいから討たれまして、手前たちがその仇討に諸国をめぐって参ったのでございます」
「話の様子、そなた達の態度物腰から察するに夫婦と思うが、まだ眉も落さず、鉄漿（かね）もそめぬのは」
「はい、手前と八重は従兄妹同士、手前の父は八重にとりましては叔父でございます。父が討たれたのは祝言の寸前、仇討までは実家にとどまるようにさとしてもどうしても聞き入れませぬ。やむを得ず、笑い者となるのは覚悟の前で、こうして同道、諸国をめぐっておったのでございますが」

「だが、細川殿の御家中とあらば熊本が本城、この八代（やつしろ）とは目と鼻の間なのに？」
「はい、南円坊を求めて京大阪から江戸まで旅を続けておりますうちに、敵は九州へもどったという噂を耳にいたし、ふたたびこの地へもどりまして、ここから二十里ほど山中、正覚院と申す山伏道場に潜伏いたしておりますことをようやくつきとめたのでございます。仇の所在が分りさえすれば、たとえ返り討になるまでも、その地へのりこみ、相手に一太刀たりともむくいたいと覚悟は定めたのでございますが、何と申しましても、山伏たちは天下の荒くれ者ばかり、素直に南円坊を渡してくれるかどうかは予断のかぎりではございませぬ。手前どもが中途に倒れることは、あるいはやむを得ぬとしても、何とか本懐をとぐる道はあるまいかと、思案にくれておりましたところへうかがったのが先生のお名前、死するとも一手の御教示をたまわっておけば、目的達成のためには万人力にも勝ろうとその機会を待っておりましたが」
焔のように燃える隻眼で、甚十郎たちを見つめながら十兵衛は身動きもしなかったが、やおら口を開いて、
「泥棒をつかまえて縄をなう——という諺（ことわざ）もあるが、その方たちの今のやり方はそれに近いな」
「え、何とおおせられます？」
「およそ真剣白刃の勝負は、間髪を容れぬ一瞬に決するものだ。ただその一瞬というのはただの瞬間ではない。過去数年、十数年、いや数十年の鍛錬修業の蓄積が凝集し爆発したものなのだ。その呼吸、その攻防、それは一朝一夕に体得出来るものではなく、血を吐くような多年の辛苦の後に、初めて身に備わるものなのだ。その裏づけも何もなく、ただその場に間にあわせの剣法を教わろうとするのは、香具師の商法か知らぬが武士の道ではない」

「先生！」
「それに今一言いい聞かせておきたい事がある。剣の道は非情なものじゃ。敢て無情のものとはいわぬが、この道をきわめんとするものは、義理人情、愛怨好悪、その他百八といわれる人間界の煩悩をあわせて足下にふみにじる覚悟がいるものだ。その方どもの事情はいろいろあるでもあろう。弁解の言葉もあろう。ただ、父の仇、それも自らの力のなかなか及び難い相手を討とうとするのに、女を伴っての夫婦旅、その片手間に剣技を練り、仇を討とうとする――はははは、あまりと申せばあまりに気楽な。そのような態度で究められる剣の道、そのような気軽さで討てる仇なら、何もこの十兵衛に教えをこうほどの要もあるまい」
　一言一言、寸鉄肺腑をえぐりぬくように仮借もない十兵衛の言葉に、二人はうたれたように身をふるわせ額にべっとり脂汗をにじませていた。
「先生、たしかにありがたいお言葉――われら二人も身にしみて感じいりました。既往をかえりみて、冷汗三斗の思いでございますが、さりとて数年前まで年月をさかのぼるわけにも参りませぬ。この上は、いかが致せばよろしいのでござりましょう」
　甚十郎の問いに十兵衛は一言鋭く、
「死ね！」
「え？」
「父の仇を前にして、勝つか負けるか、本望を達せられるか返り討になるか、後ろ髪を引かれる思いで、細かく算用いたすのは商人根性と申すもの。ただ全身に燃え上る恨み、憤りを一丸として刃とともに相手にたたきつけるのが子の一念というものであろう。成否は問うな。勝負は問うな。ただ自ら

死する覚悟があれば、武士たる者はそれですむ」
　十兵衛は、かっと眼をむいて二人をにらみつけ、
「わしの言葉が其方どもに理解出来ないか、それはこちらの知ったことではない。部屋へ帰って休むがよい。わしも眠とうなった……」

切支丹一族

　十兵衛を襲った謎の刺客の一団は、事破れたと見るなり裏山へかけこんで険阻な山道をたどりはじめた。
　山がかっと開けて、かなりの広さの盆地となっている所に十五六軒の山家がならんでいる。その一軒の戸をたたいて、一人が、
「父上、ただいまもどりました」
と、声をかけた。
「おう、首尾はいかがであった」
　恐らくこの帰りを一刻千金の思いで待ちわびていたのだろう。白髪白髯の老人が自ら立って来て戸を開いた。
「残念ながら十兵衛は討ちもらしてございます。かねての手はずに従って、鳴海屋を火ぜめにしようかとも考えましたが、一度しくじっては向うに備えもあろうし、深追いはかえって事を破るもとと思いまして、お叱りを覚悟で立ちもどって参りました」

「そうか……やむを得まい。すべては天上を支配したもう神の思召しじゃ。あーめん」
この老人の言葉から察するに、さては御禁制の切支丹、家康以来三代の弾圧に安住の地をも失った切支丹の信徒たちがこうして山中に逃れて、自分らの信仰を守りつづけようとしているのだと思われる。

黒装束を解き去った人々は、この老人を前に、そろって家の中にかくしてある祭壇の前にぬかずいた。しばらく低声で祈りをささげていた老人は立ち上ると一同をふり返って、
「みなの者、遠路御苦労であった。家にもどってまたの機会を待つがよい」
と、いい渡した。その言葉に一同静かに立ち去って、後に残されたのは白髪の老人と最初に声をかけた青年ばかり。
「その方どもの事を腑甲斐なしとはいわぬ。ただこのわしが、あと二十歳も若ければ、たかが柳生家の息子の一人や二人、見事に首かききってやったものを」
と、老人が歎息したのも無理のないことだったろう。彼こそ小西行長の輩下でも一二の剛勇をうたわれた宗野弾正のなれのはて——関ケ原の一戦では縦横に戦場を疾駆して抜群の功を立てたが、時利あらず、味方の総崩れと見るなり、主君行長と前後して戦場を脱出し、こうして九州の奥地へ逃れて、郷士となって余生を送っていたのだった。

この青年はその子供、頼母と名のるが、その頑強な面魂は見るからに父の野武士当時の面影を偲ばせる。
「父上、申しわけございませぬ」
「いや、其方の罪ではない。考えて見ればその方はまだ若く、そういう戦の掛引、機略に乏しいため

だ。今夜は悪運未だつきず、十兵衛も命を全うしたろうが、なに、彼が九州にいる間には」
と、いいきった弾正の眼には、まるで鬼のような執念が燃えている。頼母の方が、かえっておじ気づいたように、
「柳生十兵衛一人を討ちとることがそれほど大事なのでございますか」
「いかにも大事じゃ。わが宗門の興廃にもかかわるほどの一大事じゃ」
「と、申しますのは?」
「いうまでもなく十兵衛は柳生家一万石の長男——剣をとっては天下に向う者なしといわれたほどの人物じゃ。それが偽気違いとなって諸国を遊歴するというのはほかでもない。元来猜疑心強き三代将軍——西国諸藩の動静を探らせようとして、隠密の役目をおわせたのであろう。その十兵衛が中途に倒れれば、疑惑の眼が、この九州の諸大名にかかるは道理、あるいは大兵を催して、関ケ原以来の宿敵たる島津家征伐という事態になるやも知ぬ。そこまで行けば万々歳、いや一時にそこまで運べなくても、手を換え品を換えていずれはその大目的を達成せねばならぬのだ。徳川家は我等にとっては主君の仇、宗門の敵、たとえこの弾正の魂が硫黄のたぎる地獄へ堕ちようとも、この世では鬼なり悪魔ともなって、この志をとげねばならぬのだ」
半ばは自分自身にいい聞かせ、ともすれば年とともに衰えなえて行こうとする闘志をかきたてようとしているのだろう。眼は炎のように燃えながら、火とは相反する冷たい涙がかすかに頬を濡らしていた。
「関ケ原以来十年、大阪陣の戦には是が非でもかけつけようと思ったが、いかんせんあの病気、そちはまだ幼少にて物の役にも立たず胸をかきむしられるような思いで見送るしか方法もなかった。が、

それも天意の致すところといおうか。あの落城の運命は、わし一人かけつけたにせよ、かけつけぬにせよ、狂乱を既倒にかえす術とてなかったろうが、幸いここに機会を得て、徳川家と対決せんとする。この老人としてはまたとめぐりあうこともあるまい好機なのじゃ」
「して、十兵衛一人を討ちとったところで天下は動きましょうか」
「動く、動かいでなるものか。いや、この弾正の一念を以てしただけでも、必ず動かして見せるのだ。現在といわず、将来といわず、豊臣家なき後は、徳川家の崩壊は薩摩島津藩と真正面から対決する時以外にはあり得ぬのだ」
「父上にいま一度うかがいとうございますが、われらが十兵衛をうちはたせば、島津家の所業と思いこまれるのは必定でございましょうな」
「そこまでのことが読み切れずに、そなたにこれほどの大事を托するなど、この父をそれほどの愚か者だと思うのか」
二人の会話はしばらくとぎれた。父と子はお互いの腹の底まで探りあうような視線をたがいに浴びせあっていた。
「よろしゅうございます。父上が左様おっしゃるなら、いかにも私も悪鬼となりましょう。柳生十兵衛、いかに剛剣を誇るとて鬼神の生れ変りでもありますまい。今日はいささか事をあせって失敗もいたしましたが、これから数えて十日のうちには、見事に彼を仕止めてお目にかけましょう」
胸中によほどの自信を蔵しているのか、頼母は眼をすえてきっぱりいい切った。

挑戦状

十兵衛の言葉をどう受けとったか知れないが、小山甚十郎と八重の二人は、翌朝早く鳴海屋を出立して、もう十兵衛の前には姿も見せなかった。
十兵衛も内心ぎくりとせずにはいられなかった。いくらか上ずっているように思われた二人の気持をひきしめようとして、わざとああいう冷たい言い方をしたのだったが、何といってもまだ若年の二人のこと、どういう受けとり方をされたかと思うと、やはり気になってしかたがなかったのだ。
「わしもまだ若い。父上には到底及ばぬ」
と、壁にむかってつぶやいた一言は、たしかに十兵衛としてはこれ以上もない悲痛な内心の告白だったに違いない。
一日を無為に過した十兵衛は、もうそのままにしてはおられなくなった。宿で正覚院の地理をたしかめ、一夜を悶々のうちに過してその翌朝、出立しようと草鞋の紐を結んでいたところに、玄関先にあらわれた、一人の山伏がある。
「当家に柳生十兵衛光厳先生が御滞在中であろう。お取り次ぎ願いたい」
という大声に、十兵衛ははっと顔をあげた。この山伏が南円坊宗竜なのか？
なるほど、人相といい、体格といい、叡山の荒法師を思わせる風貌だが、十兵衛の眼から見れば、武道の修行にかけては、それほど年期も積んでないように感じられた。
「へい、柳生十兵衛先生とおっしゃいますと、どんなお方でございましょう。当家にはそのようなお

客様はお泊りではございませんか」
亭主が不審げな面持で問い返したのもむりはない。宿帳に記した名前は八木原重蔵、十兵衛が旅中に用いる仮の名なのだ。
「いや、当家におらぬはずはない。左様さ、身の丈五尺一二寸、片眼のつぶれた、武者修行風の侍だが……」
亭主や女中の視線がじろりとその全身に注がれたのを感じて十兵衛はすっと立ち上った。
「拙者が柳生十兵衛じゃ。其方の名は何という？」
山伏は、はっと顔色を変えて、十兵衛の前に頭を下げた。
「これはこれは、柳生十兵衛先生でございますか。手前は正覚院の山伏、常陸坊日海と申す者にございます。以後よろしくお見知りおきを」
「その常陸坊が一体わしに何の用事じゃ？」
「先達(せんだつ)南円坊宗竜よりの書面を持参いたしました。何卒御披見下さいますよう」
十兵衛は日海の手から、書状をうけとってさっと眼を走らせた。
頗る達筆の漢文だが、文意を探って見ると、
——御高名は、かねてからうかがって、一度拝顔の栄をたまわりたいと存じておりましたが、今般先生の門弟と名のる小山甚十郎なる者、この暑気に逆上いたしたか、身におぼえもない仇呼ばわり、ひっ捕えて正覚院につないでおりますが、この処置いかに致すべきか、一応おうかがい申し上げます。なお、正覚院は名だたる月の名所、御漫遊の節に足をとめられ、そのお序でに一手の御教示をたまわらば喜びこれに過ぎるものはございませぬ。

言葉の調子は丁寧だが、その裏に流れているものは、柳生十兵衛何するものぞという激しい闘志——そしてこの手紙そのものが、形を変えた挑戦状なのだ。
十兵衛はきっと眼を上げて日海をにらみつけ、
「せっかくの招きじゃ。辞退するのも悪かろう。これより参る。案内せい」
「それではお越し下さいますか」
十兵衛があまりすっきり応諾したので、かえって日海の方がびっくりした様子だった。
「参るとも、こうした招待がなくとも参ろうと思っていたのだ」
十兵衛は何の動ずるところもなく答えた。

奇兵の襲撃

そこから嶮(けわ)しい山道を三里ほど上って行った時、十兵衛は何かしら身に迫るぶきみな殺気を感じてはっと立ち止った。
「先生、いかがなされました？」
日海はとまどいしたようにたずねた。その顔は妙にきょとんとして、全然何も感じていない様子。
「火縄の匂い！」
十兵衛は叫んでぱっと身を伏せた。間一髪というところで、だーんと鋭い銃声がひびき、そして呆然とつっ立ったままの日海は、あっと叫び、きりきり舞いをして、だっとその場に倒れたのだ。
地上に伏せた十兵衛は頭を上げて四方を見まわした。二三十間先の渓流を隔(へだ)てた対岸に松の大樹に

かくれ、鉄砲に弾丸をつめ直している猟師風の男の影がある。
「曲者！」
　十兵衛はぱっと起き上ると、倒れざまに拾っていた礫を相手にたたきつけた。あっと声をあげて鉄砲を落してよろめいたのは、狙いもあやまたず、その礫がどこかの急所へあたったためだろう。
「曲者、待て！」
　十兵衛はたちまち愛刀三池典太を鞘走らせた。しぶきをあげて渓流を渡り、その男のあとを追ったが、相手は事仕損じたと見きわめをつけたのか、鉄砲を投げすて、ただ、身一つで嶮しい山道を、鹿のように逃げ去って行く。そこから半里ほど追跡して、十兵衛は結局相手の影を見失ってしまった。
「はて、わしともあろうものが、あまりにも深追いをしすぎたかな」
　十兵衛は自嘲のようにつぶやいて唇を噛んだ。そこは小高い丘となっていて、眼の下には十何軒かの部落が横たわっている。そこが自分の命をねらっている宗野弾正たちの住家と知る由もなく、十兵衛は静かに丘を降って行った。
　ちょうどその時、長い杖にすがって出て来た宗野弾正は立ち止って十兵衛をじっと見つめると、
「御武家、旅のお方と見えるが、いずれへおいでなさる？」
と、声をかけた。
「正覚院へ参る途中、怪しの者に鉄砲で狙撃され、ここまで追いつめて参ったが、なれぬ山道のことゆえ、ついに姿を見失ったので。この村の者ではござらぬかな？」
「はははは、何をおおせある。この村の者はみな百姓や猟師ばかり、それは鉄砲の一挺二挺はどの家にもおいてはあるが、この白昼、人間を狙うなどとは、はははは、そのようなしれ者はこの村に

おるはずはない」
「左様でござるか」
　理の当然の言葉だし、弾正の顔にも態度にも別に変った様子も見えないから、十兵衛も深く相手を疑おうとはしなかった。
「ところで、尊公はもしや、柳生家の御総領、十兵衛光厳様ではございませんかな」
「よくおわかりでござるな？」
「いや、その二蓋笠の紋はたしかに柳生家の定紋、お刀は一目見ただけでも分る稀代の業物(わざもの)、まして隻眼異相のお顔だち、先ごろより九州御漫遊の途中と承わるので、一応おうかがいしたまでだが」
「はははは、そこまでたねがばれていては、今更かくしだてもなるまいな。いかにも拙者は柳生十兵衛、そして貴殿のお名前は？」
「本来は世を包む身なれども、今となってはひたかくしにかくすにも及ぶまい。元小西家につかえし浪人宗野弾正、関ケ原の一戦では臆病風に吹かれて戦場から逃げ出し、今は老体をこうして山間に養っておる身じゃが」
「これはかねがね聞き及ぶ宗野弾正殿でござったか」
　十兵衛も形をあらためた。小西家にそういう剣の名人がいたことはかねて父からも聞かされていた。ただ、眼の前にたたずんでいるこの老人がその人であろうとは、夢にも思っていなかったのだ。
「貴公の父御、但馬殿とは酒くみかわして語り明したこともある。その御子息ともあればいよいよなつかしい。先をお急ぎとは思うが、わが家へ立ちより、この老人の退屈をなぐさめては下さるまいか」

そう誘われて、十兵衛も心は動いた。ただ正覚院で彼を待ちうける南円坊と、捕われの身になっている甚十郎のことを思うと、じっとしておられぬという気持も起って、

「まことに有難いお言葉でござるが、手前は今日中に正覚院まで参らねばなりませぬ。そこで用件をすませ次第、帰途には立ちより、いろいろと御高説をうかがうといたしましょう」

「左様か。それならばお帰りをお待ちいたそう。だが十兵衛殿、心せられよ。貴殿が九州地へ参られて以来、幕府に異心を抱いている諸藩は貴殿の動静に厳しい注意の眼を注いでいる。たとえば島津藩のごときはその随一だが」

「御忠告かたじけのうござる。それでは先を急ぎますゆえ、これにて御免。いずれ改めて御意を得ましょう」

十兵衛は一礼してその場を立ち去ったが、その姿が見えなくなったころ、近づいて来たのは頼母だった。

「父上！」

「残念ながらとり逃した。一度わが家の敷居をまたがせれば、後はどうにでもなる――と思ったが」

弾正は口惜しそうにばりばり歯ぎしりして、

「だが。頼母、まだ事は失敗に終ったわけではないぞ。我等が直接手を下さずに十兵衛の命をとる、今いい手立てを思いついたのだ」

正覚院の血闘

十兵衛はその夕刻、正覚院にたどりついた。山伏たちがこもって修行する僧坊だが、玄関に立って案内を乞うと、出て来た取次の者が、

「これは遠路はるばる御入来恐れ入ります。して常陸坊日海はいかがいたしましたか」

「それが誠に気の毒なことをいたしてのう。途中怪しの者に鉄砲で狙撃され、わしは危うく命拾いをいたしたが、彼は弾丸にあたってあえない最期」

と、十兵衛が事の仔細を話すと、相手は半信半疑の面持で、

「それはまことでございますか。出てまいった時は元気な姿でございましたが、朝の紅顔、夕の白骨――という言葉通りに、いや人間の生命ははかないものでございますなあ」

「それで骸を何とかとりかたづけようと思ったが、何しろこちらは一人ゆえ思うにも任せなかった。当坊より人数を出し、ねんごろに弔ってやってはくれぬか」

「お言葉がなくとも、それは我等といたしましては当然のつとめでございます。早速人手を出しましょう」

「そして南円坊宗竜は？」

「ああしてお手紙をさしあげて、しばらくいたしましてから、――これはしたり。わしともあろう者が、とんだ粗相をいたしたものじゃ。何と申しても、柳生十兵衛様とあれば、いずれは一万石の御家を継がれるべきお方、お呼びたてを致してはまことに失礼、こちらより御挨拶にまかり出ようと、日海を追って参りましたが、途中でおあいにはなりませなんだか」

「はて、そのような山伏にはあわなかったが、どこかで行違ったものであろうか？」

「何はともあれ、立ち話もあまり失礼でございますが、何卒お上り下さい

ませ」
「うむ、それでわが門弟、小山甚十郎は、いかがいたした」
「南円坊の申しますには、彼の父とは正式の武道試合で勝をしめたもの。勝負も生死も時の運ゆえ、べつに仇呼ばわりされるいわれはないと申すことでございましたが、ぁまりしつこく斬ってかかりますゆえ、やむなく得物をうち落し、一室に閉じこめおきましてございます。先生がお見えになればお引きわたし致そうと存じておりました」
「左様か。迷惑をかけたのう」
十兵衛もいくらか張合ぬけがした。武道試合の際に何かのはずみで真剣勝負におよぶということはよくある話なのだし、一旦そういう事態となれば、どちらも命は保証し難いのだ。そうだとすれば、甚十郎が武士の意地として南円坊をつけねらうわけは分らないでもないが、相手の方もそれほどとがめられないような気がした。
取次の者に案内されて来てみると、なるほど甚十郎は格子を組んだ部屋の中に入れられて小さくなっている。
「甚十郎、いかが致した?」
十兵衛が声をかけると、甚十郎はとび上らんばかりに驚いて、
「先生、どうしてここへお越しに? かような姿をお目にかけて面目もございませぬ」
と、涙ながらに手をつかえた。
「何もそのように恥じいるにも及ばぬ。だが八重はいかがいたしたのじゃ?」
「はい、先生の御教えに従い、途中にて水杯をして別れましたが、多勢に無勢、犬の子のようにぁし

らわれ、ここへおしこめられてございます。先生には死ねとお教えをうけましたが、どうしても死にきれず、汗顔の至りでございます」
「うむ」
十兵衛はいたわるような視線を甚十郎の全身に投げ、
「まぁ勝負は兵家の常——敗れて捕われの身となったにせよ、それほど恥じるにも及ばぬことじゃ。南円坊が帰ったならば、よく話をつけて、其方の処置を定めよう。だがその留守に勝手な真似もいたされぬ、窮屈ではあろうがしばらくそこで辛抱いたせ」

南円坊宗竜

「はて、これは!」
草むらの中に倒れている日海の死骸を発見して、南円坊は呆然とたたずんだ。
日海はたしかに鉄砲の弾丸で倒れたはずなのに、見れば全身刀傷におおわれ、見るも無惨な最期なのだ。
「はて、日海ともあろうものが、これほどの手傷を負うとは、相手もよほどの使い手に相違あるまいが」
眼をあげて何かの幻影を追うように虚空をはるかに睨んだとき、がさがさとそばの藪をかきわけてその前にあらわれた野武士がある。宗野頼母だ。狐のような狡猾な表情で、
「南円坊殿、日海殿には気の毒な御最期をとげられたのう一

「この下手人を御存じか？」
「名前は知らぬ。ただむこうの山でちょうど一部始終は見とげたが、小兵隻眼の侍とつれだって、ここまでやってこられたが、たちどまって何やらいさかいを始めたと見る間に、いきなりその侍が刀をぬいて日海殿に斬りかけたのだ。日海殿も金剛杖をふりかぶって、しきりに応戦されていたが、何しろその侍の剣は悪鬼羅刹のごとき凄まじさ——さすがの日海殿も刀を受け損じ、あっと叫んで倒れたのだ。その争いの理由は知らぬ、武士ならばそれ以上の仕打は無用と思われるのに、血に狂った——とはあのような事を申すのであろうか。死骸の上に馬のりになって、この通りなますのように切りきざんだ。早速かけつけて見たが、何しろ遠廻りせねばならぬことゆえ、ここまで来た時には、その下手人の影も見えぬ。早速村人たちとも相談いたし、正覚院まで使いを走らせたのだが、それはまだ到着しなかったかな？」

　これも恐らく宗野弾正の苦肉の策に違いない。この場に残された骸をわざとこうして斬りさいなみ、その下手人の嫌疑を十兵衛に負わせようとしたのだろう。だが、南円坊はそれとも知らず、激しい怒りを爆発させた。

「おのれ、柳生十兵衛め。乱心の兆しがあるとはかねがね聞いてもいたが、正しくその噂にも違わず……」
「柳生十兵衛？」
　頼母はわざと空々しく、
「十兵衛と申せば将軍家御手直役、柳生但馬守の長男か？　独眼竜といわれる男か？」
「そうだ。その十兵衛が八代の鳴海屋に滞在と聞いたので、日海を使者にして迎えにやったのだ」

　宗竜の眼は、一瞬ぶきみなばかりの燐光を放った。
「わが先師、南海坊様には今を去る十数年前、柳生の道場へ乗りこんで真剣勝負の上、両眼盲となり、それを苦にして悶々と世をはかなまれ、遂に狂い死にをせられた。その恨みをついで、わしも一度は柳生一派に一泡吹かせんと思っていたのだが……柳生十兵衛来遊と聞いて千載一遇の好機と思い挑戦状をたたきつけたのだ。わしを仇とねらっている小山甚十郎を一思いに息の根も止めず、わざと生かしておいたのも、是が非でも十兵衛をおびきよせんとする策であったが」
「なるほど、宗竜殿の御心中はよくわかる。武道に志す者として、それだけの意地がなくてはかなうまい。それに加えて、日海殿の仇となれば、それはなおさらのことであろう。ただ、この機にのぞんでも宗竜殿はなおも一騎討ちの勝負を挑まれる気か」
「いうにや及ぶ」
「いや、それはお考えなされた方がよかろうぞ。何と申しても相手は狂人、しかも狂人という者は、ふしぎに一つの道にかけては常人以上の力を発揮するものだ。十兵衛もあまりに剣の道に執念して、頭がおかしくなったのだろうが、そういう気違いを相手に一騎討ちをされては勝ってあたりまえ、負けては算盤にも何にもあわないことではないか」
「それではどうしろといわれるのだ？」
「相手は狂って日海殿を斬ったのだ。その仇をとるというならば、僧坊の者が残らず総がかりになっても名分は立つであろう。もし拙者が貴公の立場にたったならば、山伏たちをかり集め、一挙に四方からおどりかかる。十数人が四方からおどりかかれば、防ぐに防ぐすべもあるまい。一人二人は斬られるか知れぬがそれは止むを得ぬ犠牲と思うほかはあるま

い」
「うむ……」
剛勇無双、まるで武蔵坊弁慶の再来を思わせるような荒法師だけに、頭の働きは至極単純らしい。立板に水を流すような頼母の弁舌に、すっかり丸めこまれて、自分でもその気になったようだった。
「や、南円坊様、こちらにおいでてございますか。や、日海殿のこの死にざまは！」
その時近づいて来た正覚院の山伏たちも声をあげた。日海の屍にむかって、さらさらと数珠をおしもんでいた宗竜は眼をあげて、
「柳生十兵衛は僧坊におるか？」
「はい、むこうで休息されております」
「よし！」
宗竜はぷっつりと数珠の紐を千切って、日海の屍の上に投げすてると、
「みなの者、この死体を正覚院に運んで参れ。どうしてもこの恨みは晴らさずにはおくまいぞ」

正覚院乗込み

待つことしばらく、十兵衛は何となく自分の身に迫ってくるただならぬ殺気に気がつきはじめた。
「はて、これは、どうしたことか？」
十兵衛がわれを忘れてつぶやいた時、庭先から人目をしのぶように、
「先生！　柳生十兵衛先生」

と、呼びかける女の声があった。十兵衛もすっと立ち上って縁先に近づき、
「そういう声はたしかに八重殿。どうしてこれに？」
「はい」
八重はあたりを見まわしながら、十兵衛の前の庭に手をつき、
「先生の御身が危のうございます。それをお知らせに上りました」
「はて、甚十郎の安否を気づかって、ここまで参ったのではないのか。して、わが身が危ないというのはどういうわけじゃ？」
「ただいま、一人の修験者の死体が運んで来られましたが、その下手人が先生だと」
「はて、心得ぬ」
十兵衛が呟いた時、八重も思わず声をあげた。たちまち庭先から湧いて出たように十数人の山伏たちがどっと姿をあらわしたのだ。それと同時に、部屋の襖が大きく開き、やはり十数人を従えた南円坊宗竜が金剛杖を手に立ちはだかった。
「柳生十兵衛光厳か！」
「其方が南円坊宗竜か」
投げ返す言葉にもすでに必殺の気が満ちている。
「勝負を所望と申すゆえ、わざわざ道を曲げてこうしてまかり越したが、この挨拶は何事じゃ？」
「其方の胸におぼえがあろう」
「ない！」
「なるほど、其方は狂人のことゆえ、自分が何をいたしたか、即座に忘れてしまうのも無理はない。

何故に使者日海を手にかけた」
「手にかけたなどといわれるおぼえはない。同行している途中、怪漢に狙撃され、その弾丸が彼の胸を貫いたのじゃ、骸を調べて見ればそれは判然とするであろう」
「骸は調べた。いや、ここまで運んで来てあるが、弾丸傷などはどこにもない。大小無数の刀傷ばかり」
「何と！」
「言い逃れようとて逃げ口上は許さぬぞ。さあ、この死体を見るがよい」
さっと宗竜の背後から、戸板に乗せられた日海の死体が運びこまれた。その凄惨な形相には、さすがの十兵衛も思わず声をあげて驚いたくらいだった。
「汝の罪はほかにもある。門弟を放ってこの道場の様子をうかがい、今また女性をつれこんで、この聖域の清浄を汚す――その罪もはや許し得ぬ！」
「はははは、何を申すのじゃ。身におぼえなき濡衣ばかり」
「いうな、十兵衛。神罰仏罰、今こそ汝に下ろうぞ。それ、方々！」
たちまち雨のような金剛杖が十兵衛の身に襲いかかった。中では不利――と見てとった十兵衛は、さっと身をかわして庭へとび出し、八重を背後にかばいながら、愛刀三池典太の鞘をはらった。
「身におぼえなきそのいいがかり、詳しく話して聞かせば、事情もわかり、無益な殺生もせずにすもうが、わが身を守るためにはいかに十兵衛でも刀にかけての挨拶を致さねばなるまい。参れ！」
水もたまらぬ刀の働きに、左右から襲いかかった二人はたちまち金剛杖を二ツに切られてよろめいた。前からと後ろから襲撃した二人は血しぶきあげて倒れた。柳生流三光雷倒の太刀さばきは、人が

動くか剣が動くか分らぬほどに妙をきわめ、八重も自分の身の危難さえ忘れて固唾を呑んだほどだった。あまりにも鋭い太刀風に圧せられて、山伏たちが思わず尻込みしたのを見て、宗竜はばりばりと歯をきしらせ、
「ええ、腑甲斐なき者どもめ。もう汝等の手は借りぬ。この宗竜が一人にて、この仏敵を成敗いたす」
金剛杖をうならせ、堂々前に進み出た。
十兵衛はじりりと刃を上にあげ、刀を縦にかまえたが、どのような秘術を発揮しているのだろう。五尺そこそこの小男とはいえ、十兵衛の体は一筋の刃に覆いかくされて、宗竜の眼にうつらない。
「おお、柳生流木の葉がくれの一手だな！」
「いかにも……」
二人とも容易には動かなかった。宗竜はかっと金剛杖をふりかぶったまま、仁王の木像のように身動き一つせぬ。それで十兵衛の体はまるで恐ろしさに震えが来たように、眼にも止まらぬ動きを前後左右に見せている。
「おう！」
がっと金剛杖が上から舞いおりた。さっと飛びのいた十兵衛の水落のあたりをめがけて、今度は逆について出た。鋭い二段返しの捌き、真剣以上の働きをする棒術の妙なのだ。
「や！」
これが普通の相手なら、最初の一撃は受け流しても、第二撃には急所をつかれて、血反吐をはいて倒れたろう。だが十兵衛の刀はまるで磁力でもあるように、横から杖をすくって、宗竜の手からもぎ

とっていた。
「柳生流、真剣白刃どりか！」
「いかにも」
勝負は見えたも同然だった。こうして武器を奪われては、さすがの宗竜もどうにもなるまいと見えたが、まだ残された最後の闘志をふり絞って、
「それでは組もう！」
と、前におどった。
いつ、十兵衛の刃が走ったか、この場の人々の誰にもそれは分らなかった。ただ宗竜の怪力を恐れて、後ろへ飛んで避けたとしか見えなかったが、一歩進んで宗竜はよろめき、二歩進んでよろめき、そして三歩目にはどうと倒れた。いつの間にか額に走っていた糸ぐらいのわずかな傷あとが、がばりと口を開けたのだった。
「あッ、先達が！」
「師の御坊が！」
山伏達は声をあげた。今までは、われを忘れて二人の血闘を見つめていたのに、この宗竜の最期を見て、とたんに闘志をかきたてられたか、一せいに杖を鳴らして十兵衛にうってかかった。
「静まれ！　静まれ！　山伏ども、杖をひけい！」
どこからか呼びかける声がある。いつの間にか細川家の定紋の入った提灯が、無数にこの場のまわりを包んでいた。
「柳生十兵衛光厳様に無礼を致してはなるまいぞ！　細川家の家老渡辺新左衛門、いまお迎えにまかり越した」

竹垣城余話

熊本の城は名将加藤清正が、苦心に苦心を重ねて築いた城——一名、竹垣城とも呼ばれている。いま渡辺新左衛門を従えて、その天守閣に立つ十兵衛の顔は何ともいえぬほど清々(すがすが)しかった。
「これにて城中の要害、軍事の機密、何一つ残さずお目にかけましてございます。何卒江戸表にお帰りの節は上様に対して、当細川家は決して二心なき由、言上下さりますよう」
新左衛門の額には、たらたらと脂汗が浮かんでいる。十兵衛を公儀からの隠密と見ぬいて、ただ家の安泰をはかろうとする家老の苦衷がまざまざとその顔ににじみ出ていた。十兵衛はその言葉には答えもせず、
「よくあの時、正覚院まで迎えに来てくれたのう。おかげで十兵衛も、むだな殺生をいたさずにすんだ」
「恐れ入ります。鳴海屋よりの知らせにあわててかけつけましたが、時も遅れまして」
「して、甚十郎たちの処分はどうするのだ？」
「は……」
「十兵衛は親の仇討の助太刀をたのまれて、あの時正覚院にのりこんだのだ。八重は女のことゆえ、わしがかばってとらしたが、甚十郎はちょうどあの時、奥でむこうの助太刀どもに囲まれておってのう。助太刀は助太刀にてひきうけるのが仇討の常法だが、実際の場合にはなかなか作法通りにも参ら

ぬのでな」
「は……」
「宗竜には、たしかにわしが初太刀をあびせたが、止めを刺したのは甚十郎と八重の二人——と、すれば仇討は目出たく相すんだわけだな。当家に帰参はかなうであろうな」
「はい……あの未熟者に花をお持たせ下さるそのお言葉お志には何ともお礼の申し上げようがございませぬ。早速、殿にも申し上げ、帰参の儀は、取り急ぎ計らい申しましょう」
「そうして欲しい。して、あのような事態はどうして起ったのじゃ」
「は……」
新左衛門の顔は、まるで紙のように真青だった。大きく息をはずませながら、
「あの近くに住んでおりました宗野弾正等の一味は、御禁制の切支丹でございました。それを知らずに放置していた過ちは一にかかって手前にございます。殿には何の御存じもございませぬ。先般、八代に十兵衛様を要撃したのも彼等のわざ、正覚院の山伏たちを煽動して、あれほど事を大きくしたのも彼等のなせるわざでございます。事が判明すると同時に、早速追手はさしむけましたが、宗野弾正親子はいずれともなく逃げ去りまして……」
「うむ……」
ようやく仔細が呑みこめたという風に十兵衛はうなずいたが、まばたきもせずに自分の顔を見上げている新左衛門のただならぬ様子に気がついたか、
「新左、死ぬなよ」
「え……」

「其方は、わしが一言、非難がましき事を申したら、罪を一身にひきうけて、この場を去らず切腹する覚悟であろう」
「は……」
「そのような必要はないことだ。十兵衛はただ一介の武者修行。それが暴徒に襲われようが、その暴徒が偶然切支丹であろうが、一国一藩の政治には何のかかわりもないことだ。そのような事件が、あったたびに、家老が一々腹を切らねばならないようでは、次の家老のひきうけ手もあるまい」
「は……何ともいえぬその言葉、新左衛門、終生、御厚情は忘れませぬ」
ほろほろと、相手の頬に伝わった涙を見て十兵衛は豪放に笑い出した。
「はははは、細川殿にとんだ所で、えらい御迷惑をかけ申したのう。わしはこれより、唐にわたり、天竺（てんじく）まで足をのばすつもりでおるが、むこうで釈迦如来に出あったら、越中殿のことはよろしく伝えておこう。わが国の大名中でも稀代の器量人、よい家来を多勢お持ちになっておるとな。釈迦や阿弥陀とはわしはいたって心やすい。わしがそのように申しておけば、子々孫々に至るまで極楽往生は間違いないぞ」
新左衛門は、はっと十兵衛の顔をあおいだ。隻眼異相のその顔は、すべてを知りつくした大賢とも見え、またすべてを弁えない大愚のようにも見えるのだった。

第六話　針を吹く女

血闘

「近ごろ、噂に聞けば、柳生家の御曹子、柳生十兵衛光厳様が、この西国筋へ、武者修行の旅に出られておるそうではないか？」

「ほう、それは拙者も初耳だが、病気の方は全快いたされたのかな。何でも人の話によれば、十兵衛様は、独眼小兵の体ながら、柳生家始まって以来の麒麟児とうたわれ、いずれは将軍家御手直役におさまるべきお方なのに、不幸、脳病をわずらわれ、大和国柾木坂の御屋敷にとじこもっておられると聞き及んだが……」

「それが、大きな声では申せぬが、偽病だという

ことなのだ」

「偽病？　それはどうして？」

ここは熊本城から南へ十三里、街道筋に沿った杉代という部落の掛茶屋だった。

明らかに、武者修行と見えるいでたちの侍が三人、床几に腰をおろして、渋茶を飲みながら、あたりかまわぬ大声で話しあっている。

中の一人が、声をひそめるどころか、かえって語勢を強めて、

「大阪夏の陣以来、ここに数年の年月は過ぎたが江戸の徳川将軍家においても、このままで、天下の太平が、保たれるものとは思っておられぬらしい。まして、薩摩の島津家は、関ケ原合戦の敗走以来、いずれはこの恨みを晴らさんものと、臥薪嘗胆を誓っているということだ。それに、この西国には、まだ御禁制の切支丹の教えが根強く伝わっておる。目的のためには手段を選ばぬのが、彼等切支丹の常套手段なら、徳川家においても、西国諸藩の動向は、終始頭痛のたねであろう。薩摩

一藩ならばともかく、万が一にも、西国諸藩が切支丹の宗徒に煽動され、一致連合して起ち上るようなことがあれば、これは由々しき一大事だからな」
「今さら、天下の大勢を、貴公に講釈してもらおうとは思わぬが、そのことと、柳生十兵衛の発狂に、どのような関係があるというのだ」
「いいから聞け。それで、柳営重職も、事態をすこぶる憂慮され、十兵衛様に密使を託し、隠密として西国へ派遣されたのではないかと、これが専らの噂なのだ。ただ、普通では柳生一万石をつぐべき御身として、西国筋の漫遊などに、暇をついやす余裕はないはずだ。まして、隻眼異相の身では、一目でそれと見わけがつく。だから偽気違いになりすまし、その上で……」
「うむ」
いくらか、事の仔細がわかって来たのか、腕を組んで、ひくくうなりながら、
「だが、柳生十兵衛という人物は、剣客としてはどれだけの腕を持っておるのであろうな？」
「それがいわゆる柳生の麒麟児」
「拙者には、そういう世評は、そのままうけとれないのだが」
「どうして？」
「彼は片眼だ。ためしに片眼をつぶって見ろ。物の遠近は分らぬぞ。両眼開いている者よりも、ずっと視界は狭いだろう。これは、人間の体の自然――柳生十兵衛といえども異るわけはあるまい」
「体の眼は見えなくとも、武道の極意に、心眼を開く――ということがある」
「それはどうかな。どのような天才にしたところで、それほどの肉体的欠陥を克服出来るかどうかは大いに疑問の余地がある。麒麟児だとか、独眼竜だとかいう呼名も、まわりの者がおだてあげてお世

辞たら作りあげた異名ではないのかな」
「それでは、貴殿は十兵衛様と立ちあってもおくれをとることはあるまいというのか？」
「言うにや及ぶ。柳生十兵衛といえども、天魔鬼神の再来ではあるまい。この梅津大八郎が試合をいどめば、まず三本のうち、二本まではこちらの頂きであろう」
何しろ、本人が眼の前にいないのだから、どのような気焔でもあげられるが、これはまた、とんだ大言壮語を吐いたものだ。
ほかの二人も、呆れたように、梅津大八郎の顔を見つめていたが、この時、ほほほ、ほほほほほと茶屋一杯にひびきわたった、女の笑い声がある。
三人の侍は、ぴくりと眉をひそめて、この笑い声の主を見つめた。
まだ、二十を過ぎたか過ぎないかという年頃の美女だった。やはり旅姿によそおってはいるが、ともらしい者も見えない。武家の娘と思われるがそれにしては、あまりにも慎しみのない哄笑だった。
梅津大八郎は、むっとしたように立ち上ると、つかつかと女の前に歩みよって、
「これ、いまの笑いは、何故じゃ？」
「おかしかったからでございます」
「何がおかしい？」
「井の中の蛙、大海を知らず――という諺もございますが、天下無双の名人といわれる柳生十兵衛先生に、あなたのような田舎武者が、三本のうち二本までとって見せる――といわれるのでは、心ある者なら、誰でも吹き出さずにはおられますまい」
痛いところをつかれて、大八郎は見る見るうちに真赤になった。

「黙れ！　女。その方は柳生十兵衛に、ゆかりの者か、女と思って、いわせておけば何たる雑言——これ以上申せばその分にはおかぬ」
「何も、女と思われる必要はありますまい」
「何と！　それでは、勝負をいたすとでもいうのか」
「柳生十兵衛様でなくても、わたくしでもあなたを相手なら三本に三本はいただきましょう」
　この女はいったい何者なのか。見るからに強そうなこの男を前に、臆する色もなくはっきりといい切ったのだ。
「うむ……」
　梅津大八郎は、じっと女の全身をみつめ、嘲けるような笑いを浮かべて、
「女のことゆえ、おだやかにわびを入れるなら、このままにすませてやろうとも思っていたが、重ね重ねの無礼には堪忍袋の緒が切れた。嫁入り前の体を片輪にするのは本意ではないが、それも身から出た錆とあきらめるのだな。支度して、むこうの河原まで参れ」
　と、どすのきいただみ声でいった。
「べつに、支度もいりませぬ。これさえあれば」
　女のとりあげた竹杖からは、ちらりと二寸ほど、鋭い刃の光がもれた。
「仕込杖か？　何とも用心のよいことだ」
　いくらか、無気味になっては来たのだろうが、梅津大八郎としても、今更後へはひけなかった。
「各々方は、立合人の役をたのむ。では参ろう。亭主、茶代はここへおいたぞ」
　一人の女を中にはさんで、河原へ降りて行く三人の侍の姿を見送ると、亭主はあわてて奥へ走りこ

んだ。
「御武家様、大……大変でございます」
「分った。委細はここで残らず聞いていた」
　奥の座敷で、弁当を使っていた一人の侍は口もとにかすかな笑いを浮かべた。
　小兵ながらも、全身精悍な筋骨の塊のようなこの武士の右の眼は醜くつぶれている。その紋服の定紋は二蓋笠——これこそ、いまの噂の主、柳生十兵衛に違いない。
「世話になった」
　一粒の小粒を盆の上におくと、十兵衛は愛刀三池典太を腰に、一尺二寸の鉄扇をさげて店を出た。
　眼下の河原では、いま梅津大八郎と女がぱっと両脇へ離れたところ。
「真剣勝負か、これはおだやかではないぞ」
　いかに時のはずみとはいいながら、事態がここまで発展するとは思わなかったのだろう。十兵衛は、はっと立ち止まって、息をこらした。
「やッ！」
　大八郎の手にした剛刀は、うなりをあげ、女の腰のあたりをかすめた。女は飛鳥のように飛びのいて、その一撃をかわしたが、男と女の体力の差はあり、気力の違いはあり、勝負はあったも同然だと思われたが、
「あッ！」
　その時、刀を落してよろめいたのは、梅津大八郎の方だった。女の刃は、彼の身にふれてもいなかったが、その朱唇から吐き出された、銀の虹のような白い光が、大八郎の眼を射たのだ。

「吹針……吹針の術を使うとは」
さすがに、柳生十兵衛は、一瞬に女の秘術を見やぶっていた。
穴の無い長さ二寸の針を口中に含んで、勝負の間に、それを吹きつけ、眼や喉を射て、敵の死命を制するこの離れわざは、豊後の住人、有馬喜兵衛信義のあみ出した秘術なのだ。柳生十兵衛としても、この秘技は、話に聞いているだけで、眼にしたことはなかったが、いまこの女が、その術の妙技をふるうのを見て不思議な興奮に襲われた。
彼は、たちまち大音声をはりあげて、
「待て！　この勝負は拙者が預ろう」
「あなたさまは？」
一二間、飛びのいて、こちらを見あげた女の言葉に、
「われは柳生十兵衛光厳——仲人として不足はあるまい……」

鬼神太郎

見事に、瞼を射ぬかれて、行動を妨げられてはいたが、梅津大八郎の方も命に別条はなかった。そこに、思いがけなく、柳生十兵衛の出現だから文字通り平身低頭して、二人の侍とともに、その場から姿を消してしまった。
「女、其方は何者だ？　この吹針の秘術をこれほどたくみに使うところを見ても、ただの女とは思えぬが」

「女だてらにあられもなく、恥しいわざをお目にかけまして……わたくしは、秋月藩で二百石を頂いておりました近藤源右衛門の娘、静枝と申します不束者、どうぞお見知りおき下さいませ」
「して、その吹針の術は」
「二年間、有馬喜兵衛先生のもとで修業いたし、ようやく体得いたしましたが、先生のお眼で御覧なさいましたら、まだまだ未熟なところはいくらもございましょう」
「二年でそこまできわめたのか？　うむ、もちろん天分もあったであろうが、女の身としては、この上もなくあっぱれな修行じゃ。この勢いでは、たとえ十兵衛自身が受けにまわっても、百本を百本まで打ち落せるとはいいきれぬ」
「身にあまるおほめの言葉を頂きまして、ただただ恐れいります」
「だが、たとえ武士の娘とはいいながら、女としてのたしなみをはるかに越えたこの修業は、はたしてどういうわけじゃ？　これには何か仔細があるであろうな。差支えなければ、話して聞かせぬか？」
何ともいえぬ親切味がこもった十兵衛の言葉に静枝はそっと顔をあげ、
「父の仇を討ちたいばかりに、一念こめての修行でございました」
「うむ、陽気の発するところ、金石も通すというが、人の一念というものは恐ろしいな。それで仇の名は？　ありかは？」
「はい、父はいささかの争いから、やはり秋月藩に仕えておりました、江島権太夫という侍に闇討をかけられ、四十五歳を一期としてあの世の人となりました。彼はその夜のうちに秋月を退散して、しばらくは行方も知れませんでしたが、ついこのほど、白髪ガ嶽にこもっている山賊、鬼神太郎のもと

にあって、その片腕とたのまれているということがわかったのでございます」
「鬼神太郎？」
柳生十兵衛も思わず固唾をのんだ。彼が熊本竹垣城に滞在の間にも、この名前は、いろいろの人の口から聞かされていた。
百人あまりの部下をひきい、白髪ガ嶽、矢山嶽その附近一帯のけわしい山嶽のどこかに住むこの怪盗は、その所在さえもはっきりしないという。ただ、たえず平地にあらわれては、部落を焼き、物糧をうばいなどして良民を苦しめるのだが、いざ追撃の兵を出せば、風のようにすばやく幻のように跡形もなく姿を消し、容易に捕捉も出来ない存在なのだ。
熊本細川家を初めとして、附近一帯の諸藩には大きな脅威なのだが、もちろん完全にこれを征討する目算がたたないままに、ついずるずるとなっているということだった……。
「なるほど、鬼神太郎の一味に加わっているというのか？　それでは、ちょっと仇の討ちようもあるまいな」
「それはどうしてでございます？」
「肝心の鬼神太郎の行方が知れないでは、どうにもなるまい」
「それが、ひょっとしたことから、手がかりがつかめたのでございます。ここから東の方に六里、山間の岩窟にひそんでおるらしいことがわかったのでございます」
「それで、そなたは？」
「たとえ、鬼神太郎と申しても、名前通りの鬼神ではございますまい。明日にでも山を登り、敵中にしのびこみ、仇の権太夫を討ちとってもどるつもりでございます」

「何と！」
さすがの十兵衛も、この言葉には、舌をまいて驚かずにはおられなかった。いかに、親の仇を討とうという一念に燃えているとはいえ、いかに吹針の秘術に長じているとはいえ、この美女が、単身誰の助けもなく、凶悪な百人の山賊に真正面から戦を挑んで、その望みを達し得られるとは想像も出来ないことだったのだ。
「其方の志は感服のほかにはないが、それはいかにも暴挙のきわみといわざるを得ないな。敵は大勢、しかも地の利を占めている。この勝負は万に一つの勝目もあるまい」
「先生でも、そうおっしゃるのでございますか？　わたくしには、十分の成算がございますが」
「成算とは？」
「それは誰にも申しあげられません。はかりごとは、密なるを以てよしとなすと、兵法の極意にもございます」
静枝の大言豪語には十兵衛も呆れてしまった。これが男ならいざ知らず、一見したところは風にもたえぬような美女が、これだけの自信を持っているというのは、たのもしいというよりも、その頭を疑いたくなる気持がした。
「ふしぎな女だ。其方は」
「それは今まで、ほかのお方からも、よくいわれた言葉でございます。ただ、わたくしにいわせれば自分の考え、行動の方があたりまえなので、ほかのお方が変っておられるように思われますが……」
その夜、柳生十兵衛は、宮原宿の本陣、島原屋へ宿をとった。

静枝も、この道が順路にあたるというので、ここまでつれだって来た。
夕食をとりながら、十兵衛は懇々と理屈を説いて聞かせたが、順理をかみわけたようなこの説得には、静枝もどうやら折れたらしい。十兵衛も、いくらか肩の重荷をおろしたような気持で床についたが、どうしたことか、なかなか寝つけなかった。
——はてな。わしはあの娘に惚れたのかな。柳生十兵衛ともあろう男が……
とつぶやいて、苦笑したとき、何ともいえぬ物音が、旋風のように家の外を走った。
かつかつという蹄の音、狂ったような馬のいななき、そして鋭い雄叫びと、まるで戦場のすさまじさを思わせるような騒音が、町全体に狂いまわった。
十兵衛は、刀をつかんで飛び起きた。階段を一足飛びにかけおりると、
「亭主、あれはいったい何事だ？　あの物音は何なのだ」
「はい、は、はい」
亭主をはじめ、店の者は、生きた心地もないように、がたがたとふるえながら、
「鬼神太郎が……手下をつれてこの宿を襲って来たものと思われます」
「鬼神太郎の来襲だと？」
十兵衛は、逆に不敵の笑いを浮かべた。そのまま土間におりたって、切戸から外へ出ようとするのを、亭主は腰へすがりつくようにして必死にひきとめた。
「危い……お危うございます。何といっても、敵は名前の通り人間ばなれのした男、おけががあってもなりませんし、それに後難も恐ろしゅうございます」
「離せ！　鬼神太郎といっても、結局同じ人間だろう。今度こそ彼を討ちとって、庶民の害を除くの

だ」
亭主のひきとめるのをふりきって、十兵衛は表へとび出した。
眼の前をいま通りすぎた一騎は、火のついた松明を何本か手に持ち、それを投げては火事を起させようとしているらしい。
その次にとんできた一騎の乗手をねらって十兵衛は小柄を投げた。
ねらいはきまって、眼をやられ、転り落ちた男の方には見むきもせず、すばやくはなれ馬のあぶみをおさえ、鞍の上に飛びのると、ぐるぐる輪がけをかけながら、
「鬼神太郎はいずれにある！　鬼神太郎はどこにいる。この柳生十兵衛光厳が刃にかけて仕止めてくれるわ」
と叫びつつ、三池典太の鞘をはらった。
答えはなかったが、十兵衛は眼に見えぬ敵を追って辻から辻へかけぬけた。
四五丁ばかり行ったところで、燃え上る炎に照らされて指揮をとっている一人の大男を見つけると、
「汝が鬼神太郎か？」
「おお、貴様が柳生十兵衛か。我等の邪魔をするつもりか」
鬼神太郎は、馬をひらりとひるがえし、二間あまりの槍をしごいて十兵衛に突きかけて来た。
もちろん、武芸十八番には、通ぜぬところのない十兵衛だが、この勝負は、やはりいくらか勝手が違った。徒歩と徒歩、真剣と真剣の勝負なら、もちろんどのような敵をむこうにまわしてもひけはとらないが、いまうばったばかりで気心の知れない馬に乗り、しかも数人の敵を同時にひきうけての争

いは、勝負というより、戦の形相さえおびている。
　二尺八寸の大刀が、まだ相手の身にもふれぬうちに、二間あまりの長槍は、すでにこっちの馬の胴腹をえぐっていた。
　ひひんと高くいなないて棒立ちになり、それから前足を折って倒れた馬から投げ出されながらもさすがに十兵衛は、全然体制を崩さなかった。
　次々に襲って来る長槍の攻撃を、右に左にはらいのけながら、馬と馬との間を縫って、ふたたび鬼神太郎へ迫ろうとした。
　この執拗な逆襲に、鬼神太郎もいくらか恐れをなしたのか、
「みなの者、ひきあげ、ひきあげだ！」
　と叫んで、馬首をひるがえした。
　さすがの柳生十兵衛も、これを、ひきとめるすべはなかった。また、それを追いかけて見たところで、奔流のような馬群の足にかなわぬことはわかっている。
「鬼神太郎と申したな。勝負はいずれつけようぞ」
　胸にこみあげて来る欝憤を、十兵衛は風に託して、その後姿へたたきつけていた。

半裸女の死体

　勝負としては、こちらに分のある引分けといってもいいだろうし、また、火事は数カ所に起ったが、鬼神太郎が一物をも奪わずに逃走したのは、前例もないことだったから、被害をのがれた村人た

ちは十兵衛にかぎりない感謝の言葉をあびせたが、彼は欝々として楽しまなかった。
「いや、たかが山賊野盗の類を相手にして、一太刀で倒しきれなかったのは、たとえようもない、こちらの不覚だ」
　宿場の役人、本陣の亭主たちを前にして、こうつぶやいたのも、ただの謙遜などではなく、彼としては偽りのない本音だったに違いない。
「そうだ。拙者といっしょに参った静枝という女——あの女はどうしたな？」
　鬼神太郎の名から連想して、十兵衛がたずねると、亭主は申しわけなさそうに、
「実は先刻おたちでございましたが」
「出発したと？」
「はい、左様でございます。ちと急な用事があるので、今夜泊っているわけには行かぬ。明朝でもお目にかけてほしいといって、この手紙を置いてゆかれましたが」
　と亭主のさし出した手紙を手にとりながら、十兵衛は激しい疑惑と悔恨とに襲われた。
　女の一念が、時として、何物でもおさえきれないほどの激しい力を示すことは、彼にもわかっているつもりだった。
　だが、十兵衛ほどの達人でも持てあましたようなこの凶賊を、しかも百人という大勢を相手にまわして、単身その山塞へしのびこもうというのでは、万に一つも生還の見込みはあり得ない。
　そのことは、まるで子供に噛んで含めるようにくわしく言い聞かせてやったはずなのに、むこうも一応は納得したはずなのに、何がこの女をかりたてて、このような暴挙を企てさせたのだろう？
　置手紙にも、もちろん、はっきりしたことは書いていなかった。ただ、美しい筆蹟で、十兵衛の厚

意を謝し、どうしても初一念を思いきれないために、山塞へ向うという意味の文句がしたためてあるだけだった。

「馬鹿な女だ……」

さらさらと巻紙を巻きもどしながら、十兵衛はつぶやいた。

だが、深い事情までは知らない役人たちはそれを全然べつの意味にうけとったらしい。十兵衛の恋慕を嫌って、宿を逃げ出したように解釈したようだった。

十兵衛は、そういう他人の顔色などは、気にも止めないように、

「今夜は幸い事なきを得たが、このような山賊をこれ以上のさばらせて置いては、衆人のためにもならぬ。明日は、細川家より兵を借り、一挙その根拠地をふみつぶそう……」

「おおせはまことに御もっともではございますが……」

と、役人は恐る恐る、十兵衛の顔色をうかがいながら、

「その山狩は、これまでにも、何度となくくり返したのでございます。ただ、何しろ敵は山野のかけひきには、この上もなく馴れた盗賊ばかりで、こっちが攻めれば深く引き、山奥にかくれて姿を見せませぬ。また、こちらが引けば、何所からともなく現れて、追撃して来るという戦法――味方の犠牲はいたずらに多く、敵の死命を制することは出来ないのでございます」

「なるほど、追えば逃げる。追う手を休めれば、また現れてこちらを悩ます――蝿のような相手ではどうにもならぬと申すのか？」

十兵衛は、相手を軽蔑するような、かすかな笑いを浮かべながら、

「それでは、明日、夜の明けるのを待って、拙者が単身出かけよう。数が多ければ、敵も用心して逃

げもしようが、一人と見たら、逆に小勢と侮って襲撃して来よう。それこそ、こちらの望むところだ」

と自信に満ちた声でいった。

もちろん、柳生十兵衛としては、前に静枝をあのようにたしなめた手前、不用意に案内も知らぬ山路へふみこんだわけではない。

小柄で馬からうち落された部下には、十兵衛直々に、鋭い訊問が続けられた。

その結果、鬼神太郎は、現在ここから六里ほど上ったあたりの大岩窟に、部下たちとともに立てこもっていることが確認されたが、十兵衛を驚かしたのは、それよりほかのことだった。

この鬼神太郎が襲おうとする場所には、まずその部下が姿を変えてしのびこみ、警戒の有無や、収穫の見込みをたしかめた上で、狼火で合図をするのだという。

とすれば、この宮原宿にも、当然そういう密偵が、昨日のうちに潜入していたはずなのだ。

その探索は役人たちにまかせ、熊本城へ急使を立てると、十兵衛は夜の明けるのを待って宿を出た。

途中で、悲鳴をあげて、これ以上は一歩もおとも出来ないといい出した案内人を捨てておいて、溪流に沿った小路伝いに足を進めて来ると、正午頃には、ちょっとした山の盆地に出た。

そこには異様なものが立っていた。さすがの十兵衛も、思わず眼を疑ったくらいの凄惨な光景が、その眼前に展開されていたのだ。

白木の柱が縦横十文字に組みあわされ、地上に高く立っている――その上には、若い女がしばりつけられ、半裸の姿で死んでいた。

海松(みる)のようにたれた髪の毛の間からのぞいて見えるその顔は、まるではじけた石榴(ざくろ)のよう――どこの誰か、素姓のわかることを恐れて、めったやたらに切り刻んだのではないかと思われる。
「静枝？」
その死体の主に思いあたって、十兵衛は慄然としてしまった。ちょっとさわって見た感じでも、殺されてから、それほど時はたっていないようだし、女の身で夜の山路を急いで来たのを朝になって発見され、なぶり殺しにあったのではないかと思われた。
その時、ひゅーんとうなりをあげて飛んで来たのは一本のかぶら矢だった。
十兵衛はすばやく身をひるがえして、この矢をかわしたが、女の死体の足のあたりに突っ立ったこの矢の柄には、文が結びつけてある。
「矢文か？」
十兵衛は、あたりに気をくばりながら、その矢文をとってひろげて見た。
――この山はわが領土なり。汝、早々に下山せずばこの女と同様の目にあうべし
鬼神太郎
と、墨の色もまだ生々しく書きしるされている文は、予想通りの脅迫状だった。
「なに、このような子供だましに」
と笑って十兵衛は文を捨てた。
それから更に足を進めて、ふたたび林へ入ったとき、たちまち十兵衛の周囲には、雨のような矢がふりそそいで来た。
杉の木立を楯にとって、この矢の雨をよけながら、十兵衛は小石を投げて応戦した。

まるで、猿のように、木の枝の上にひそみ、矢をはなっていた敵は、この妙技に一人々々とたたき落された。
いかに身軽な山賊たちでも、真向から礫(つぶて)をたたきつけられ、一丈も高いところから転り落ちてはひとたまりもない。
或いは気絶し、あるいは岩に頭を打って即死し、あるいは身動きも出来ないほどの大怪我をして、敵対しようという者もなかった。
その中の一人を選んで、十兵衛は三池典太の切先を喉につきつけ、
「さあ、鬼神太郎はどこにいる？　彼の本拠はどこなのだ？」
と問いただした。
「あと、十四五丁。この道を進んだところの岩山に……」
戦意とともに、口をきく気力もなくしてしまったらしい。
相手の声はまるで幽霊のつぶやきのようだった。
「それで、あそこに殺されている女は、やはり静枝か？　父の仇、江島権太夫を討とうとして、ここまで上って来たところを発見されて、返り討になったのか？」
男は黙ってうなずいた。その顔には、まざまざと死の影がただよいはじめていた。
「このような悲惨な最期をとげるのも、もとは其方どもの心がけから――あわれと思うがぜひもない」
とつぶやきながら、十兵衛はふたたび林の中へ足を進めた。

教えられた通りに十四五丁歩いて来ると、道は岩場の間に出た。

そのあたりの岩壁には、大きな岩窟がいくつも口を開き、天然自然の要害となっている。その入口のあたりには、焚火をたいて、何かの獣を料理したようなあとがあるが、人の気配は全くない。

「はて、拙者のやって来たことを知って、風をくらって逃げ去ったか?」

十兵衛はひとりごとをもらしながら、黙ってその場で考えこんだ。

彼の独自の作戦では、一人と見せて油断させ、敵を本拠に釘づけにして、一挙にこれを全滅させようという考えだったが、そのまた裏をかかれて城を明けわたされては、どうすることも出来なかった。

これ以上、妙に深追いして、山間に道を失っては、兵法の極意にもそむき、鬼神太郎を討ちとるどころか、彼自身の生還も期し難くなる。

といって、このままここに止まって、夜となるのを待っても、必ずしも敵が帰って来るとは思えなかった。

どうしようかと、彼が思案に迷っていた時、突然鋭い呼子の笛の音が鳴りひびき、それと同時に十数匹の山犬が眼を光らせ、牙を鳴らして、岩を乗り越え、こちらへ襲いかかって来た。

恐らく、物かげにかくれた鬼神太郎の手下たちが、強敵の来襲と見きわめて、飼いならした猛犬を鎖から解きはなし、十兵衛を噛み殺させようとしたのだろう。

さすがの十兵衛もはっとした。たとえ、いかなる達人でも、数人の敵に、同時に前後左右から襲いかかられては勝目もない。剣の極意は、その敵の攻めのわずかの遅速を利用し、一時に一人だけを相手にするということにあるのだが、同時に数匹の獣を敵にまわすということには、それ以上、はるかに大きな危険があった。

それを悟った十兵衛は、はっと近くの洞穴へ飛びこんだ。一時に一匹ずつを相手にするのなら、三池典太を抜くまでもない。

京吉則の鍛え上げた十三本鯨骨、一尺二寸の鉄扇をかまえて、飛びこんで来る山犬の眉間、眉間と打ちのめした。

一撃一匹――狙いは微塵も狂わずに、数匹の死骸を入口に横たえると、さすがの山犬も恐れをなしたように、くるくるとその場に輪を描いて走りまわり、遠吠えしてこちらを威嚇しようとしているが、飛びこんで来る勇気は完全に失ってしまったらしかった。

そのうちに、ふたたび呼子の音が聞え、犬の群は尻尾をまいて走り去った。

「うむ……」

あたりを見まわしながら、洞穴を出ようとした十兵衛は、危険を感じて飛びのいた。

その眼前には、山崩れのように、大小無数の岩が降って来た。

きっと、正面切っての攻撃では勝目がないと悟った鬼神太郎の一味が、この洞穴の上から石を転がし落し、十兵衛を生埋めにしようとしているのだろう。

どんな達人名人でも、頭上からこんなものを落されては一たまりもない。十兵衛は洞穴の奥に身をひそめ、

「降ると見ば積らぬ先に払えかし
　雪には折れぬ　青柳の枝」
柳生流極意の秘伝をいいあらわした一首の和歌を口ずさみながら、静かに時を待っていた。
だが、間もなく尽きると思っていた、岩塊の滝には少しの絶間もなかった。後から、後から、奔流のように落下して来る岩、石、土砂は、見る見るうちに、洞穴の入口をふさぎ、光をさえぎって永久に十兵衛を暗黒地獄の真ん中へ葬り去ろうとしているようだった。
「南無三宝！　これはしてやられたか」
さすがの十兵衛も歯ぎしりした。たとえ、柳生流の奥儀の中のどのような秘術を探っても、この物凄い攻撃を食い止めるすべはなかったのだ。
入口はたちまちふさがれてしまった。
漆(うるし)を流したような暗闇の中に、静かに坐って、気息を整えながら、十兵衛はこれからの方策を思案しつづけた。
――これで自分も死んで行くのか？　誰も知らないこの山中で、このまま冷たい白骨となって……
――思えば、こちらの行動も、あまり冒険すぎたかな？　それにしても、敵ながらあっぱれな戦法だ。理詰、理詰に攻めつけて、十兵衛ほどの侍を、この洞穴へ追いこむとは。
――救援隊はどうなるのだ？　あの手紙を見れば、細川家としても、わしに領内で死なれては、後日のとがめも恐ろしいと思って必ず救援隊はむけるだろう。だが、そういう助けがやって来ても、果してわしがここにとじこめられたことを発見してくれるだろうか。

いろいろな妄想が、幻のように十兵衛の頭に浮かんでは消え、消えてはまた浮かんだ。
――静枝、わしはそなたのことを愚か者だと呼んだが、考えて見れば、わしの方がそれ以上愚か者かも知れないな。
と、われを忘れて、十兵衛がつぶやいたときだった。
「そこにおいでなさるのは、柳生十兵衛様ではございませぬか？」
思いがけなく、どこからか、聞きおぼえのある女の声が聞えて来た。
十兵衛も思わず自分の耳を疑いながら、
「そなたは、そなたは静枝ではないか？　生きていたのか？　どうしてここに？」
「はい……夜道をかけて、どうにかここまではたどりつきましたが、夜が明けて見つかってはまずいと思い、この洞穴の奥に身をかくしておりました……そこへ、山崩れのような地ひびきがしましたので、びっくりして、はい出して来たのでございます……」
「うむ」
と十兵衛は唇を噛んだ。それでは、あのはりつけになっていた女の死体は、静枝ではなく、べつの女のものだったに違いない。
せっかく、自分が助け出そうとしてやって来たのだから、静枝が生きているのは、何より嬉しいことだったが、二人とも、こうして洞穴の闇の中に、脱出もかなわぬ囚われの身となっているのでは、その嬉しさを味わっている余裕もなかった。
「拙者は、ここへ来る途中、裸の女が、はりつけにされて殺されているのを見とどけてな。顔は跡形もないくらい、無惨にたたきつぶされていたから、誰ともわからなかったが、鬼神太郎が住んでいる

と評判の高い山奥へ入りこもうとするような物好きな女もそれほどあるまいから、あの死体はそなたではあるまいかと思っていたのだ」
「わたくしは、めったなことでは死にませぬ――だが、あなた様こそ、わたくしのことをあれほどお叱りになられたくせ、なぜ御自分ではおひとりで、このような所まで、おいでになったのでございます」
「男と女とは立場が違う。実は昨夜、あの宮原宿は、彼等の一味に襲われたのだ。拙者も外へ飛び出して、大した被害もなく追いはらったが、その惨忍なやり方を見るにつけても、このような悪人をはびこらせておくのは、民のためにならぬと思ってな」
　自分では正直なことをいっているつもりだが、洞穴の壁の反響のせいか、その言葉は十兵衛自身の耳にさえ、妙に白々しく聞えた。
「ただ、それだけでございますか？」
　静枝の声は、十兵衛の胸に、匕首を突き刺すように響いた。
　これが、いつもの彼ならば、そのほかには何の目的もないと、冷たくつっぱなすところだろうが、生還を期せられない死地に追いこまれたため、いくらか気も弱くなっていたせいか、
「はははは、そのほかに目的がないとはいえないな。そなたの行為が、あまりにも無謀なことにあきれながらも、もう一度あいたい、出来るなら、鬼神太郎の魔手から救って、拙者が助太刀してやっても、仇討の本懐をとげさせてやりたいと思って、ここまで追って来たのだから」
「十兵衛様、それはまことでございますか？」
　静枝は泣いているようだった。女だけしか理解も出来ない激しい情感が、その言葉の一言一句にみ

なぎっていた。
「嘘はいわぬ。生きて帰るという見込みがなければ、人はおのれを偽る必要もなくなるのだ」
「十兵衛さま！　わたくしは、静枝は嬉しゅうございます……」
やわらかな女体が十兵衛の胸に崩れ、膝の上で大きく波打った。漆のような暗黒も、むせるほど強い女の肌の香に満されて、おぼろ月のにおう春の夜の花園のようにも思われたのだ。

死の脱出

　それからどれだけ時が過ぎたか。恋の陶酔からさめて、十兵衛は初めてわれに帰ったように、
「静枝、そなたはおかしいとは思わぬか？」
「何が……何が不思議なのでございます？」
「このように、入口は蟻のはい出る隙間もないほど、見事にふさがれてしまった。それなのに、先程から少しも息苦しくならないのはどういうわけだろう？　この洞穴は、どこかで外界と通じている。恐らくはこの奥深く探って行けば、どこかに人間の出入り出来るぐらいの穴が開いているはず。行こう、そこまで――たとえ、多少の危険はあっても、ここにこのまま止り手をつかねて死を待つよりはいいだろう」
「十兵衛様！　わたくしは……このまま、ここで死んで行きとうございます」
「なぜだ？　どうしてそのようなことを申すのだ」
　静枝はその問いには答えようともせず、ただ激しく、激しくしゃくりあげた。

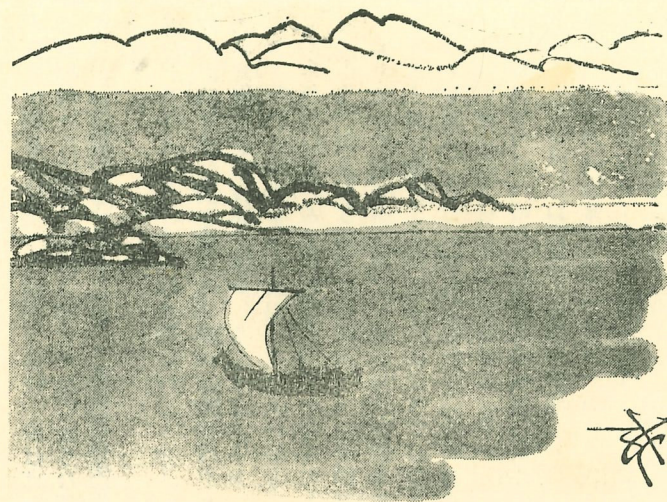
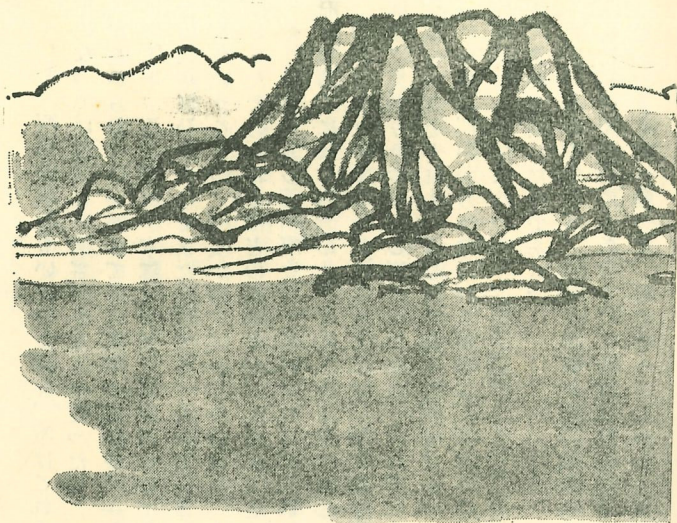
その心の奥を読みとろうとして見たが、その謎は十兵衛にも解き切れなかった。強いて心を鬼にして鞭うちはげますように、
「さあ、参ろう。たとえ、地獄へ堕ちるとしても、ともどもに」
と静枝の手をとり、片手では岩肌の壁を探りながら、闇から闇へ、奥へ奥へと進んで行った。
ふしぎなことに、空気は次第に清々しくなって来た。そして、眼前には、さっきの入口と同じぐらいの大きさの穴が外部に通じているのが見えた。
あの洞穴で、どれだけ時を過したのか、外の景色はもう黄昏の色に包まれている。
「十兵衛様?」
「何だ?」
「このまま飛び出しては危うございます。もう少し暗くなるまで待って――それとも、わたくしがまず、物見に出て、それからになさってはいかがでございましょう?」
「そなたに、そのような危いまねはさせられぬ」
十兵衛は大きく首をふった。
「最初から、もちろん手加減するつもりなどはなかったが、あの洞穴で一旦死んだと考えれば、いよいよ心もかるくなった。この上は、鬼神太郎を始めとして、手下の者を一人残らず屍の山を築かねばならぬ……そなたも父の仇と見たら遠慮なく拙者に声をかけるがよい。たとえ短いちぎりにしても、そなたの父はわしにとっても義理ある仲だ。助勢して目出たく本懐をとげさせようぞ」
「はい……」
とは答えたものの、静枝の声には、わずかな躊躇の響きがあった。

「そなたはいったいどうしたのだ? 拙者の言葉も聞きいれず、単身ここまで、賊の本拠へのりこんだそなたが、ただの女に帰ってしまったのか」
「そうかも知れませぬ……この洞穴へ入る前のわたくしと、いまのわたくしとでは、全然べつの女のような気がいたします」
静枝の言葉の裏にかくされていた大きな深い秘密には、十兵衛も感づかなかった。
「まあ、よい、話は後でゆっくりいたそう。いまのところはそのような感傷に耽っている暇はないのだ」
三池典太の鞘をはらうと、外の様子をうかがっていた十兵衛は、間もなくぱっと足もとの岩を蹴り、外の広場へ飛び出した。
もちろん、鬼神太郎の一味が、この抜穴を知らないはずはない。いつ、こっちへ逃げ出して来るかと手ぐすねひいて待機し続けていたのだろう。この一瞬をねらって、十兵衛の全身には、雨のような矢が集中して来た。
これが普通の人間ならば、たちまち針鼠のようになって倒れたことだろうが、さすがは十兵衛、その大半は刀のさばきではらいのけ、残りはすばやい身の動きでかわし、わずかに袖に二三本の矢をとどめたまま、この広場をつっ切って、山刀をかまえて待っている賊の一味の群の中へとおどりこんだ。
刀と刀、剣と剣との撃突ならば、もう十兵衛には恐れるものもなかった。このような至近距離からの白兵戦では、心得のない多勢は、たがいに味方の動きを妨げあって数の威力も発揮出来ない。
その間隙を十兵衛は突きに突き、刀にまかせて斬りに斬った。二十人あまりの一団を斬り伏せたの

も、ほんの一瞬の出来事だった。
「何と、腑甲斐ない者どもだ！」
十二三間はなれた岩の上に立って、この有様をながめていた鬼神太郎は歯ぎしりした。
そばに立っている部下の手から長槍をうけとって、ぴゅーぴゅーと二三度素ぶりをくれると、たたらを踏んで十兵衛の眼前へ迫った。
「あなた！　あなた！　この勝負は！」
その時、何を思ったか、後の方で固唾をのみながら、十兵衛の奮戦を見つめていた静枝はまるで狂ったように、この場へ飛びこんで来た。
「どけ！　邪魔だ！」
「この裏切者！」
十兵衛と、鬼神太郎はほとんど同時に叫んだ。
十兵衛は片手で、胸にとりすがろうとする静枝の体をつきとばし、片手青眼、柴がくれの構えも崩さず、鬼神太郎の槍先へ進んだ。
「かッ！」
突き出し、引き、また突き出して来る槍はまるで稲妻のようだった。だが、三池典太の一刀は、鉄壁のように、この鋭い攻撃をはらいのけ、身には一指もふれさせない。
「やッ！」
七八合目の一撃を、十兵衛はすばやく横に飛んでかわし、一太刀に鬼神太郎の長槍を、千段巻のあたりから切り飛ばした。

「おのれ！」
鬼神太郎もさる者だった。威力をなくした武器は惜しげもなく投げ捨て、腰の野太刀をひきぬいて、十兵衛の強襲を迎え撃った。
一撃、二撃、火花を散らす死闘が続いた。だが怪力無双といわれる鬼神太郎でも、力を唯一のよりどころとする野性の剣法では、柳生流の秘術をきわめつくした十兵衛には敵すべくもなかった。
四合と刃をあわせぬうちに、鬼神太郎は獣のような叫びをもらし、きりきり舞いをして倒れた。その死骸を眼下に見おろしながら、十兵衛は呆然とわれを忘れたような手下たちに向って叫びかけた。
「われは柳生十兵衛光厳なるぞ。鬼神太郎は汝等の見る通りわが手にかけて討ちとった。おとなしく、武器を投げ出し、降参すればよし、さもなくば、この場を去らせず、屍の山を築いてくれよう」
鬼神と異名をとったほどの首領でさえ、あざやかに斬り倒されたくらいだから、手下たちも完全に闘志を失ってしまったようだった。手むかう者は一人もなく、みな武器を捨てて、十兵衛の前に平伏したが、十兵衛の視線はその人々の頭上を越えて、はるか彼方の岩頭にたたずんでいる静枝の上にとまった。
「静枝、そなたはどうしたのだ？」
と声をかけながら、十兵衛が近づいて行くと、静枝はそれをさえぎるように叫んだ。
「なりませぬ！　わたくしにお近づきになってはなりませぬ。わたくしは罪深い、汚れた女でございます」
「それではやはり、鬼神太郎の一味だったのか？　彼が裏切者と叫んだのは、そういう意味からだったのだな？」

「はい……父の仇討と申したのも、口から出まかせの作りごと、宮原宿の様子を探りに山をおりた途中あなたにおあいして……ほほほ、わたしのような毒婦が、あの洞穴の中で、あなたを討つことを命令されて、それが出来なかったというのも、女として、一生一度の恋かも知れませぬが……」
「うむ……だが過去は過去、未来は未来、そなたは自分の行動によって、その過去におかした罪をつぐなったのではないか？　鬼神太郎があれほど脆く倒れたのも、勝負の途中にそなたが針を吹いて眼をねらい、彼を悩ましたせいではないか？」
「わかりませぬ、わたしには、自分の心がわかりませぬ。今まで抱かれて寝た男が、一度にあれほど憎くなるとは、思ってもいなかったことでした……」
十兵衛が一歩進むにつれて、静枝は一歩後ずさりした。
岩と岩との間を渡るはげしい風に、いつの間にか乱れた長い黒髪をなびかせながら、
「裏切者の運命は、あなたが御覧になった女のように、生きながら顔をつぶされ、裸のはりつけでございます。そのおきてに従えば、わたくしはもう生き永らえておれませぬ」
「その掟を作った鬼神太郎は、もはやこの世におらぬのに」
「人は死んでも、掟は心の中に生きています。心では、これほどあなたをおしたいしているのに、体はまだ、あの人のことを忘れきれない……女というものは何たる魔性、何という罪深いものでございましょう」
自分では罪深いものというが、この時の静枝の姿は、十兵衛の眼に、実に神々しくうつった。
「十兵衛様！　では、おさらば！」
「待て！　死ぬな！」

十兵衛が岩をかけ上った瞬間、静枝の姿はぱっとかき消すように岩頭から消えた。風の音、はるか眼下の早瀬の音にまじって、すすり泣くような悲鳴が聞えたと思ったのも一瞬、谷間を包んだ宵闇の中に、天女が舞い降りるような、はなやかな女の衣裳の色が浮かんで消えたのもわずか一瞬のことだ。
「南無……」
片眼にかすかな涙を浮かべ、深い谷間をのぞきこみながら、十兵衛はこのあわれな女の霊魂に手向けの一言をつぶやいていた。

第七話　薩摩の密使

狂える剣豪

夜空にはまるで芝居の書き割りのような満月がくっきりと浮かびあがり、地上には、うつろな風にあおられて枯葉がいくつもかさこそと乱舞しつづけていた。

あたりはひっそりと静まりかえっていて、時々遠くの農家から、牛の鳴き声が、静けさを破ってぶきみに聞えて来るだけだった。ここは肥後と薩摩の国境の近く、南国といっても晩秋の風はさすがに肌寒く、この風だけがわがもの顔に吹きぬけて行く街道は、もの淋しさを通り越して、ひどく陰気な感じさえした。

この街道は、九州の西岸をつたって、薩州鹿児島へ至る要路なのだが、もう夜になっているためか、薩摩藩がきびしい鎖国政策をとって、他国の者はめったに領内への出入りを許さないためか、この本街道を歩いているのはただ一人、薩摩のほうへ向って行く旅装束の侍だけだった。

その足どりは、いかにも飄然としているし、体も小兵、しかも隻眼、夜目遠目には、まったく風采の上らない一介の武芸者という感じだが、残された片眼の射るような眼光と、自ら身にそなわった威厳と貫禄は、さすがに常人とは思われない。

それも道理——この人物は、諸国漫遊というふれこみで、その実は、西国諸藩の内情を探索する隠密行を続けている、柳生家一万石の長男、柳生十兵衛光厳だったのである。

大阪陣でこそ、豊臣方には加わらなかったが、関ケ原では島津家は、西軍の有力部隊として、その壮烈な戦いぶりに、終始徳川方をなやまし続け

た。

そして、西軍の敗色もいよいよ濃く、戦はこれまでと見たときの退き方も、いまもなお、人の語り草になっているほど、あざやかなものだった。

左右からおそいかかって来る東軍の部隊を、一部隊がひきうけて、最後の一兵が戦死するまで釘附けにする。その間に、本隊は貴重な時をかせいで何里か退却する。つづいて襲撃する次の部隊は、べつの支隊がひきうけてまた全滅する、その間に本隊が退却する。

こういうことが、何度か何十度かくり返され、さすがは薩摩隼人よと、徳川家康に膝をたたいて感心させたといわれるほどの豪勇さが、あますところなく発揮されたのである。

それ以来、もし徳川家を倒す者があれば、それは島津家をおいてほかにはない――というのが、幕府の当事者には、信念のような先入主となってしまった。

徳川家にとって幸せだったことには、関ケ原での手傷がまだ癒えなかったのか、それとも豊臣家の前途に見切りをつけてしまったためか、大阪陣にも立ち上らず、九州一円をさわがせた切支丹騒動、天草の乱のときにも、さしたる動きは見せなかった。

しかし、江戸からはなたれる隠密は、薩摩への潜入に成功したものはあっても、一人として無事に生還したものはなかった。「薩摩飛脚」という言葉は、いつか隠密たちの間には、死の旅とおなじ意味に使われ出したのである。

幕府が業を煮やして、剣豪十兵衛を強行偵察のような任務にかり出したのもこのため、従って、十兵衛の長い隠密行のうちでも、この鹿児島の城下こそ、最後の目的地ともいえるのだった。

道が大きく右へ曲って、林の中へさしかかったとき、十兵衛は急にぴたりと足をとめた。

「うむ……殺気……」

ひくくつぶやいて、片眼で闇を見すかすように、あたりを鋭く見まわしたとき、まるでそれが合図でもあったかのように、前後左右からばらばらと十数人の黒い人影がおどり出て、白刃で彼を包んで来た。

「曲者！」

十兵衛はするどく一喝して、ぱっと最初の何人かの攻撃をかわし、抜く手も見せずに、腰の愛刀、三池典太の鞘をはらうと道ばたの大樹を背にとって身がまえた。

「夜盗か？　それとも命をねらう闇討か？」

もちろん、どのような武芸の達人でも、敵が無数の人間をくり出し、長時間に疲れを待つという戦法に出て来るならば、どうしても敗北はまぬがれない。

十兵衛が、ここからすぐに逆襲せず、一瞬の間合をおいたのは、敵の総兵力がどの程度か、見さだめようとするための当然の行動だったには違いないが、次の瞬間、その口をはなれた言葉は、何とも意外なものだった。

「三蔵法師のむかしから、天竺へまいる道すじには、妖怪悪鬼異形の変化が出没すると聞いてはいたが、早くもここにあらわれたか。いずれにせよ、天竺にまいって、釈迦に剣法を教えようという天下の大豪傑の拙者に、剣をもって刃むかうとは笑止千万じゃ。よくもまた、身のほどもわきまえぬ馬鹿者だけが、これほど多勢集ったものじゃな」

と、大声でどなり散らしたのである。

「佯狂（ようきょう）！　このにせ気違いが！」

左右の二人は、それにおとらぬ大声でわめくと、気息をそろえて斬りこんで来たが、その瞬間、ぱっと飛びのいた十兵衛の刃は、闇に青白い円弧を描いて一閃し、二人を地上にのけぞらせていた。守勢から攻勢に転じた十兵衛は、自ら敵の剣陣の中へとびこみ、つづいて三人を、眼にもとまらぬ早わざで斬ってすてると、

「まだまいるか？　唐天竺は申すにおよばず、地獄から極楽、三千世界のうちに、あまねく鳴りひびいている拙者の手並みをこれ以上、見たいと申すのか？」

と、またしても大げさなせりふを吐いた。

しかし、何といわれても、すでに五人の仲間を倒されているためか、この一味は相かわらず無言のままだった。といって、同志が倒れても、一分もひるむ色も見せず、次から次へと強襲を続けて来る執拗さは、関ケ原退陣の際に示した薩摩武士の豪勇をしのばせる面影さえあったのである。

右から、左から、息つぐひまもない攻撃は続いた。しかし、武道をもって、天下に名をうたわれた柳生家の中でも特に群をぬいて、不世出の剣豪とさえいわれる十兵衛の刃の前に、敵するものはほとんどなかった。

やや互角に近い激闘を続けたものは、一味の首領と思われる六尺近くの大男だけだった。

「其方なかなかやりおるのう。ここで拙者に斬られなければ、拙者が天竺へ渡った後では、日本でも一二をあらそう名人となれるかも知れぬがな……」

二合、三合、他人の眼にはどちらが優勢ともきめきれないような死闘を続けながら、十兵衛がこういうことを口走ったのはやはり技心の両面で、彼が一段も二段も、相手を上まわっていたためだろう。

この相手も、やはり相当の使い手だけに、そういう事実には気がついたようだった。おりもおり、提灯をさげて、むこうの道の曲り角に姿をあらわした十何人かの人影が、ばらばらと、こちらへむかってかけつけて来たのを見て、戦機は去ったと感じたのだろう。

「退け！　退くのだ！」

血を吐くような声で叫ぶと、刃をかえして自分から林の中へとびこんだ。後にのこされた四人ほどの黒装束も、四方にわかれて、林の中へかけこんだが、土地にも不案内のことだし、十兵衛もあえてそのあとを追おうとはしなかった。

地上に倒れた死体の数を読みながら、刀の血を懐紙で拭っていたとき、後からかけつけて来た侍たちの中にまじっていた中年の人品いやしからぬ武士が進み出て、

「旅のお方とお見うけいたすが、狼藉者にとりかこまれていた様子、おけがは……」

といいかけたが、とたんにぱっと飛びじさって、地上に平伏した。

「その二蓋笠の御定紋は……柳生十兵衛光厳様と拝察いたしましたが……」

薩摩に入る

「はははは、よくわかったな。いかにも拙者は柳生十兵衛、日本はおろか、唐天竺にも類のない剣豪だが、して其方は何者じゃ。五百羅漢の一人なのか？」

十兵衛はまだ、狂ったような言葉をやめなかった。相手は手をついたまま顔をあげて、

「はっ、申しおくれましたが、私は川野新左衛門と申しまして、薩州島津家、家老の末席を汚しおる

ものでございます。十兵衛様には諸国漫遊の旅に上られ、西国筋にも足を進められましたことは、かねがね噂にも聞きおよんでおりました。いずれは薩摩へもおいで願えるものと、心待ちにいたしておりましたが、かような場所でお眼にかかれるとは夢にも思いませなんだ。御無礼は平に御容赦を」

「うむ、どうせ天竺へ参る道すがらのことでもあり、薩摩へも立ちよって、桜島なりと見物したい所存ではあったが……いまここで、総勢数万の魔物の軍勢と大合戦をまじえては、当るを幸い、切り倒し、なぎ倒し、大勝利をおさめたところなのじゃ」

「はっ……さすがにおみごとなお手のうち、主君の命によりまして、熊本細川家へ急使に立ちましての帰途、夜陰にここを通りあわせましたのが幸い、夜目遠目とは申しながら、十兵衛さまのあざやかなお刀さばきは、つぶさに拝見いたしました」

薩摩なまりは、言葉の端にもうかがわれるが、新左衛門はあくまで丁重な態度だった。

「ただ、知らぬこととは申しながら、将軍家御手直役、柳生但馬守様の御曹子、十兵衛様におそいかかるとは、呆れかえった賊でございますが、十兵衛様には、その正体をお見やぶりでございましょうか?」

「見やぶれなくて何とする。唐国も北宋の代、伏魔殿にとじこめられていた百八の妖星が、呪文がやぶれて八方に散じ、百八人の豪傑となって梁山泊の山塞にたてこもり征伐にむかった拙者に襲いかかったのであろう」

相もかわらず、奇想天外、人を食ったような返事だったが、新左衛門は呆れ顔の従者たちを眼でたしなめて、

「なるほど、さようでございましたか。私めはまた、切支丹伴天連の一味のしわざかと思っておりましたが?」

「なに、切支丹の残党と申すのか?」

十兵衛はきらりと眼を光らせた。

「はっ……島原の乱の残党は、きびしい詮議の眼をのがれて、今もなお、九州一円に潜伏いたしておるらしゅうございます。彼等にとっては宗門復興の機会は、天下の動乱をのぞいてはほかにございませんゆえ、いかなる策を講じても、幕府と諸藩の間をさこうと、必死になっておるようでございます。それゆえ、ここにあらわれた一味も、あるいはそれでないかと推察いたしますが……」

「なるほど、それでは最後まで拙者と戦って逃げ出した賊の大将は、天草四郎時貞であったかも知れぬな。そういわれて見れば、刀をうちふりながら、十字を切っていたような気もするがたしかに其方の申すことはもっともだ……」

十兵衛は、阿呆のような顔をしてうなずいていた。

その数日後、十兵衛は川野新左衛門の一行とともに、薩摩の城下、鹿児島へ入った。

たとえ、表むきは、発狂のため、家督をすて、その後病気の快癒とともに、諸国漫遊の旅に上ったのだということになっていても、それを頭から信用するような阿呆な家老は、どこの藩にもいなかった。

十兵衛来る――という知らせを聞けば、あわてて礼をつくしてこれを出迎え、彼が領内にとどまっているあいだは、まるで腫物にでもさわるような丁重な待遇をつくして、お家の安泰をはかったのである。

薩摩藩も決して、その例外ではなかった。川野新左衛門の急報とともに、さっそく丸に十文字の島津家の定紋を打った駕篭が、供ぞろえといっしょに、十兵衛を途中まで迎え、賓客の礼をとって、鹿児島まで案内して来たのだった。

城下では、あまり大きくはないが、家老格の屋敷が一軒あけられて、十兵衛の宿舎にあてられた。用人、護衛の侍から、中間腰元女中にいたるまで、手おちなくとりそろえられて、彼の到着を待っていたのである。

この屋敷で旅装をとき、一風呂あびて、道中の埃をおとしているうちに、城代家老の伊織刑部が、挨拶にやって来たという知らせがあった。

衣類をあらためてあって見ると、相手は年のころ、五十前後いかにも薩摩の古武士らしい風貌の人物だった。

「柳生十兵衛様には、ようこそ当地へお立ちより下されました。主君になりかわり、城代伊織刑部、御挨拶にまかり越しました」

さすがは、一藩の柱石ともいわれるだけに、態度、挙動、言葉の端にいたるまで、一分一厘の隙もない。刑部は主君の伝言として、当地には心おきなく、ゆるゆる御滞在されたいという意味の言葉をのべ、さらに逗留中の直接の御用は川野新左衛門がうけたまわるが、最後の一切の責任は、自分にあるといいきった。

「なお、十兵衛様におさしつかえがございませんならば、主人には明日、城内白書院におきまして、御対面申したきよしにございます」

刑部が口上をのべ終ると、十兵衛はていねいに挨拶をかえし礼の言葉を述べてから、

「唐天竺への便船が定まるまで、しばらくはここに逗留させていただくが、それについてはいささか注文がござる」

と切り出した。

「はっ、何なりと御意のままに」

「貴藩の御厚意は、何ともかたじけないが、拙者は身軽気ままの漫遊に出ているのだから、かた苦しいことはいっさい御免なのじゃ。見れば、この屋敷にも、人相のわるい侍がごろごろしているが、これではどうも、囚人のような心持がして、工合が悪いのじゃ」

「はっ、当藩としては、屈強の侍だけをえりすぐり、十兵衛様御身辺の警護を命じたのでございますが……」

「はははは、これが余人なればともかく、拙者のような剣豪に、警護などは断じて無用、どこかへ見物にまいるとしても、後から閻魔の庁の使いのような面がまえの侍がついて来るのでは気づまりでならぬ」

「お言葉ではございますが、当領内へお入りになる直前にも、切支丹の一味と思われる者どもにお命をねらわれたということも」

「それは田舎の夜道の話だ。この鹿児島の御城下にそのような曲者が出没するようでは、それこそ島津殿の過怠になろう。貴殿たちの責任もまぬがれまいな」

気違いのような放言をほしいままにするかと思えば、今度は理詰め理詰めに切り返して来る十兵衛の応待には、刑部も大いに手こずったようだったが、とにかく護衛の侍だけは城中にひきあげさせることを約束して帰って行った。

しかし十兵衛の気ままで奇矯な行動は、もうその夜からはじまった。側用人のとめるのも聞かず、ぶらりと町へ出て行くと、彼は道の真中で大声をはりあげた。
「われこそは天下の大豪傑じゃが、誰ぞ、拙者のために、唐天竺まで、道案内をいたす者はおらぬか」

隠密と美女

物見高いは江戸の常という言葉もあるが、そういう野次馬根性は、この鹿児島でもおなじことなのだろう。たちまち、十兵衛のまわりには、黒山のような人が集って来た。
といっても、気違いに刃物をぬかれてはと思っているのか、大きな環を作って十兵衛をとりまいたまま、誰一人近づく者もない。
「こりゃ、拙者は見世物ではないぞ。道案内を探しておるのだが、早う申し出ぬか。それとも薩摩の田舎者には、拙者の言葉が通じないのか?」
業を煮やしたらしい十兵衛は人ごみの中へとびこむと、いきなり一人の町人の襟首をひっつかんだ。
「其方はどうじゃ?」
「お、お、お助け、下さいまし……」
相手はすっかり真青になって、がたがたふるえているばかり、十兵衛はたちまち、その男をつきはなすと、

「ええ、そのような臆病者といっしょでは、海山千里の道中はならぬわ」
といいながら、次の相手を物色した。
こういうことを四五回くり返しているあいだに、ようやく十兵衛は恰好な相手を見つけたらしい。げらげらと喉をならして笑うと、
「其方の面がまえは、釈迦に似ておるな。おそらく天竺の生れであろう。ええ、知らぬとはいわさぬぞ。拙者の道案内をいたさぬというならば刀の銹にいたすまで……それがいやなら、ついてまいれ……」
と、きき腕をつかんで、さっさと人ごみの中からひきずり出した。
「お、お、お助け下さいまし……」
男は、真青になって叫んだが、次の瞬間には、声をひくめ、十兵衛の耳にささやいた。
「若殿様、ようこそ御無事で……」
「其方も、よくぞ今まで頑張り通した……」
十兵衛も声を小さく絞って答えた。
この男は、黒崎源五郎といい、将軍直属の隠密の一人、一年ほど前から、薩摩に入りこんで、その内幕を探っているのだ。
十兵衛はこうして鹿児島へ入りこむ早々、大胆不敵な方法によって、彼と連絡をとろうとしたのである。
「いま、この国には、たいへんな隠密が、豊臣の残党、それもたいへんな大物が、潜伏しているようでございます。ただ、くわしいことはまだつかめませんが……」

「馬鹿を申せ！　天竺と極楽は違うではないか。三途の川を渡ってすぐ行けるところではないぞ！」

大声にわめき散らしながら、十兵衛は頭の中で、必死に思案をめぐらし続けた。大阪陣から数えてすでに二十四年――この間も、豊臣秀頼が、実は大阪城で戦死したのではなく、落城寸前の城からのがれ、薩摩へわたって島津家にかくまわれているのだという噂はあとを絶つこともなかった。もちろん、根も、葉もない風説といえばそれまでだが、西南の辺境に盤踞する島津藩には、徳川家にしても、眼のとどかないところは少なくない。

秀頼その人はおらずとも、誰かその忘れがたみというような人物はいるのではないか、もしその人物が長じてから、この大藩を動かして、謀叛にでも持ちこむようなことがあれば、それは天草の乱などはくらべものにもならないような天下の大乱の原因となる――というのが幕府首脳部のたえず憂いていることだったのである。

「これは島津家最大の秘密、その在所も鹿児島からほど遠からぬ様子、島津侯自身の意志か、家臣の誰かのはからいかは、まだわかりませぬが……」

源五郎はとぎれとぎれにささやいていた。たしかに、これは万一公けになるならば、島津家七十七万石の興亡にもかかわるような大秘密だった。この話の真偽をつきとめることは、今となっては、十兵衛にも最大の急務と思われたのである。

「十兵衛さまいかがなされました?」

人ごみをかきわけて、この時、姿をあらわしたのは川野新左衛門だった。おそらく、十兵衛が町中であばれ出したという報告をきいて、とる物もとりあえずにかけつけて来たのだろう。その顔には、苦渋の色がみちあふれている。

「なんでもない……いま、この男に、天竺の道をきいていただけだが、針の山とか血の池とか、わけのわからぬ事ばかり申しおってな。ええ、行け、もう其方に用事はないわ」

十兵衛は源五郎をつきとばすと、また阿呆のような顔をして笑った。

屋敷に帰って来た十兵衛は、それから口もきかず、深い思いにふけっていたが、寝所へ案内されたときには、さすがにあっと眼を見はった。そこには年のころ十七八の美女が恥しそうにうなだれている。眼鼻だちもととのい、色も白く、しかもいやしからざる人品は、田夫野人の生れではないことを、無言のうちに物語っている。

「誰じゃ。そなたは?」

「はい……川野新左衛門の息女、深雪と申すふつつか者でございます」

「川野殿の御息女か?」

十兵衛はふたたび大きく溜息をついた。もちろん、寝間にこういう女をはべらせるというのは、十兵衛の閨さびしさをなぐさめようとする意図のあらわれとしか思えない。一つの饗応政策としては、誰でも思いつきそうな方法だが、いやしくも一藩の家老ともあろう者が、自分の娘を人身御供のようなこの役に備えるとは、常識では理解もできないことだった。

「なるほど、川野殿の御息女とあらば、いまさら、あらためて礼儀作法を説いて聞かせるにも及ぶまい。男女七歳にして室を同じゅうせず――という諺もある。今夜は、ここからお帰り願いたい」

「はい」

深雪としても、ここで十兵衛に操をささげるということは、よほどの覚悟なしでは出来なかったの

だろう。といって、いったんその線をふみきってしまってから、男にはね返されるということは、それに数倍する苦痛かも知れなかった。

唇をかみしめ、はらはらと涙をこぼしながら、ていねいに両手をついて挨拶し、立ち上ろうとする姿を見たときに、十兵衛の頭には稲妻のように、ある考えがひらめいた。

隠密の道はすなわち非情の道、喜怒哀楽、恩愛憎怨、その他あわせて百八といわれるもろもろの煩悩をふみにじって、氷のような冷酷さ、鬼のような非情に徹しきらねばならないものと自分はいつも、部下に教えて来たのだが、彼自身はまだその精神に徹していないと思ったのだ。

隠密にとって、女は道具にすぎない。自分の目的貫遂のために、利用しぬけばそれでいいのだ。

いかに、十兵衛の報告如何が、七十七万石の運命を支配するほどの力を持っているとしても、一藩の家老が、ここまで犠牲をはらおうとするからには、島津家の裏には、黒崎源五郎の報告を、さらに上まわるほどの大秘密が覆在しているのではないかと思われる。

そして、この深雪という女を、自分のものにするならば、あるいは寝物語のうちにも、その秘密の断片をさぐり出し、その中核を把握することも出来るかも知れないのだ。

「待たれい。深雪どの」

十兵衛は、鋭く声をかけた。

「何で、何でございましょう？」

その眼には、ふしぎな恐怖の影がある。男を知らぬ生娘が、ある瞬間にさらけ出して見せる一つの激情のあらわれだった。

「そなたは、自分の立場がわかっておられるのか？　父の言葉に従って、それで後悔することがある

とは思われぬのか？」

「薩摩は男の国でございます。女は、男に従って、はじめて生きがいがあるものと、わたくしは、いや、薩摩の女は一人のこらず、子供のころから教えこまれております……嫁して、夫にしたがうのは、とうぜんのことでもございましょうが、それまでは、父親の言葉にそむくことは、娘として、許されてもおりませぬ」

「深雪どの……」

十兵衛は、女の手をとって、すすり泣く女体をじっと、自分の胸へひきずりこんだ。

非情の極の熱情が、はげしくその身をおそって来た。十兵衛も、深雪も、しばらくは無言のまま、二人ともことなる心の嵐の中に、その身をまかせていた。

御前勝負

その翌日、十兵衛は新左衛門の案内で、城中に入り、当主島津家久に対面した。

もちろん、家久としては、賓客に対する礼はつくし、十兵衛としても、七十七万石の大名に対する儀礼はつくしたのだが、型通りの拝謁がおわると、家久は親しく、十兵衛に盃をすすめ、

「時に十兵衛殿、貴殿が当地へ来られたのも、これは何かの奇縁であろう。ぜひ、一手なりとも、家中の者に指南をかねて柳生流の極意を見せては下さるまいか」

といい出した。

「なるほど、薩摩は武の国と聞きおよびましたが、ただいまの殿の一言は、その藩の当主にふさわし

いお言葉でございます。はばかりながら、これから唐天竺に渡航し、釈迦や阿弥陀に対しても、武道の極意を伝授しようと考えております拙者、いやしくもこの日の本においては、剣の道を学ぶために、拙者以上の良師がおるとは思えませぬ」

最初から偽気違いをよそおっているのをいいことに、十兵衛は虹を吐くような気焔をあげた。

「なるほど、それではいずれ日を定めて」

「いや、拙者は天竺渡航を急ぐ身でございます。思いたったが吉日とか、他日といわず、今日これから御指南申しあげましょう」

「急ぐな……」

と家久は笑ったが、その顔はまんざらでもない表情だった。庭前の白砂の上には、すぐに幕がはられ、勝負の場所が設けられた。

もちろん、十兵衛も、伊達や酔狂で、こういうことをいい出したわけではない。薩摩入りの直前、彼をおそった黒装束の一味は、あるいは薩摩の家臣ではないかと、彼は最初から激しい疑念をいだいていた。

昨夜、黒崎源五郎から聞いた話がほんとうで、薩摩の国にそれだけの大秘密がかくされているならば、領内に入る直前に、彼を倒そうとしたのもわからないことではない。

薩摩に伝わる独自の剣法は示現流、その流派の使い手とは、今まで一度も手あわせしたこともない十兵衛は、あの夜の刺客たちの剣法がそれだといいきる自信はなかったが、たとえ木剣の立ち合いにせよ、これから勝負をして見れば、秘密の一端を見やぶることも不可能ではないと思ったのである。

相手にえらばれた侍たちは、総勢十人——誰を見ても、かなりの使い手と思われる屈強の面がまえ

の男ばかりだった。

「十兵衛殿、まずは一応、これだけの人数を集めておいたが、お気のむくまで、御指南下されい」

家久の言葉に、十兵衛はうなずいて、

「いや、せっかくの機会ゆえ、これらのお方とのこらずお手あわせいたしましょう」

というなり、ひかえている藩士たちに、

「一人ずつ、遠慮なくかかってまいれ、拙者を柳生十兵衛と思うではない。主君の敵とも親の仇とも思ってうちこんでまいるがよい」

といいわたした。

この言葉は、薩摩隼人といわれるような、その激しい気性に油をそそいだようなものだった。たちまち、最初の侍が、

「十兵衛様、御免!」

と叫んで、手負い猪のような勢いでつっかけて来た。その猛突をかるくかわした十兵衛は、下段にかまえた木剣を上へ一閃させた。相手の木剣は、たちまち宙にはねあげられた。大人が子供をあしらうような、あざやかな勝負のきまり方だった。

「盲突だけが剣ではない。次!」

十兵衛は一言寸評を加えると、次々に相手をかえ、どれもただ一太刀で勝負をきめた。

もとより、剣聖とまでいわれる十兵衛と、互角に近い立ち合いの出来る人間が、一つの藩にそれほど沢山いるわけはないのだから、これも当然の結果だが、島津家久としては、こうして家来たちが次次にかるくあしらわれるのを見ては、内心おだやかならない気持になったとしても無理はなかったろ

う。
　最後の一人が、簡単に小手をとられると、
「十兵衛殿、さすがは見事なお手のうち、わしもいい勉強をいたしたが、ただ、相手が弱すぎたのが御不満であろうな」
　と脇息から身をのり出していうのである。
「はい、いささか……」
　十兵衛が微笑とともに答えると家久は左右を見まわして、
「大里伴蔵はいかがいたした？　彼ならば、おなじ敗れるとしてもこれほど見苦しい負けはいたすまいに」
「恐れながら、殿。大里伴蔵はただいま病の床にふしております。二三日のうちには快癒いたすものと思われますが」
　下座から川野新左衛門が答えた。
「さようか。病いとあらば、いたしかたあるまい。それでは、西本兵之助は？」
「彼はただいまお役目にて岸和田村へ」
　と新左衛門がいいかけたとき、
「西本兵之助め、これにございます。ただいま帰城つかまつりました」
　と庭の片隅から澄んだ声が聞えて来た。
　十兵衛は、きっとその相手を見つめたが、中肉中背、年のころ二十あまりのこの侍は、どう見ても、あの時、夜襲をかけて来た一味の首魁（しゅかい）とは思われなかった。

「十兵衛様、お手やわらかに……」
　やがて身支度をととのえた兵之助は、十兵衛の前に進み出て声をかけた。
「うむ、遠慮なくかかってまいれ」
　ぴたりと青眼のかまえをとった兵之助を見て、十兵衛は内心ぎくりとした。もちろん、数多い藩士の中から、主君がわざわざ指名するだけあって、今まで相手にした人々とは、構えから格段の開きがある。その木剣の尖端からほとばしる気魄だけでも、なみなみならないものが感じられた。
　十兵衛は、柳生流の極意、水月のかまえで兵之助に相対した。両者はぐっとにらみあったまま、しばらくは一歩も動かなかった。
　十兵衛としても、勝てない相手とは思わなかったが、この相手には万一のさばき違い、柳生流にいう破月の変を警戒する必要があったのである。
　かすかに、木刀と木刀の尖端をふれあったまま、二人は少しずつ足場をかえた。いつの間にか、兵之助の足は、十兵衛を中心として大きな円弧を描き、二人は東西の位置をかえていたのである。
　そして一瞬、兵之助の剣尖には、木剣とは思えないほどの殺気がみなぎった。それは、十兵衛がこれまで数多く経験した真剣勝負にもかつてないほどすさまじいものだった。
　次の瞬間、兵之助の一撃は、十兵衛の眉間をおそった。ぱっと、その木剣をはらいのけ、十兵衛が逆襲に出ようとしたとき、兵之助は自分から、武器をすて、一間ほど飛びのいて、白砂の上に平伏していた。
「恐れいりました……手前などの、はるかにおよばぬお手のうちにございます……」
「いや、西本兵之助とやら、なかなか見事な腕前であった。この上ともに、精進をかさねるならば、

「の本でも有数の剣客とはなれるであろう」
「未熟者の手前には身にあまるお言葉……ただただ痛みいるばかりでございます」
十兵衛には、まだ示現流の真髄はのみこめなかった。ただ、一撃のうちあいでは、これがあの首魁の太刀筋とおなじものだとはいいきれる自信もなかった。
十兵衛は、ゆっくりと正面を見まわした。いまの勝負で、いくらか満足そうな顔つきになった島津家久はじめ、居ならぶ家臣たちの中で、伊織刑部一人だけが、蛇のような冷たい眼で十兵衛と兵之助を見つめていた。

ふたりの女

それから三日目の夕暮、にせ気違いの我侭ぶりを発揮して、ぶらぶらと町を歩いていた十兵衛は、向うの町角に立っている一人の女が、じっと自分を見つめているのに気がついた。
二十七か八の年増だが、切れ長の眼いっぱいの濡れたような光といい、その整った顔だちといい、脂ののりきった肌といいその全身からは奇妙な色気があふれている。
ふつうの町人とは違うし、田舎芸者にしては少々出来すぎている。もちろん、武家の生れとも思えない、ふしぎな感じの女だった。
女は十兵衛のほうへ歩いて来ると、かるく小腰をかがめて、そのそばを通りすぎたが、そのあとには、蝶結びにした一枚の紙片がおちていた。
——この女は源五郎の使いかな。

一瞬、十兵衛の頭には、そんな考えがひらめいた。その紙片をひろいあげ、あたりを注意しながら、すばやく眼を通すと、
——柳生十兵衛先生、
先日城内でお相手をつとめた西本兵之助は、実はかくれ切支丹一味、それゆえに、あのようになみなみならぬ力を持っておるのでございます。その彼は、いま先生を宗門の敵とつけねらっておりますゆえ、十分お気をつけなさいますよう。
ゆえあって事情を知る女より——
というような文句が書きつらねてある。
この意外な内容には、十兵衛も思わず顔色をかえた。咄嗟に女のあとを追おうとした彼は、そのとき、べつの男が女のあとをつけていることに気がついた。
それは、黒崎源五郎だった。
ふつうの隠密とは違って、十兵衛は逃げかくれする必要はないかわり、その一挙一動はすべてどこからか、見はられていると思わなければならなかった。十兵衛は、この女の追跡を黒崎源五郎にまかせ、自分は屋敷にひきあげた。
「十兵衛さま、お茶をおたていたしました。ふつつかな点前でございますが、どうぞめしあがり下さいませ」
深雪は黙然として坐りこんでいる十兵衛に茶椀をすすめながら、小声でささやいた。
「かたじけない……」

十兵衛はゆっくりと苦味を味わいながら、
「なかなかおみごとなお点前じゃ」
「おはずかしゅうございます……」
「それはともかく、そなたは顔色もすぐれぬようじゃが、どうかしたのか？」
「…………」
「もしも疲れているならば、拙者のことはかまわず、先に休むがよい」
「十兵衛さま」
深雪は訴えるように眼をあげて、
「あなたさまは、わたくしがおきらいなのでございますか？」
「なにをいわれる。なぜ、そのようなことを」
「あなたさまは、いつもお出かけになってばかり、わたくしの……」
「そなたは、いま拙者のところへ来たことを後悔しているのではないか？」
「いいえ、女というものには、たとえわずかの間にも、一生を賭けて後悔のないような、そんな心になることがございます。たとえ、半月一月でも、あなたさまのようなお方のおそばにおつかえ出来ましたなら、わたくしはもう……あなたさまが、薩摩をおたちになったなら、そのまま髪をおろして尼になるつもりでおりまする……」
泣きくずれた深雪の長い黒髪を、十兵衛は溜息をついて、じっと見つめていた。
同じころ、城山のふもとの一軒家でも、二人の男女がしっかりと抱きあっていた。

男は西本兵之助、女のほうは、十兵衛の前にあの謎の手紙をおとしていった当人だった。女の帯はとけ、胸はあらわにはだけ、その白い体は男の腕の中でなまめかしく蠢動（しゅんどう）していた。
「お藤、いまにそなたは、この色香で、拙者の身をほろぼしてしまうだろうな……」
「兵さまがなくなられるときには、わたくしもおともします。刑部さまの眼を盗んで、こうしておあいするからには、いざとなれば、命をすてるぐらいの覚悟は、とっくに出来ています」
こういう話を聞いただけでは、家老の伊織刑部の思い女の一人が、いつの間にか西本兵之助と深間になって、剣の刃わたりのような危い火遊びに耽っていると見えるのだが、奇妙なことには、男の胸に顔を埋めている女の瞳も、女の体を抱きしめている男の眼も、その言葉とはうらはらな、冷たい鋭い光をたたえているのだった。
それはまるで、憎みあい、呪いあった仇同志が、自分の真意をおしかくして、おたがいに大芝居をつづけているような感じだった。たとえ、男女の愛情が、憎悪とは紙一重のものだとしても、こういう異様な雰囲気は、常識では説明できるものではなかった。
突如として、その矛盾は一気に爆発した。
女の手に、青白く光る懐剣がひらめき、兵之助がそれをもぎとって、荒々しく女をつきとばしたのである。
「とうとう正体をあらわしたな。そなたのような女の手で、この拙者が仕止められると思っているのか？」
畳の上に転がった女の眼には涙もなかった。叫びをあげることとさえ忘れてしまったような、恐怖の色がみなぎっていた。

「いつまでも、お前のねらいに気がつかぬほど、この兵之助は阿呆ではないぞ。伊織刑部の思い女が、ひそかに拙者に思いをかけてと見せかけたのも大芝居。実は、刑部自身のさし金で拙者に接近して来たことは、とうに見やぶっていた。あの忘恩腰抜けの家老が幕府方にこびへつらって、秀千代君をなき者にしようと画策していることもわかっている」
兵之助は、そっと床の刀掛から大刀をとりあげながら、
「お前もその手先の一人に違いない。秀千代君を倒すには、まず警護役の拙者をとねらいをつけて、女の罠をしかけて来たのだろう。柳生十兵衛があらわれたために、その計画も予定より早められたに違いないが、さあ、いっさいを白状いたせ」
刀は音もなく鞘をはなれた。
その鋭い切先は、女の乳と乳との間、一寸ほどの手前でとまった。
「近ごろ、こともあろうに、拙者がかくれ切支丹の一人だという奇怪な噂をひろめている人間もあるような。それも刑部の奸計に違いあるまい。万一、事が露見の暁には、十兵衛をいいくるめ、秀千代君はじめ、我等を切支丹の一味として、討ちはたさせる所存であろう。人間、立場が異なれば、それぞれ意見も異なるのだ。いずれが是、いずれが非と、一口にきめてしまうことも出来まいが……」
お藤の体はふるえていた。
わずか一寸の空間を通しては、剣尖の殺気も直接に心臓を刺戟して来るのだろう。白い肌はべっとりと汗に濡れ、人魚の化身のようだった。
「死ね！」
兵之助の口からするどい一喝がもれた。しかし、剣は逆に動いた。お藤の胸をえぐらんばかりにな

っていた切先は、とたんに逆に上をむいて、天井板に走ったのだ。
しかも、その刃をぐっとひきぬいたとき、それは鮮血にまみれていた。
「曲者！」
お藤のことも忘れたように、兵之助は家の外へとび出した。屋根から下へとびおりて、闇の中へ必死に逃げ出して行く黒い影は、たしかに黒崎源五郎だった。

真夜中に、とと、とと、とんと雨戸をたたく音を聞いて、十兵衛はぱっと寝床を蹴って立ちあがった。
隠密だけが知っている合図だった。
雨戸を開けると、庭先には、どこをどう逃げまわって来たのか、血の気もないほど青ざめた源五郎が倒れている。
「やられたな！」
「殿……秀頼の忘れがたみ……当年二十四の秀千代……真照寺という寺に……家臣の中には、これをかくまうことが……島津家のためにならぬとして……反対する者もおる様子」
言葉はとぎれとぎれだった。しかし、隠密としての一念が、わずかこれだけの報告をもたらすために、この傷ついた身を鞭うって、ここまではこばせたのだろうと思うと、十兵衛も胸のはりさける思いだった。
「殿、ご、ご、御介錯を……」
手当てもとどかぬ重傷であることは、十兵衛にも一眼でわかった。こうなれば、早く苦痛を止めて

やる方が慈悲に違いなかった。
「源五郎、許せ。せめてわが手で成仏せい」
三池典太を一閃させると、十兵衛はとたんに大音声をはりあげた。
「曲者、曲者、曲者なるぞ！」
あわててかけつけて来た用人たちに、十兵衛は、心の激情をおさえていった。
「どこの妖怪かは知らぬが、拙者の寝所へ忍びこみ、数々の怪しき振舞をいたすので、一刀の下に斬って捨てた。いや、天竺へまいるまでには、いろいろ邪魔者が多いわい」

蔭腹さばき

その翌朝、まだ暗いうちに、十兵衛は屋敷をぬけ出すと、城下のはずれの山上にある真照寺を訪ねて行った。
朝霧は深く、微行には都合がよかった。急な山道を登りきって、霧の中にぼんやりと山門のような影が見えて来たとき、十兵衛はぱっと立ちどまった。
どこからともなく流れて来る鋭い気合が、その耳をうったのである。
霧を通して、一人の男が刀をふるっているのが見えた。六尺ゆたかな大男――前に、十兵衛に夜襲をかけて来た黒装束の一味の首魁に違いなかった。
その時、べつの黒い影が、霧の中から浮かび上って、大男の方へ近づいて行った。
「大里、精が出るな。傷はもういいのか？」

それはたしかに西本兵之助の声だった。
「うむ、まだ少しいたむが……こういう危急の場合には、そのことをいってはおられまい。とにかく、我等二人が心をあわせれば、万一の場合には、たとえ相手が柳生……」
「誰だ、そこにいるのは！」
西本兵之助が、するどく叫んで、四五歩、十兵衛の方に進みその姿を認めて、さっと刀をぬいた。
「大里伴蔵とか申したな。先日、御城内での手あわせのおりには、病気の由にて会いもならず、残念に思ったぞ。拙者を迎えに、わざわざ国境を越えて来てくれた礼を申そうと思っておったのだが……」
十兵衛が、重々しい口調でいうより早く、
「もはやこれまで……十兵衛、覚悟！」
大里伴蔵の巨体は、霧をやぶって飛び出して来たが、兵之助はそれをさえぎって叫んだ。
「大里、貴公はまだ手負いの身だ。この場は拙者がひきうける。それよりも、刑部のこともあるゆえ、若君のお身を……」
「争う場合でもあるまい。西本、頼んだぞ……」
悲痛な言葉を後にのこして、伴蔵はふたたび霧の中に消えた。
後に残された兵之助と、十兵衛の間には、激しい死闘が展開された。前の手あわせの時にも十兵衛が見ぬいたように、相手の捨身の攻撃はするどかった。
勝を忘れた戦法だった。せめて、相うちに――というつもりだろう。たしかに、一応の達人が、このような戦法をとるほど恐ろしいことはないのである。

しかも、十兵衛としては、この相手だけに全力を集中できない不利があった。おそらく、あの時、十兵衛をおそって、逃げのびた残党たちなのか、四人の侍がかけつけて来て十兵衛をとりまいた。おそらく、五人そろって、時をかせいで十兵衛を疲れさせ、同時に秀千代と伴蔵に逃走の暇をあたえようとしているのだろう。

時は刻々として流れ、霧はしだいにうすくなって行ったが、激闘はなかなか終らなかった。

ただ、十兵衛が一人の相手を倒した隙に乗じて、西本兵之助がとびこんで来たのが、かえって彼の墓穴を掘った。この一瞬に、勝利の女神は、十兵衛にほほえみかけたのだ。

これが木剣の試合なら、あるいは相うちと見えたかも知れない。しかし、兵之助の剣は十兵衛の左袖を切りさいただけでとどまり、十兵衛の刃は、相手の左胴を深く切り捨てていたのである。

声もなく、兵之助の体は地上に崩れた。そして残された三人は、もう十兵衛の敵ではなかったのである。

山寺は、死闘の終ったあとに人気もなく静まり返っていた。

「惜しい男を殺した……」

十兵衛が、兵之助の死体を見おろして、暗然とつぶやいたとき、山道をかけ上って来た駕篭の中から、川野新左衛門が、はうように転がり出して来た。

「十兵衛さま……いっさいの責任は私に……」

顔にはぜんぜん血の気もない。あえぐような苦しい息づかいだった。

「秀千代君をおかくまいいたしたのも、私の独断……殿はじめほかの重職はあずかり知りませぬ……国境での襲撃も私の指令……剛柔二様の策を使いわけて、秀千代様もお守りし、当家も安泰であるよ

うにと苦心いたしましたが……いまはすべてが水の泡……この上は、お慈悲でございます……一切の責任はこの新左衛門……なにとぞ、主君とお家には、傷がつきませんよう、何とぞ、武士のお情で」

声はしだいにかすれ、しだいにとぎれがちになった。昨夜の源五郎の最期を思い出させるような悲痛な調子だが、十兵衛には、まだその理由が想像できなかった。

新左衛門は、なおも必死の面持ちで、

「大里伴蔵も兵之助もわが輩下……その働きも殿の御意志によるものではなく、私の命令……主君は将軍家に対し、何の異心も持ちませぬ……」

「新左衛門、その方は……」

「秀千代君は、ただいま、私一人のはからいで、大里伴蔵を護衛につけ、琉球へお落しいたしました……もはや、豊家再興の望みもないことは、誰にも明白なことながら、私といたしては、せめてこれまで、お育てした秀千代さまをお救いしたく」

もちろん、十兵衛には、この新左衛門だけが陰謀の責任者でないこともよくわかっていた。これだけ長期の重大事ともなれば、末席の一家老だけの力で出来ることではない。

そして、たとえば伊織刑部のように、藩内にも有力な反対論者がいる現状では、たしかに近い将来には、この薩摩藩が徳川家に叛旗をひるがえすことは考えられなかった。

その上、何よりも十兵衛の心をうったのは、新左衛門の忠誠の念だった。

彼がいったん切腹し、その傷の上を白布で強くまき、ここまでかけつけて来たことは、十兵衛もいつの間にか見やぶっていた。

この蔭腹の訴えを無にすることは、人間としても武士としても、しのびないことだった。

「新左衛門、拙者は天竺へまいる道すがら、数多くの妖怪変化には出あったが、秀千代と申す人物のことについては、一度も耳にしておらぬぞ」
「十兵衛様……」
新左衛門は、はらはらと血の涙をこぼし、
「ありがたきお言葉……これで、私も安心して死ねまする……」
そして、崩れる体を両手でささえ、最期の力をふりしぼって、
「いま一つ、最後のお願いは、娘……深雪のこと……間者のような役ながら、お家のためと……そのうちに、十兵衛さまに、心からの恋情を……いつしか、自分の立場に苦しみぬき、板ばさみのあまり、今朝……自害を」
と、思いがけない言葉をはいた。
「なんと、深雪が自害した?」
「はい、は……私が、手にこそかけね、殺したようなもの……」
新左衛門の気力はついにつきはてたようだった。十兵衛が、その身をだきおこすひまもなく、そのままがくりと前にくずれ最期の息をひきとってしまった。
「新左衛門、立場こそ違え、武士としてあっぱれであったぞ」
十兵衛は涙をおさえてつぶやいた。
いつしか霧は晴れわたり、はるか眼下の鹿児島湾には、碧波の上に、白い帆が一つ、ひときわくっきり浮かんでいた。秀千代や大里伴蔵をのせて、琉球へむかう舟であろうか。
その姿を見つめる十兵衛の隻眼には、いつしか、涙が浮かんでいた。

その数日後、十兵衛は島津家久の前に伺候して、別れの挨拶を告げた。
「長々とお世話になりましたが、いよいよこれから唐天竺にわたり、釈迦に剣法を教え、そのかわりに大蔵経三千巻をもらいうけて来る所存につき、まずはおいとま申しまする。殿には英君、御家来衆も義に厚く情に豊かなお方ぞろいゆえ、御当家はますます御繁栄なさることでございましょう。私も釈迦によろしく、後生安楽を願いあげる所存にございます」

昭和44年4月1日　発行

隠密飛竜剣

著者　高木彬光
発行者　矢貴東司
印刷者　北山　茂

¥ 290.

発行所　株式会社　桃源社
〔103〕　東京都中央区日本橋蠣殻町1—12
電話（666）4001～2番
振替東京　64351番

用紙特漉　北越製紙・市川工場